

北東日本海域における中世陶磁の流通

吉 岡 康 暢

序記

一 中世諸窯の流通圏の画定

1 中世前期

2 中世後期

二 城館および村落遺跡

1 中世前期

2 中世後期

三 墳墓および経塚遺跡

四 港湾遺跡と沈船遺跡

五 陶磁器流通の諸段階と特質

第一段階 第二段階 第三段階

序 記

ここ10年来の「中世考古学」の発展によって、各地で発掘・集積された消費遺跡資料は多様かつ莫大な数量にのぼり、陶磁器類が日本中世の流通経済の実態解明の重要な物証であることは、考古学・文献学の共通認識になったといつてよ⁽¹⁾からう。しかし、中世の陶磁器類の流通問題が考古学会のテーマとして取り上げられたのは、昭和55・56年度の考古学研究会大会が最初で⁽²⁾あり、以後の進展を中世陶器についていえば、瀬戸内の東播窯、東海の瀬戸・美濃窯、常滑窯、湖西および遠東窯、中部高地の中津川⁽³⁾窯の製品について個別的に検討がすすめられているが、なお総括的に論述するに至らない。

中世陶器の流通を考古学的方法で推進するためには、当然のことながら、各窯の製品の流通圏の画定、その前提となる消費遺跡出土品の時期・器種・産地別構成の分析が必要であるが、今後かなりの中世窯の追認が見込まれる上に、珠洲と珠洲系陶器のごとく肉眼による厳密な識別が至難な遺物が各地に存するため、全国の流通状況の大綱を俯瞰しうようになるには、なお相当の時日を要しよう。また、家屋構造が全国的に掘立柱建物を採用した中世では、土壌等へ一時的に投棄された消耗品以外は、使用期間に幅がある溝・井戸ないし建物の周囲に廃棄されるのが普通で、遺構に伴う良

好な一括資料獲得の機会は多くない。加えて、流通の諸画期の評価に要請される陶磁器組成の定量化の統一基準が決めに⁽⁸⁾くいこともあって、資料操作ならびに歴史・経済の問題設定とかかわる理論化など方法論が未定立のまま、全体に分布論の段階にとどまっているのが現状といえる。

ところで、考古学研究会大会で筆者が提示した二つの論点—中世陶器の生産・流通の画期設定と評価、および陶磁器の器種・産地別構成に表徴された分業構造の地域性は、文献学における中世の時期区分と地域区分という古くて新しい論題と深くかかわっていると考える。このことは、近年、網野善彦氏等が文献・考古資(史)料のみならず、広く民俗・言語・人類・美学等多面的な隣接諸科学の成果を織り込みつつ、国家論、社会構造論、ないし環東アジア論の観点から、南北朝期の社会・経済変動あるいは西国と東国といった列島史の根幹にかかわる論題の見直しを意図する、新たな中世史像構築の試索にも連なるであろう⁽⁹⁾。そして、当面する流通問題については、脇田晴子氏の首都市場圏論⁽¹⁰⁾に代表される求心的経済構造説に⁽¹¹⁾対峙する地域経済圏論や、中世前期の閉鎖的な社会的分業説を批判し、中世社会の形成期からすでに広汎な交易関係が展開していたとする所論⁽¹²⁾の提起など、既往の流通論の枠組みの再構成に物質文化の研究を介してどう取り組むかが、与えられた課題となる。

かかる研究現状をふまえて、中世陶器の分布論を構造論に組み変え、各段階の流通機構を規定した海上・内陸の交易媒体者像と運輸形態、庄公経済体制の変質との相互関連等多岐に亘る論点に、間接的にせよ接近するのは、前記の考古学的方法の限界もあって容易でない。小稿は、かつて北東日本海域における中世陶磁の流通を概観した拙文⁽¹³⁾の観点を継承し、(1)12世紀中葉、(2)13世紀後半～14世紀前半、(3)15世紀後半～16世紀前半の3段階の画期設定と、器種(=機能)・産地別組成の競合・補完関係の推移を縦と横の座標軸に据え、前稿で果たせなかった一過的な宗教遺跡(経塚・墳墓等)と、日常的な生活遺跡(村落・城館・市町・港津等)を区別し、それぞれの遺跡での消費のあり方を、階層性に留意しつつ具体的に検討することによって、地域内部ないし地域間広域流通の実態を明らかにするとともに、北東日本海域の特質の抽出を意図している。

なお、本論に入る前に解決しておかねばならないのは、珠洲陶器と珠洲系陶器の弁別の可否である。この問題は、北東日本海域における中世陶器の流通を論ずる際の不可避的な前提作業であることはいうまでもないが、ここでは結論部分の概括にとどめ⁽¹⁴⁾、詳報は別稿に譲る。すでに述べてきた通り、珠洲Ⅰ・Ⅱ期に限って越後・羽後で珠洲系窯が3地区で確認されているが、消費資料からすると会津盆地、庄内平野、

米沢盆地にも須恵器系中世窯が存在したと想定されるので、中世前期の北東日本海域は越前・加賀両窯を含め一国ないし半国程度の狭域分業圏が連鎖し、近国を対象とする珠洲窯の中規模分業圏と複合する流通構造が想定される。製品の流通状況からみて、加賀北部と陸奥には中世窯が実在しない可能性が強い。Ⅰ・Ⅱ期の珠洲陶器と珠洲系陶器は生産技術の差異によってある程度識別が可能であるが、その近似性と調査事例の不足から個々については厳密は期し難い。問題のⅢ・Ⅳ期以降については、器形・技法では識別不能で、考古学的観察所見では珠洲窯産と考えざるをえない。ところが、珠洲窯の確認窯跡数は19基にとどまり、Ⅳ期以降窯跡数の拡散・増加が顕著で5～6単位群の稼動が認められるとはいえ、なお、北海道南部を包括する北東日本海全域を一円的に市場化したとするには、生産状況に問題を残している。そこで、陶片胎土の蛍光X線・放射化分析による理科学的な産地同定法によってみると、珠洲窯前半期に帰属する越後・笹神背中灸窯（Ⅱ期）との肉眼ならびに理科学的分析による胎土識別はほぼ可能であるが、羽後・駒形窯（Ⅰ期）、大畑窯（Ⅱ期）とは、K・Ca・Rbの各因子による蛍光X線分析のみでの相互識別は不完全で、放射化分析によるNa因子の有効性が予知されているのが現状である。しかし、後半期のⅣ～Ⅵ期に編年される北海道と秋田・山形・新潟・富山各県の消費遺跡試料14件59点の分析結果は、殆んど例外なく珠洲窯の領域におさまリ、Ⅲ期ないしⅣ期以降、珠洲系諸窯は廃絶し、北東日本海全域が珠洲陶器の一円的分業圏となるという考古学的所見を支持しているので、以下この結果を前提に据えて論をすすめたい。

一 中世諸窯の流通圏の画定

北東日本海域における中世陶磁器の時期・遺跡別組成の検討に入る前に、当地の在地中世諸窯一珠洲と珠洲系窯および越前・加賀他の瓷器系窯の製品の分布から各々の流通圏を画定しておこう。以下、中世前期と後期に大別して作業をすすめるが、珠洲陶器の編年軸を基準とし、前期をⅠ期（12世紀後半代）、Ⅱ期（13世紀前半代）、後期をⅢ期（13世紀後半代）、Ⅳ期（14世紀代）、Ⅴ期（15世紀前半代）、Ⅵ期（15世紀後半代）、Ⅶ期（16世紀前半代）と統一的に表示する。また、特定窯の製品の分布密度（当該地域の陶器総体で占める量比）により、(A)特定陶器が主体をなす1次流通圏（80%以上）、(B)複数陶器が拮抗状態にある2次流通圏（80%以下10%以上）、(C)特定陶器が一定量ないし微量にとどまる3次流通圏（数～10%以下）、(D)点的分布を示す外縁圏に区分する。さらに、中世窯は流通圏の規模によって、(A)列島規模に商圈を拡大した

遠隔地窯（常滑窯・瀬戸美濃窯他）、(B)近隣数国に商圏を確保した近国窯（信楽窯・亀山窯等）、(C)一国ないし以下の商圏にとどまった在地窯で、長期間稼動したもの（CⅠ，加賀窯等）と一時期稼動したもの（CⅡ，笹神窯・中津川窯等）がある。上記の類型設定に従えば、加賀窯は在地窯，越前窯は近国窯，珠洲窯は、基本的に中世前期の「近国窯」から後期には「遠隔地窯」へ発展したことになる。

1 中世前期

陸奥から越後北部には、半国程度を単位とする珠洲系窯⁽¹⁵⁾の分業圏が連鎖していたと考えられるが、各窯の製品の流通範囲は不透明である。羽後・駒形窯（秋田県山本郡二ツ井町，Ⅰ期）の製品は、高岩山遺跡（同荷上場，甕・片口鉢1組他），切石遺跡（同切石，壺R種AⅡ類）出土の蔵骨器をはじめ，断片的ながら前田館跡（大館市比内町，甕片），十二所館跡（同十二所，甕片）など米代川中・下流域の採集資料中に見出すことができ，陸奥国境に近い長森遺跡（同花岡町，壺T種，R種AⅡ類）の完好品も同窯の特徴を具備している。また，雄物川流域では河口部の下夕野遺跡（秋田市，片口鉢片），長者館遺跡（河辺郡河辺町，壺T種），横手盆地の北野遺跡（平鹿郡雄物川本町，大壺T種），院内沢遺跡（雄勝郡羽後町，壺T種），閑居長根遺跡（横手市金沢町，R種AⅡ類）の経外容器・蔵骨器など完好の単独遺物が点的ながら羽後北部を中心に分布し，特に流麗な櫛目波状文で加飾し，捻りのきいた大形の把手を付した四耳壺（壺R種AⅡ類）が本窯の指標となる。さらに，駒形窯の特徴をそなえたものは，津軽平野東辺で散見し，源常平遺跡（西津軽郡浪岡町），杉館遺跡（同平賀町）のR種AⅡ類は上胴の加飾の違いを除けば，法量・器形および把手の形状が近似し，相内遺跡（北津軽郡市浦村）の壺R種B類も本窯産の可能性⁽¹⁸⁾があるが，なお基本三種による珠洲製品との厳密な対比が必要である。一方，駒形窯の類品は，峠越えに北上川を南下し，陸中・平泉柳御所遺跡（岩手県平泉町，片口鉢）の常滑・渥美を主体とする陶器群中でも検知され，外縁圏の拡がり⁽¹⁹⁾をみせている。なお，駒形窯の製品の分業圏の画定は，仙北郡太田町地内にもⅠ期の窯跡が存する模様なので今後の精査が必要である。また，後続する大畑窯（仙北郡南外村，Ⅱ期）の製品は，前記下夕野遺跡，後城遺跡（秋田市寺内）など雄物川河口部の遺跡のほか，手取清水遺跡（横手市），竹原遺跡（平鹿郡平鹿町上吉田間内），小出Ⅰ遺跡（仙北郡南外村）など点的ながら横手盆地一円におよび，一国規模の流通圏が確認できる⁽²¹⁾。

越後は，阿賀野川北岸に背中灸窯（北蒲原郡笹神村，Ⅱ期）が存在し，Ⅰ期の窯跡も稼動していたはずであるが，越後全域に散在する須恵器系の経外容器⁽²²⁾（12遺跡26点），

蔵骨器（6遺跡約24点）には器形の変化に富む壺類が転用されていることもあって珠洲製品との弁別は難しく、本期を含む消費遺跡も番場遺跡（後出）が報ぜられているにすぎず、今後に期さざるをえない。笹神背中炙窯の製品と目されるものは、生産地から径6km圏内に所在する水原・堀越両館跡（北蒲原郡水原町、甕・片口鉢）をはじめ、信濃川南岸の小木城跡（三島郡出雲崎町）⁽²³⁾等で散発的に検知されていることに、海運の利便を考慮すれば、Ⅰ・Ⅱ期とも珠洲製品の分布の主たる東限は越後南部あたりが想定できよう。もっとも、第1段階でも珠洲窯が安定的成長期を迎えたⅡ期には、珠洲製品と観察されるものが東北から越後にかけてかなり目立つようになるのが注目される。現況では、羽後・金谷遺跡⁽²⁴⁾（山形県飽海郡平田町）、馬場遺跡（由利郡仁賀保町）、根井遺跡⁽²⁵⁾（同矢島町）等器形・加飾・胎土で大畑窯と弁別できる壺R種C類（Ⅱ期）が存在すること、越後・岩船沖、寺泊沖、名立沖等からⅡ期を中心とする揚海陶器が発見されていること（後述）からすると、越後以東では珠洲と珠洲系諸窯の製品が混用される、流通の二重構造とでも呼ぶべき競合状態におかれていたと推察される。かかる状況から珠洲製品の一元的広域流通への転換が厳密にどの時期に達成されるのかは今後の課題であるが、例えば転換が完了したとみられるⅣ期前半の暦年代基準資料とした、岡林遺跡（小千谷市）、小黒沢遺跡（十日町市）の壺T種⁽²⁶⁾についていえば、口縁形態、叩打技法等は本期通有とできるが、前者は口胴指数が大きい広口壺、後者は小さい狭口壺で、かつ内壁に板状具による特異な調整を施すなど珠洲窯ではみられないもので、なお検討の余地を残している。

越中が珠洲窯の創業期よりその流通圏に組み込まれていたことは、能登半島内浦から富山湾岸が一衣帯水の地域圏を形成するという地理的条件のほか、Ⅰ・Ⅱ期に帰属する経外容器（5遺跡10点）、蔵骨器（7遺跡約11点）で特に型式学上珠洲製品として疑義を挟むものが存せず、Ⅲ期に下るが器形と製作・焼成技法が酷似する上に、略同一図形の花押状刻文を有するK種大壺が、石川県輪島市岩蔵寺伝世品と富山県中新川郡内から出土している（第29図）⁽²⁷⁾ 事實は、そのことの端的な傍証例とできよう。また、じょうべのま遺跡C・K地区、越中東部の北陸自動車路線内（中新川郡上市町地区）⁽²⁸⁾で検出された神田・若宮B・江上Bの諸遺跡（後述）、および弓庄城遺跡⁽²⁸⁾の中世前期村落では、珠洲製品の各器種がⅠ・Ⅱ期の段階で遺跡によっては土師器碗皿類をも上廻る26～60%の高い比率を占めるが、常滑製品は全く見出せず、加賀南部以西と異なる珠洲製品単一の1次流通圏として出発したことが知られる。事情は能登も同様であって、12世紀中葉～17世紀代に亘る西川島遺跡群を構成する中世前期の4遺跡⁽²⁹⁾で、土師器碗皿類を除く中世陶磁器で占める珠洲の量比（破片総数）は、大町縄手遺

跡の58.1%から御館遺跡の42.4%まで、ほぼ50%強の安定した数値を示しており、総計1,000点を超える貯蔵・調理器のうち常滑、越前製品は甕が各1片存するにすぎない⁽³⁰⁾ところによく示されている。ちなみに、能登で確認した12～15世紀代の越前製品は次掲の8遺跡にとどまり、加賀製品に至っては坪野墳墓（羽咋郡志賀町）の1例にすぎない⁽³²⁾。

第1表 能登出土越前陶器一覧

	出 土 地	種 別	器 種	数 量	時 期	註 他
1	羽咋市寺家	墳 墓	壺(略完形)	1	I	
2	鹿島郡鹿島町武部	蓄 貨	壺(完形)	1	IV	
3	七尾市細口・八幡	墳 墓	甕(略完形)	1	V・VI	註159
4	鳳至郡柳田村百万脇	村落?	甕片	若 干	V・VI	
5	〃 〃 黒川	伝 世	甕(完形)	1	V・VI	
6	〃 穴水町川島・大町	村 落	甕片	1	IV	註30
7	〃 門前町道下	門前町	甕・壺片	約 320	IV～VII	註191
8	珠洲市正院町	村落?	甕片	若 干	IV～VI	

それでは、こうした珠洲製品の一次流通圏の南限はどのあたりに求められるであろうか。加賀北部北半で中世前期の良好な遺跡が知られていないため明確でないが、中世後期の北部南半が2次流通圏を形成していたことから、中世を通して加賀北部中央の大野川あたりを予測して大過ないと思われる⁽³³⁾。

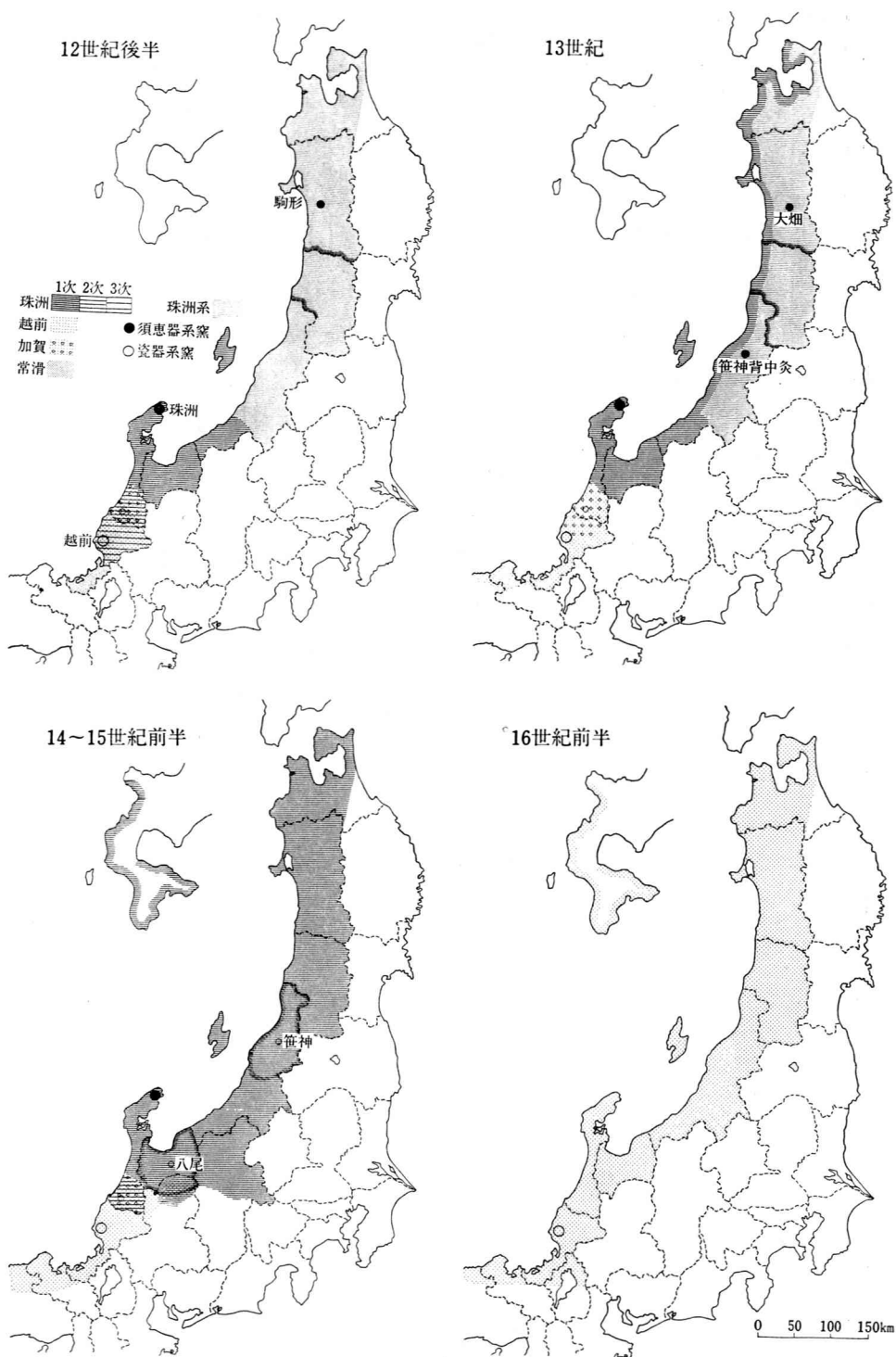
次に、加賀窯を擁する加賀南部から越前へかけての状況は、加賀南辺に所在する三木だいもん遺跡（加賀市三木町）、勅使遺跡（同勅使）の両館跡⁽³⁴⁾では、I期は常滑甕が主体を占め、珠洲甕・壺・片口鉢がこれを補完し、加賀製品の比率は低い。この組成はII期で一変し、常滑製品は姿を消し加賀製品の比重が高まるものの、珠洲製品が片口鉢だけでなく甕壺類がかなり目立ち、基本三種が移入されている点で中世後期の組成と異なるが、珠洲陶器の2次流通圏として捉えられる。そして近年、I期の流通現象からみた加賀窯の開窯年次の後発性を裏づけるように、三筋文壺に具象される瓷器系をモデルとしながら刷毛目仕上げ、還元焰焼成の基本三種の実在が注意されている⁽³⁵⁾（第10図13・14）。12世紀前半代の東播系に帰属する越前南部の宮谷窯（武生市）とともに、加賀・越前両窯に先行して稼動した一過性の在地窯は、瓷器系定着に至る複雑な技術伝播のあり方を示す。かかる流通様態は、加賀を南北に分かつ手取川南岸に所在する辰口西部遺跡群⁽³⁶⁾（能美辰口町）下開発E・G地区では、II～IV期の幅をもつ総破片数の組成比ながら、加賀製品が甕の63%、片口鉢の41%、貯蔵・調理器全体の57%を占めるにとどまり、珠洲窯が片口鉢の45%、甕の17%、全体の25%でこれにつ

ぎ、越前窯は甕を主体に全体の17%にすぎない。これを徳久・荒屋地区のⅡ期に限ってみると、片口鉢を主体に加賀製品にほぼ匹敵する珠洲陶器が検出でき、中世前期における珠洲製品の強力な流通と越前窯の生産力の低さの一端が窺われる。したがって、珠洲製品が開窯時から広域的商圈を開拓したのに対し、加賀陶器の1次流通圏は実在しなかったことになる。越前の消費遺跡としては、西辺の深山寺経塚(敦賀市)、坂ノ下墳墓⁽³⁷⁾(同)で12世紀代に常滑の基本三種が卓越し、越前は前遺跡で皆無、後者では13世紀代に主体になるのに対し、南部の南屋敷墳墓⁽³⁸⁾(鯖江市南井町)では12世紀代に一定量存するものの、12~13世紀代の加賀四耳壺・中甕が蔵骨器の24%を占め、越前窯の生産力の低さが注意される。北部では平泉寺傘下の有力寺院豊原寺華蔵院遺跡⁽³⁹⁾(坂井郡丸岡町)で13世紀代の加賀甕片が若干確認される程度で、実状は詳らかでない。しかし宗教遺跡についてみると、加賀南部の長滝経塚(能美郡辰口町、Ⅱ期、R種AⅡ類)、柴山墳墓(加賀市、Ⅱ期、壺T種)で各々加賀片口鉢、越前片口鉢と共伴し、古府、軽海両墳墓(小松市、Ⅰ・Ⅱ期、R種A~C類)で一定量を占め、越前でも朝倉山経塚(坂井郡川西町、Ⅰ期、壺T種)、江波6号経塚⁽⁴⁰⁾(丹生郡宮崎村、Ⅰ期、片口鉢)など点的とはいえほぼ全域におよんでおり、定量的な把握が難しいものの、中世後期と異なり越前も珠洲窯の3次流通圏と考えられる。

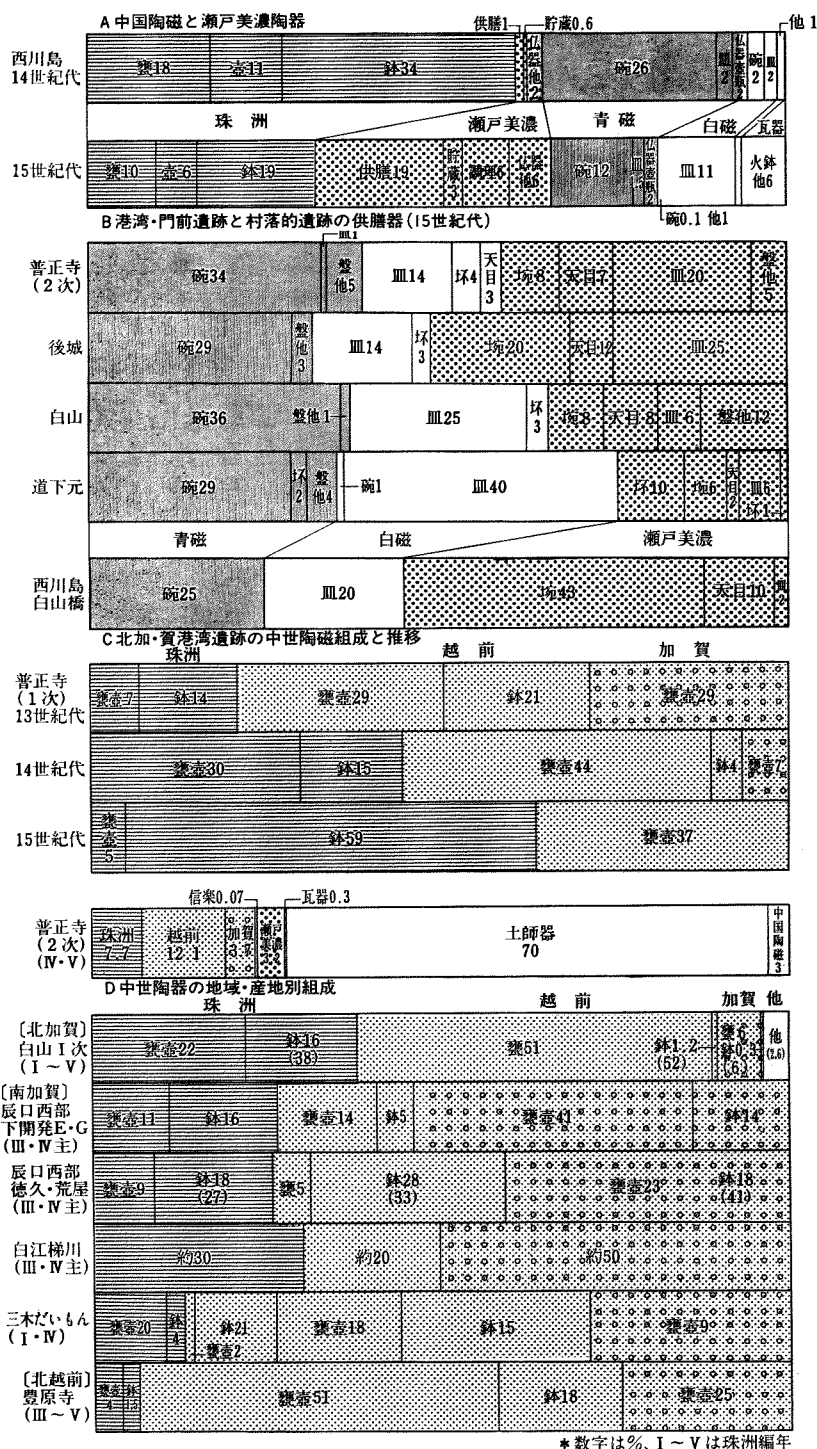
越前以南の出土例としては、近江・大宝寺山墳墓⁽⁴¹⁾(高島郡新旭町、Ⅰ期、壺R種AⅡ類)と左京三条四坊四町所在の後白河院皇子以仁王居宅地とされる高倉宮跡⁽⁴²⁾(京都市中京区、Ⅰ期、壺T種)の2例が報ぜられている。後者は13世紀初葉頃の一括資料中より検出された装飾叩打文壺で、羽後・楯ノ腰経塚(飽海郡八幡町)出土品に近似し、点的とはいえ非宗教器として中世京都に移入された事実は、大宝寺山例と併せ考えるならば、木芽峠を越え湖西を経由し近畿に至る流通幹線路の中継地と終着地であるだけに、外縁圏としての意義は少なくない。なお、越前・曾万布遺跡⁽⁴³⁾(福井市)6号土坑より、12世紀中葉前後の須恵器系片口鉢片が出土しており、東播系陶器分布の東限をなす。

2 中世後期

中世後期の北東日本海域における中世陶磁の流通は、珠洲系諸窯の廃絶に伴う珠洲製品の広域的商圈の獲得として結果した第2段階と、珠洲製品に代わり越前製品が全域の一円市場化を達成した第3段階に大別できる。ここでは、近世的流通に連なる第3段階の動向は基礎データの提示にとどめ、第2段階を中心に北から順次流通の概要を記す。



第1図 北東日本海域の中世窯の分業図



第2図 主要遺跡の陶磁器組成

北海道は、Ⅱ期にすでに珠洲製品の外縁圏化していた徴証があるが、第2段階で日本海貿易圏に新たに包摂された。詳細は次項に譲るが、分布はいわゆる道南十二館跡群と周辺の倭人居住地に大体限られ、それも館跡以外での消費量は僅少のようで、中世陶器が多量に消費されるのは勝山館跡⁽⁴⁵⁾（檜山郡上ノ国町）のごとく貯蔵・調理器が越前陶器のみで構成される第3段階をまたねばならない。当地における中世陶磁の流通が、擦文土器の終焉を指標とし、倭人とアイヌ人の本格的交易活動の開始と緊密にかかわる北海道中世社会形成史の一環として認識されるべきであるとの見通しに立てば、14世紀後半代には蠣崎信純（武田信広）の渡道、館跡構営と道南部の軍事経済基地化と、流通の第2段階は大略一致をみることになる⁽⁴⁶⁾。中世陶器がアイヌ人社会で殆んど使用された形跡が認められないのは、狩猟経済に規定された固有の貯蔵・調理器の組成と関係するのか、あるいは陶器が商品的流通の段階に至らなかったゆえか検討を要する。Ⅴ期を中心とする良好な一括資料を出土した志海苔館跡⁽⁴⁷⁾（函館市）では、北陸・東北と同一の陶磁器組成ながら、越前甕と珠洲片口鉢がかなり明瞭に器種・産地別に分化・補完関係を保持しているのが注意される。その他の資料も館跡近傍からの出土例が多く、志海苔蓄銭遺跡⁽⁴⁸⁾で銅銭37万枚以上を収納していた銭甕、あるいは埋葬頭骨に片口鉢を被せた知内脇本館跡至近地の湧元遺跡⁽⁴⁹⁾（上磯郡知内町、珠洲Ⅳ期）、洲崎館に近い上の北村遺跡⁽⁵⁰⁾（檜山郡上ノ国町、珠洲Ⅴ期）、弥生町遺跡⁽⁵¹⁾（函館市、越前Ⅵ期）などやや特殊な使用状況が目立つ。かかる埋葬形態は、下北半島の民俗慣行に共通し、北村遺跡の頭骨が倭人と判定されるなど倭人居住区ないし宗教儀礼と深く結びついていることと、いまひとつ、志海苔館跡や同蓄銭遺跡の銭甕に転用された3個体の大甕のうち2個体が越前製品であったことに具象されるように、14世紀後半～15世紀代の越前製品が甕類を中心にかなり目立つのが注意される。14世紀代は越中・越後でも瓷器系窯が稼動したにもかかわらず道南部の陶器が越前製品に限られ、かつ前記珠洲製品との器種別補完セットが構成されるのは、安藤氏と若狭の得宗領相互の交渉を契機とする北陸南部と北海道を結ぶ直接的海運ルートの開拓を示唆し、道南部が東北太平洋域の商圈に包括されず、日本海域貿易圏の終着に位置づけられたことを物語る点でも有力な物証となろう。

陸奥では、14世紀以降、東北の港湾機能と海上権を掌握したとされる安藤氏の拠点十三遺跡⁽⁵³⁾がつとに著名であり、後述する尻八、境関両館跡および根城跡⁽⁵⁴⁾（八戸市）、浪岡城跡⁽⁵⁴⁾（西津軽郡浪岡町）から豊富な陶器が出土し、第2段階で珠洲製品、第3段階で越前製品の1次流通圏を形成したことを明示する。この他館跡関連遺跡とみられる独狐遺跡⁽⁵⁵⁾（弘前市、Ⅰ～Ⅶ期）をはじめ、杉の沢遺跡⁽⁵⁵⁾（西津軽郡浪岡町）、源常平遺跡

(同), 大面遺跡⁽⁵⁶⁾(南津軽郡碓ヶ関村)等津軽半島基部の状況もそれを裏づけている。そして、太平洋域の瓷器系分業圏との接触をみる上で問題となる下北半島では一括遺物が乏しいが、陸奥湾沿岸の瀬野(下北郡脇野沢村, V期, 片口鉢), 宿野部(同川内町, V期, 片口鉢)両墳墓等⁽⁵⁷⁾での点的な分布からみて、珠洲陶器の流通圏と判断される。中世前期の陸奥北部は、尻八館跡の北東約 6km に構営された蓬田大館館跡⁽⁵⁸⁾(東津軽郡蓬田村)では、珠洲系の製品と常滑製品が併用され、一方十三遺跡等から16世紀代の信楽製品が散見される⁽⁵⁹⁾ので、珠洲陶器の生産が盛期を迎えた14~15世紀代に限り、その分業圏に帰属していたことになろう。この段階で生産地が発見されていない陸中は、一応瓷器系分業圏の北辺に組み込まれていたと予測されるが、珠洲製品は北上川流域沿いの鹿島館跡⁽⁶⁰⁾(北上市鬼柳, V期, 片口鉢片4), つなぎⅢ遺跡⁽⁶¹⁾(盛岡市繫, VI期, 片口鉢片2)で散発的に出土しており、雄物川→横手盆地から峠越えに搬出されたと推定される。なお、北陸・東北各地で珠洲および越前片口鉢をモデルとした在地の瓦器片口鉢が出土し、両製品の供給量の限界を示すが、出現の時期と以後の推移はなお不明な現状にある。

羽前・羽後に目を転ずると、一括資料は羽後・後城遺跡(後述)以外恵まれず、秋田県埋蔵文化財センター、庄内考古学会によって集成された完好品それぞれ14点と82点のうち、中世後期に帰属するものは3点(片口鉢)と6点(壺4・片口鉢2)にすぎないが、全て珠洲陶器と観察される。また、珠洲製品を出土する遺跡に散布地を加算すると、秋田県は昭和60年度で59遺跡(窯跡2, 経塚6, 館跡20, 村落他33), 山形県下は昭和57年度に集計された88遺跡(経塚21, 墳墓21, 村落13, 城館13, 祭祀他29)の60%以上が中世後期の所産とされ、両県下の以後の調査分を加算すれば100遺跡を優に上廻ることとなろう。いま珠洲製品の占有率を庄内平野で調査された平形G(東田川郡藤島町), 勝楽寺(同), 中京田(鶴岡市)の3遺跡についてみると、珠洲製品はそれぞれ41%, 35%, 19%で土師器について高く、越前製品は平形G遺跡で7%を占めるが他の2遺跡は2%, 3%にとどまり、北東日本海全域に亘る3次流通圏の一端を伝えている。中世陶器のやや特殊な使用例としては、文政2(1819)年の発見にかかる山谷八幡森遺跡(飽海郡平田町)で、刀を納入した珠洲大甕2個を合わせ口とし、応永8(1401)年在銘石碑を共伴したとされる事例⁽⁶⁴⁾、盛土下に設けた3.9×2.7mを測る大形土壇に木櫃を埋置して土師器皿と水晶製宝塔を副納し、上部の石積施設内に珠洲大甕と壺各1, 瓷器系四耳壺1を納めた中山廃寺の墳墓⁽⁶⁵⁾(東田川郡藤島町), 2×2mの掘形中央に茶臼を珠洲片口鉢(VI期)で覆い、周囲に青磁碗2, 瀬戸美濃仏花瓶(Ib類), 鉄釜・砥石各1を埋納した飯島穀丁遺跡⁽⁶⁶⁾(秋田市)の蓄物遺

構を挙げることができる。

越後では城館跡の調査例が目立ち、江上館跡（北蒲原郡中条町）、堀越館跡（同水原町）、水原館跡（同）、村松城跡（中蒲原郡村松町）、鷺之沢御館跡（刈羽郡小国町）、御館館跡（上越市）、上除館跡（長岡市上除町）、五十嵐小文治館跡（南蒲原郡下田村）等が挙げられるが、⁽⁶⁷⁾精査された坪ノ内館跡（後述）以外全般に遺物出土量が少なく、報告書未刊分もあって城館跡固有の陶磁器組成を抽出しにくい現状にある。村落遺跡も今池・子安遺跡（後述）と正応4（1291）～延慶3（1310）年の木札を伴出した馬場屋敷遺跡⁽⁶⁸⁾（白根市庄瀬）のほかは、小島西（北蒲原郡加治川村）、坂井釈迦堂（西蒲原郡黒崎町）、杉之森（南蒲原郡中之島村）等の諸遺跡で後期前半を中心とする組成の一端が窺えるものの、包含層的な出土状態のため珠洲製品普及の一般的状況を示すにとどまっている。墳墓は華報寺遺跡⁽⁷⁰⁾（北蒲原郡笹神村）の部分調査資料のほか、内浦観音堂遺跡（岩船郡粟島浦村）、善光寺浜遺跡⁽⁷¹⁾（上越市）のように不時発見にかかるものも、蔵骨器は大部分が珠洲製品で中国陶磁・瀬戸陶器は少ない。当県では塚の正式調査例が多いが、時期未詳と近世ないし以降に下る事例が多く、確実に中世に帰属するものに座禅塚⁽⁷²⁾（長岡市宮本長方町）があり、珠洲大甕が使用されている。

このように、珠洲製品の圧倒的優勢な流通状況と対照的に、14世紀代に一時的に稼動した在地の瓷器系笹神窯（北蒲原郡笹神村・安田町）の製品は、生産地から径10 km 圏内に所在する六野瀬（同安田町）、水原、堀越の各館跡、華報寺墳墓をはじめ、阿賀野川以南では坂井釈迦堂遺跡、長所遺跡（燕市）等信濃川放水路周域の自然堤防上あるいは中流域の河岸段丘上から、上越国境に近い五十嵐小文治館跡⁽⁷³⁾まで分散的に出土しているが、分布の南西限は詳らかでない。しかも、各遺跡の出土数はせいぜい数片、貯蔵・調理器で占める比率は1～2%と見込まれ、生産地周辺でも越前製品と同じく3次流通圏の様相を呈し、遺存する完好品は皆無である。

ところで、近年岡川勇夫・小柳義男・鋤柄俊夫氏⁽⁷⁴⁾の調査によって、第2段階の珠洲製品が、蒲原津→信濃川→飯山峠あるいは直江津→荒川→関川峠のルートを紹介して、信濃北部まで流通圏を伸張していたことが明らかになった。千曲川流域にはすでにⅠ・Ⅱ期の珠洲（系）陶器が点的に流入しているが、中世前期は常滑、瀬戸陶器主流の分業圏を形成していたとみなされる。それが後期には信濃中・南部は隣国の中津川窯（中津川市）の貯蔵・調理器および東濃窯の供膳器が主体となるとともに、北部は珠洲製品の2次流通圏化し、その影響下に在地産土師質片口鉢⁽⁷⁵⁾が出現する。これをいま少し具体的に述べると、珠洲製品分布の南西限は松本盆地南辺丘中学校遺跡⁽⁷⁶⁾（塩尻市広丘野、Ⅱ期、片口鉢）にあるが、千曲川流域を中心に浸透したことは間違いない

い。ただ信濃北部でも流入径路の中継地に位置し、良好な陶磁器一括を出土した長者清水館跡⁽⁷⁷⁾（飯山市一山、IV・V期）で、基本三種は珠洲製品の独占が確かめられ、安源寺遺跡⁽⁷⁸⁾（中野市、IV期）の火葬墓群で片口鉢の使用が知られる以外、遺構との関係が分명한調査例に乏しい。これに不時発見分を含めても、鷲寺経塚（上水内郡豊野町、Ⅲ期、壺T種）、千曲川支流鳥居川左岸の岩袋遺跡（同三木村、IV期、甕・壺・片口鉢）、古道遺跡⁽⁷⁹⁾（長野市、IV期、壺T種）の銭壺のほか、草間茶臼峰遺跡（中野市）出土の火葬蔵骨器に転用された双耳壺（V期）⁽⁸⁰⁾等が目立つぐらいで、厳密な時期別分布および常滑製品との量比は今後の調査をまたねばならない。

なお、越後経由とみられる珠洲製品が関東で2点出土している。すなわち、下野・小山城跡（小山市）と北東約15kmを隔てた古河（古河市）出土と伝えるIV期の壺T種⁽⁸¹⁾であって、前者は思川東岸段丘上に構営された小山城跡北辺の墳墓域（小山市市民病院・天翁院遺跡）から出土した約30点にのぼる中国陶磁、瀬戸・常滑・渥美および在地瓦質土器の壺・瓶子・甕類よりなる蔵骨器群中にあった。生産地から300km余隔離した2点が、いかなる径路を経て搬入されたかは興味深い、古墳時代以来文化交流が持続された魚野川→谷川岳→下野、または飯山峠→佐久盆地→碓氷峠→下野の東山道ルート of のいずれかと推定される。物の移動自体は外縁圏の“紛れ込み”現象としてよいが、13～14世紀代に亘り継起した小山墳墓群の被葬者が守護級御家人小山氏一族であることは蔵骨器の品質の高さから容易に推察されるので、あるいは在地有力領主層間の物資交換（贈答）の副産物かもしれない。

越中・能登・加賀北部は珠洲分業圏の中枢をなし、各種遺跡の調査は全体に豊富で出土地は枚挙にいとまがないが、中世後期の事例は多くなく、それも長期存続の遺跡が多いため厳密な時期別組成の把握は困難な場合が多い。ここでは、主要遺跡の陶磁器組成の検討は第2項以下に譲り、瓷器系陶器窯の流通状態と中世後期に開拓された珠洲流通圏の動向に言及するにとどめる。

越後・笹神窯にみられた、14世紀代における瓷器系窯の二次的拡散は、越中でも認められる。神通川上流域西岸、越飛国境に近い山地に出現した八尾窯⁽⁸²⁾（婦負郡八尾町深谷、5基）は、13世紀後半代におそらく笹神窯に連動して成立し、正式調査未了のため詳細を知りえないが、両窯の器種・器形および押印文様等からして、15世紀代のうちに廃絶する加賀窯との類縁性が認められ、その技術系譜（工人）の転移現象として理解すべきものである。本期の生産動態の考察は別稿に譲るとして、八尾窯は本来珠洲窯との競合を避け越飛国境の山間部を対象とした小地域窯と考えてよいが、製品は富山平野西部の友坂遺跡（婦負郡婦中町下条⁽⁸³⁾）、弓庄城E1区、上野Ⅱ—1方形墓

(同小杉町), 塚越貝坪遺跡(同), 梅原ゴマ堂遺跡(西砺波郡福光町)等で甕壺片が散発的に出土しており、将来平野部での出土例が増加するとみられるが、⁽⁸³⁾ 笹神製品と同様僅少と考えられる。また、八尾窯の発見によって越前製品との弁別が要請されるようになったが、IV・V期は日の宮C遺跡(小矢部市), 上木遺跡(中新川郡立山町), 中小泉町(同上市町)等が報ぜられている程度で、それも甕壺類に限られるところに、⁽⁸⁴⁾ 珠洲陶器の1次流通圏と複合する越前陶器の3次流通圏のあり方が良く示されており、そのことはまた八尾窯が甕を主体に焼造し、珠洲製品を補完する生産体制を貫いていることと一体的な事象として理解できよう。

他方、加賀南部を主たる流通基盤とした加賀窯の場合、14・15世紀代を盛期とする白江・梯川遺跡、佐々木アサバタケ遺跡では、甕は加賀約60%、越前25%、珠洲15%、片口鉢は珠洲がやや目立ち、加賀と越前がほぼ等量とされ、総破片数では加賀5、⁽⁸⁵⁾ 珠洲3、越前2程と見込まれている。また、南部北半の辰口西部遺跡群徳久・荒屋地区(Ⅱ～V期)では、全体に加賀38%、越前32%、珠洲30%で加賀製品の量比がさらに低く、これをⅢ・Ⅳ期に限ると加賀1.5対越前・珠洲各1程となり、器種別構成で甕は加賀が卓越し、片口鉢も加賀が優勢ながら越前、珠洲と大差なく、加賀北部の越前5、珠洲4、加賀1程の組成比(後述)と異なる。したがって、加賀窯は中世後期の加賀南部においても、貯蔵・調理器総量の50～60%を越えない程度の2次分業圏を形成し推移した在地窯であったことが知られる。なお、加賀窯が廃絶する15世紀代には、越前製品の量比が大幅に上昇し、加賀北部の普正寺遺跡(後述)の採集資料では、甕の大半は越前であるが、片口鉢は依然2対1で珠洲が上廻り、全体に6対4程で越前が優勢である。⁽⁸⁶⁾ 珠洲製品は中世前期以来この領域を2次流通圏とした点は変わらないが、基本三種から片口鉢に重点を移し市場を確保したことになろう。

さて、前記八尾製品がどの範囲に商圈を確保したかは今後の資料の集積をまつとして、IV・V期の珠洲製品が越飛山間部まで突出した2次流通圏を形成したことは、国境から19kmばかり入った飛騨・江馬館跡⁽⁸⁷⁾(吉城郡神岡町、Ⅱ～Ⅶ期)の陶磁器組成から明らかである。本遺跡の貯蔵器は珠洲70%、瓷器系(八尾・越前・信楽・常滑)30%、調理器は珠洲55%、瀬戸美濃43%、瓷器系2%の量比を示すが、瀬戸美濃の調理器には大窖段階の鉄釉片口鉢が含まれるので珠洲は一層高率となろう。これを時期別にみると珠洲製品はIV・V期が主体でⅥ期に下る個体は見出せず、15世紀後半代には調理器は瀬戸美濃製品の流通圏に転じており、さきにみた信濃北部の状況と一致をみる。本期における珠洲流通圏の縮小は臨海地に連なる平野部では段階的に進行したのに対し、山間部では急速な徹底として現われたようで、海運への依存度の強い珠洲

第2表 江馬館出土中世陶磁の産地別構成

(破片総数, 「常滑系」は「八尾他」と訂正)

		貯	蔵	調	理	供	膳	暖	房	宗	教	他	計(%)
国	珠洲	202		82						1			285(11.7)
	越前	2		2									4(0.2)
	信楽	7	87	3									7(0.3)
	八尾他	78		1									79(3.2)
	瀬戸・美濃	114		241 (鉄釉片口鉢 64)	326					22			703(28.7)
	土師器	1		177 (灰釉盤他)	999					3			1,003(41.0)
産	瓦器							97					97(4.0)
輸入	中国	2		12	223					31			268(11.0)
計 (%)		406 (16.6)		338 (13.8)	1,548 (63.3)			97 (4.0)		57 (2.3)			2,446 (100)

註87文献「表2」より作成

窯の流通形態の特質を直截に反映しているといえよう。

最後に越前以西をみると、前期に珠洲製品の3次流通圏を形成したと推定される越前では、一乗谷遺跡サイゴ寺⁽⁸⁸⁾(西光寺)跡の墓域と深山寺^{みやまでら}経塚から壺T種(IV期)が各1点出土しているだけで、越前製品の一円的分業圏として完結したことが判る。この他、丹後・中野遺跡⁽⁸⁹⁾(宮津市)の包含層より越前・丹波製品等に伴出して片口鉢片(V期)が1片確認されており、これが珠洲陶器分布の西限資料となるが、基幹流通路を逸脱して、おそらく越前陶器に随伴して搬入されたのであろう。

二 城館および村落遺跡

中世陶磁器の所有・消費形態は、当然のことながら遺跡(遺構)の性格によって規定されるが、村落遺跡の構造の考古学的検討はようやく緒についたばかりである。⁽⁹⁰⁾それゆえ、陶磁器流通の実態分析の前提となる各種遺跡の類型的整理作業から始めねばならない。以下、村落・城館遺跡から、中世前期と後期に大別して記述をすすめるが、前期から後期への展開を同一遺跡で遺構に即して継起的に捕捉しうる事例に恵まれないため、遺跡の類型的整理が充分整合化されていない限界を有することをおことわりしておかねばならない。

1 中世前期

北東日本海域における中世陶磁器流通の第一の画期を12世紀中葉とする理由は、該地域の在地窯が一斉に操業を開始したというだけでなく、(1)この段階で中世的土器・陶磁器の組成が安定的に完結したこと、(2)村落・城館および墳墓・経塚など生活・宗教遺跡が、この段階を始期としあるいは新たな展開をみせる事例が目立ち、そのことは、(1)に表徴された分業関係の変革をも包摂した庄園公領制とかかわる体制的転換が予測されることによる。第一の中世的土器・陶磁器の組成は、供膳器で有台碗、黒色土師器が消滅し、器種の単一化、法量の規格化が貫徹した在来の轆轤製土師器碗と新来の京都系を主体とする非轆轤製皿（大・小）を主体とし、⁽⁹¹⁾一定量の白磁碗（Ⅳ－Ⅰ・Ⅱ類，Ⅴ類）・小皿（Ⅴ・Ⅵ類＋Ⅱ類）が相伴し、貯蔵・調理器は在地の越前・加賀・珠洲製品に越前・加賀南部では常滑製品が加わり、小壺・瓶類は在地諸窯産のほか少量の中国陶磁が使用され、煮沸器は若干の埵・甕・釜以外土製品は中世を通して存在しない、として要約できる。

(2)のうち、まず中世村落とそれを支えた開発形態の類型的整理を試みると、古代から中世へ継起的に発展した“継続型村落”は少なく、⁽⁹⁴⁾珠洲Ⅰ期に突然出現する“新開型村落”が目立って多い事実が注意される。北陸中世の開発史については、越後頸城平野を舞台とする中世後期の在地領主層の生産基盤を追求した坂井秀弥氏の一連の労作が注目され、中世初期にみられる遺跡の拡散と不安定な耕地についても言及しているが、なおいわゆる“大開発の時代”の実像の解明は今後の課題である。ここでいう新開型村落は、存続期間によって、(1)一時的あるいは一定期間を限って営まれたもの、(2)ほぼ中世を通して存続したものがあり、また占地＝開発方式によって、(i)丘陵間隙の入り組んだ谷田を基盤とする丘陵村落、(ii)中小河川の扇央部周域の耕地を基盤とし、自然堤防（微高地）上に営まれた平地村落、(iii)中小河川の河口臨海地ないし扇端の低湿地を基盤とし、微高地上に営まれた低地村落がある。また、村落を構成する建物小群＝開発主体によって、(a)村落から独立した広大な屋敷地を占有し、ときに堀によって画された居館に複数単位の大形屋と倉を配する在庁官人・庄官級の庄郷領主層、(b)村落内で卓越した屋と倉を所有し、ときに鍛冶工房を付設する下級庄官級の村落領主層、(c)大・中形の屋と小形の倉を保有する上層農民（名主）層、(d)小形の屋と納屋ないし屋のみの下層農民（小百姓）層に一応類別でき、さらに(b)(c)を主体とする本村ないし優位集団と、(c)(d)中心の枝村ないし弱少集団という村落類型の設定も可能視されるが、⁽⁹⁶⁾知られた範囲では中世前期は(b)(c)主体の村落が支配的で、(d)の様態は明

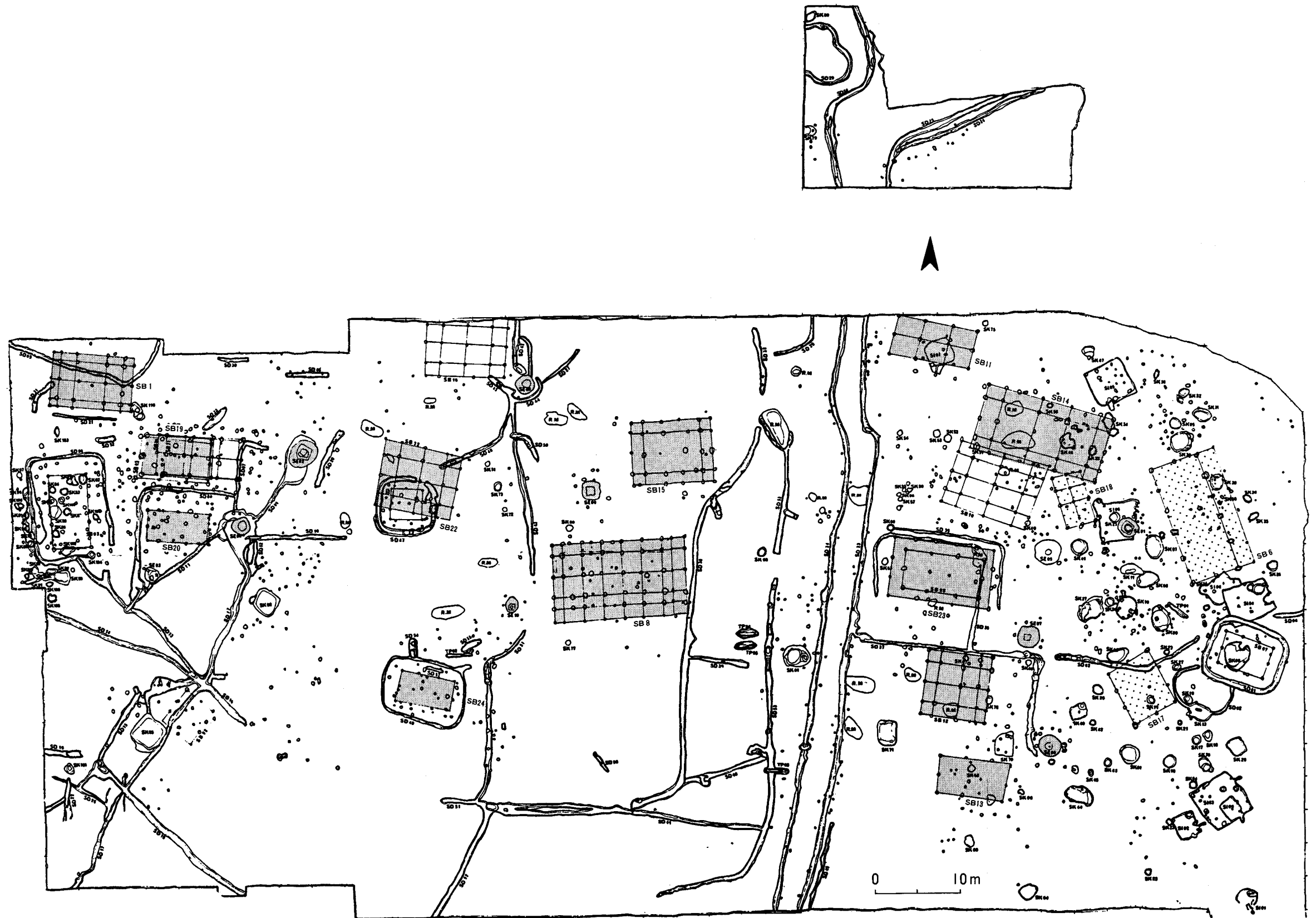
らかにできない。もちろん、村落の全体像の把握が困難な現状で、初期中世村落の身分制と階層性をおさえ村落類型として定式化を図るのは性急にすぎ、詳細な分析は別稿を用意しなければならないが、以下、その実態の一端を摘記しつつ、珠洲（系）陶器を中心とする陶磁器の消費形態を窺ってみよう。

さて、開発方式による類別では、(i)(v)は主として山麓部と扇端部の湧水に依存する古代の開発の継承といえるが、羽後北部、米代川流域に所在する^{なかた*もて (97)}中田面遺跡（山本郡峰浜村、第3図）は珠洲Ⅱ期併行期の丘陵村落であって、入植後のある時点で台地の略中央に5間4面（S B 8, 152m²）の大形総柱建物を核とする(b)型建物小群が出現し、これとやや時期を異にする総柱建物（S B 1・9, 5×3～4間, 42～108m²）12棟（うちS B 13・20は倉か, 3×2間, 28～36m²）構成の複数の小群と、総柱建物（S B 16・22, 4×4間, 60×78m²）+小形倉（S B 23・24, 2×2～3×2間, 15～24m²）が溝で画されて周辺に配置されており、後2小群は階層差（時期差?）を孕むものの(c)型個別小経営主として包括でき、(d)型は検出されていない。これに対し、羽後中部、雄物川河口の低湿地に位置し同じⅡ期を中心とする^{したの (98)}(v)型村落下夕野遺跡（秋田市、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ期、第4図）では、(b)型と溝を介して隣接する敷地に小規模な屋（S B 16・23, 2×2～3×2間, 30～47m²）と倉（S B 17・19, 2×2間, 18～21m²）よりなるC・D群が検出され、(b)型の主導下に(c)型が均一的に集合する中田面遺跡と幾分様相が異なるかにみえるが、規模・配置および溝による区画からして中世後期（Ⅳ期）の所産と推定されるので、(c)型が主体をなす点では変わらないことになる。両遺跡が、先行する古代村落ないし開発形態といかにかかわりあって開村したか不明であるが、越中東辺の臨海地型庄園遺跡として周知される⁽⁹⁹⁾じょうべのま遺跡（下新川郡朝日町、Ⅰ～Ⅳ期）の場合、A地区を中心とする東大寺領^{はせつかべ}丈部（西）ないし⁽¹⁰⁰⁾西大寺領佐味庄と約2世紀の空白をおいて、より海浜寄りのC地区から^{じょうべ}庄家建物（S B 50A・B, 104m²）と目される5間4面の大形総柱主屋が発掘されており、大治年中（1126～31年）立庄の東大寺領入善庄として再編された遺構の一部と推定される。ただし、出土遺物は珠洲Ⅰ・Ⅱ期（C・K・L地区）に帰属し立庄時期の遺構ではないが、一帯で11世紀代の遺構・遺物がみられない点を重視するならば、庄家の創置された背後に、荒廃化した初期庄園の故地とその周域の再開発の進展、中世庄園としての再生を想定できよう。

次に、(v)型とした越中中部の^{じんてん}神田・若宮B・江上B⁽¹⁰¹⁾遺跡（中新川郡立山町、第5・6・8図）は、上市川扇状地扇端に近い標高15m前後を測る沖積平野の自然堤防上に占地する。このうち、神田・若宮B両遺跡は南北約350mを隔て、珠洲Ⅰ期とⅡ期を

中心に後者はIV期まで継続して営まれた一連の庄郷村落であって、掘立柱建物39、堅穴1、柵23、井戸8、溝・土壌多数が検出された。神田遺跡は3,000m²ばかりの調査区で、1尺30cmの完数尺を用い、主軸方位、柱間寸法、配置に規格性を有する(b)型小群(4棟)が5回程度建て替えられていた。当小群の創建期の構成は、鍛冶工房を付設した大形総柱の主屋(SB13, 4×4間, 110m²)に北接する倉(SB9, 3×2間, 39m²)と東の空間地を挟み主軸を揃えて併設された大形総柱の主屋(SB19, 5×4間, 130m²)と副屋(SB18, 4×1間, 19m²)の2単位よりなり、別個の経営体とも母家と分家のごとき血縁的複合大家族とも解される。ここに析出された建物小群の構成は、後出的な若宮B遺跡にそのまま引き継がれており、一貫した敷地と建物の計画的利用のあり方から、「公的性格を持つ建物群⁽¹⁰²⁾」と考えられているが、公権力を背景とした、江溝の掘削と堰堤の設営を伴う上市川氾濫原の不安定な耕地の開発に取り組む、村落領主ないし在庁官人級在地領主主導の開発を彷彿とさせるのである。ここに一端をみた(b)(c)層主体の新開村落を抛り所とする活発な墾田開拓は、例えば港湾に臨む中・小河川の合流する低地に営まれた、文治元(1185)年立庄の崇徳院御影堂領大屋庄穴水保(49町1反7)の故地に比定される能登北部の西川島遺跡群⁽¹⁰³⁾(鳳至郡穴水町, I期~17世紀代)をはじめ、越後中部の今池・子安遺跡群⁽¹⁰⁴⁾(上越市, II~17世紀代), 加賀南部の辰口西部遺跡群徳久・荒屋遺跡⁽¹⁰⁵⁾(能美郡辰口町), 漆町遺跡群⁽¹⁰⁶⁾(小松市, II~V期)等北東日本海域で普遍的に検証されつつある。

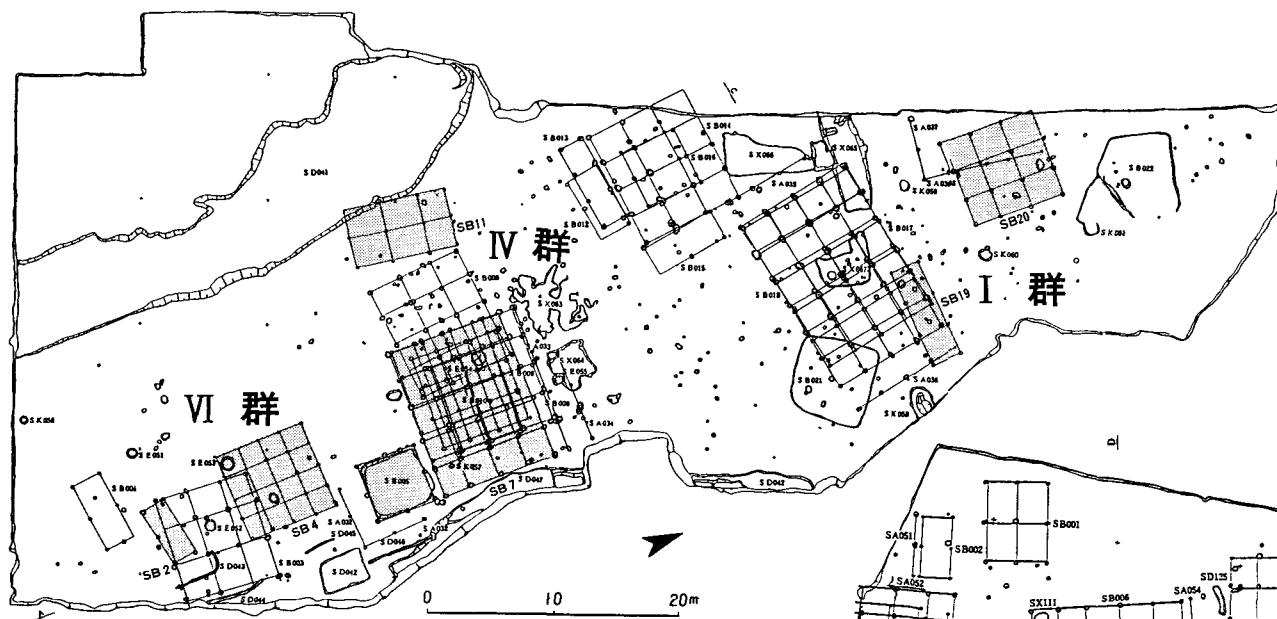
前記素描した領主的開発は、国衙に勤仕する在地領主の強力な主導性を示唆するが、上市川扇状地等の開発にはさらに上級の在地領主の関与を想定させ、珠洲I期に各地で出現する豪族居館はそのことを雄弁に物語っている。加賀南部では、すでに11世紀末葉頃、小台地を大溝で画した浦刀禰級在地領主の居館が確認⁽¹⁰⁷⁾できるが、珠洲I期併行期には江沼盆地を貫流する動橋川東岸の一角に勅使館跡⁽¹⁰⁸⁾(加賀市, I~IV期, 第9~11図)が成立し、IV期まで存続する。本遺跡は、約160×180mの敷地を占定し、1期は規模・構造が卓越した建物こそ未発見なものの、南部地区にコの字形に配置された三棟の切妻建物(4~3×2間, 45~54m²)、北方約50mの内郭地区に倉(3×2間, 30m²)を配し、2期には東堀が掘削され、3期以降内郭・南郭あるいは東郭に大形総柱主屋(5~6×4間, 75~124m²)と複数の副屋、倉が併設されている。同じ加賀南部でも、大聖寺川南岸に開けた小盆地に所在する三木だいまん館跡⁽¹⁰⁹⁾(加賀市, I~III期, 第9~11図)は、背後に丘陵を負い前面に湿田をひかえた低丘上を溝で画した敷地に、在地領主助方の開発にかかる最勝四天王院領右庄政所推定地であって、13世紀初頭頃には、大形総柱の主屋(6×5間, 168.5m²)、副屋2棟(3



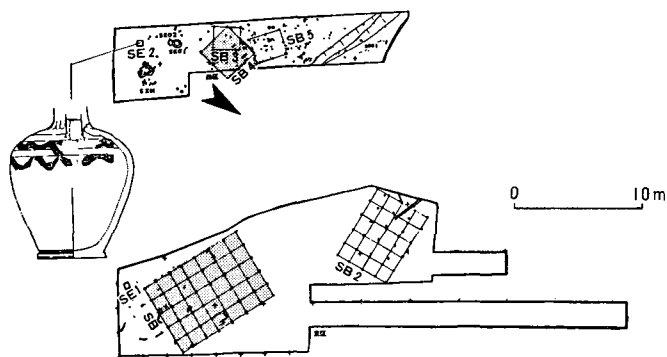
第3図 秋田県中田面遺跡遺構図 (1/500) (拠・註97文献, 加筆)



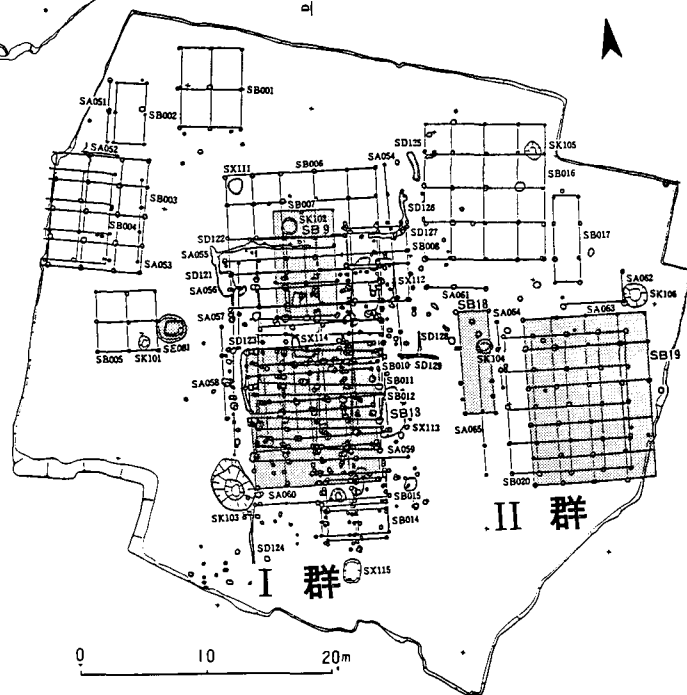
第4図 秋田県下夕野遺跡遺構図（拠・註21文献，加筆）



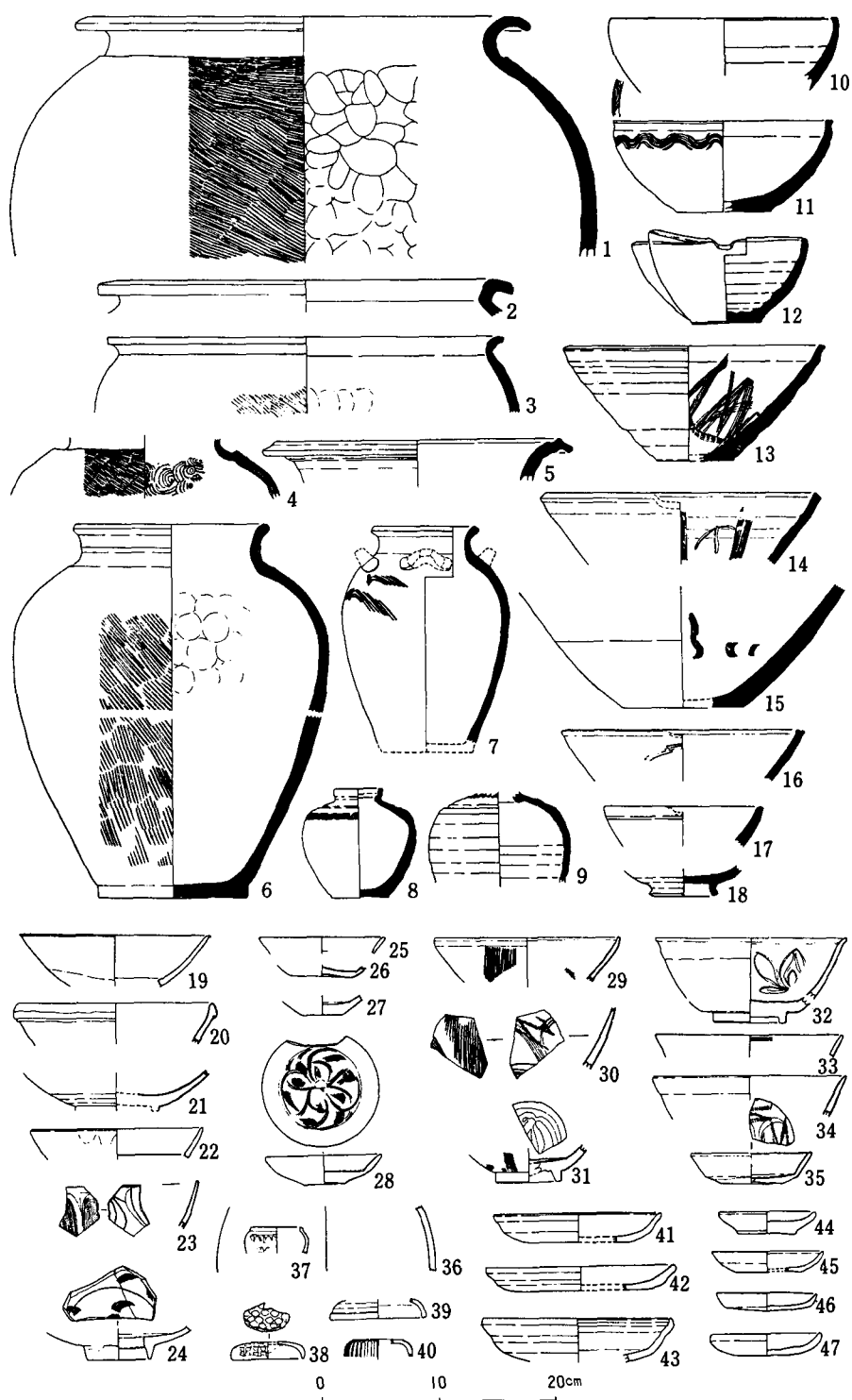
第6図 富山県若宮B遺跡遺構図（拠・註101文献）



第7図 石川県大町縄手遺跡遺構図（拠・註30文献，加筆）



第5図 富山県神田遺跡遺構図（拠・註101文献，加筆）

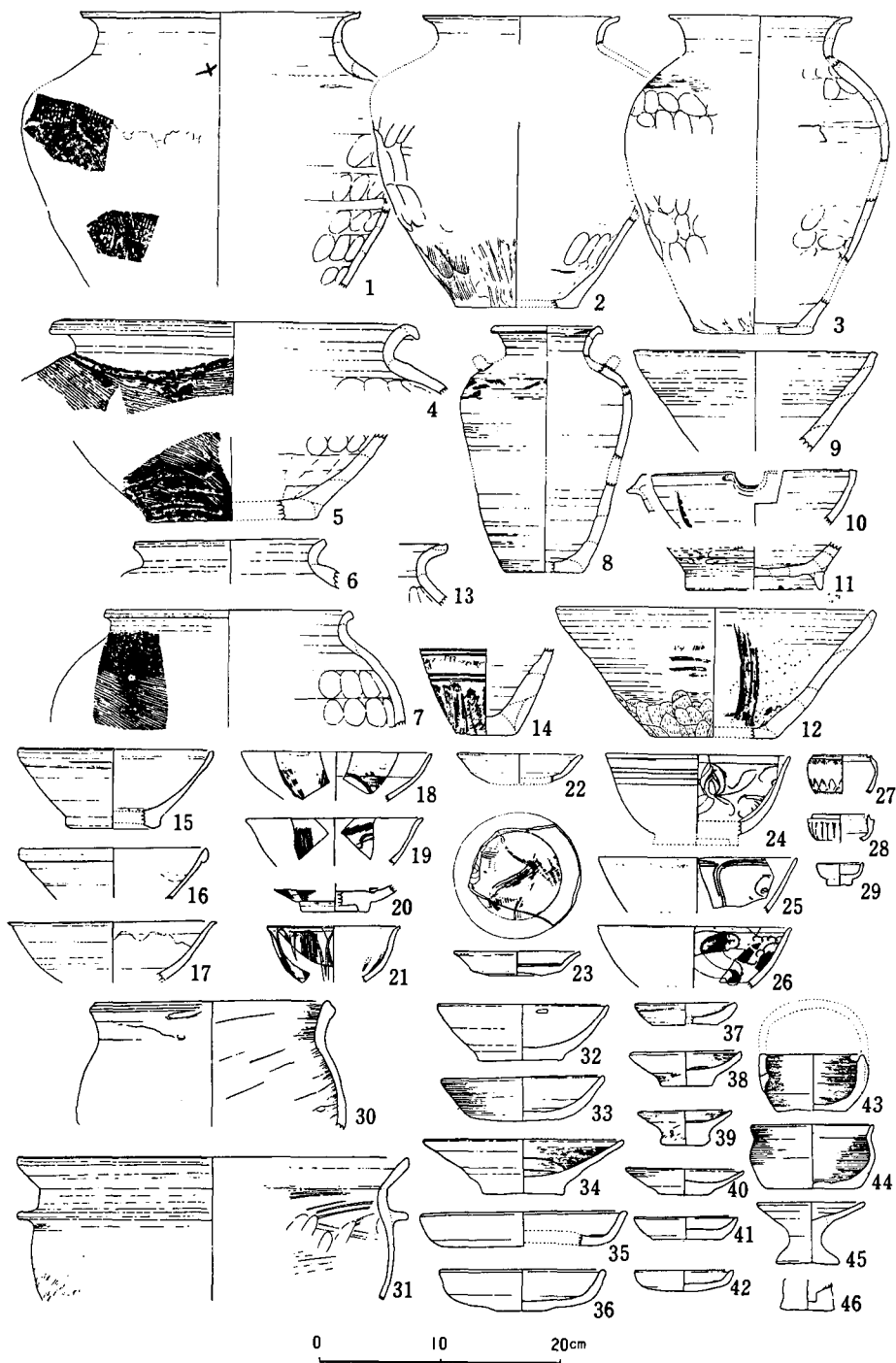


第8図 富山県神田・じょうべのま遺跡の陶磁器組成（2・3期）

1～18 珠洲，19～27・36～40 白・青白磁，28～35 青磁，41～47 土師器（2・3・6・7・16・17・19・24・28・33・36～38 じょうべのま，1～18縮尺不同）

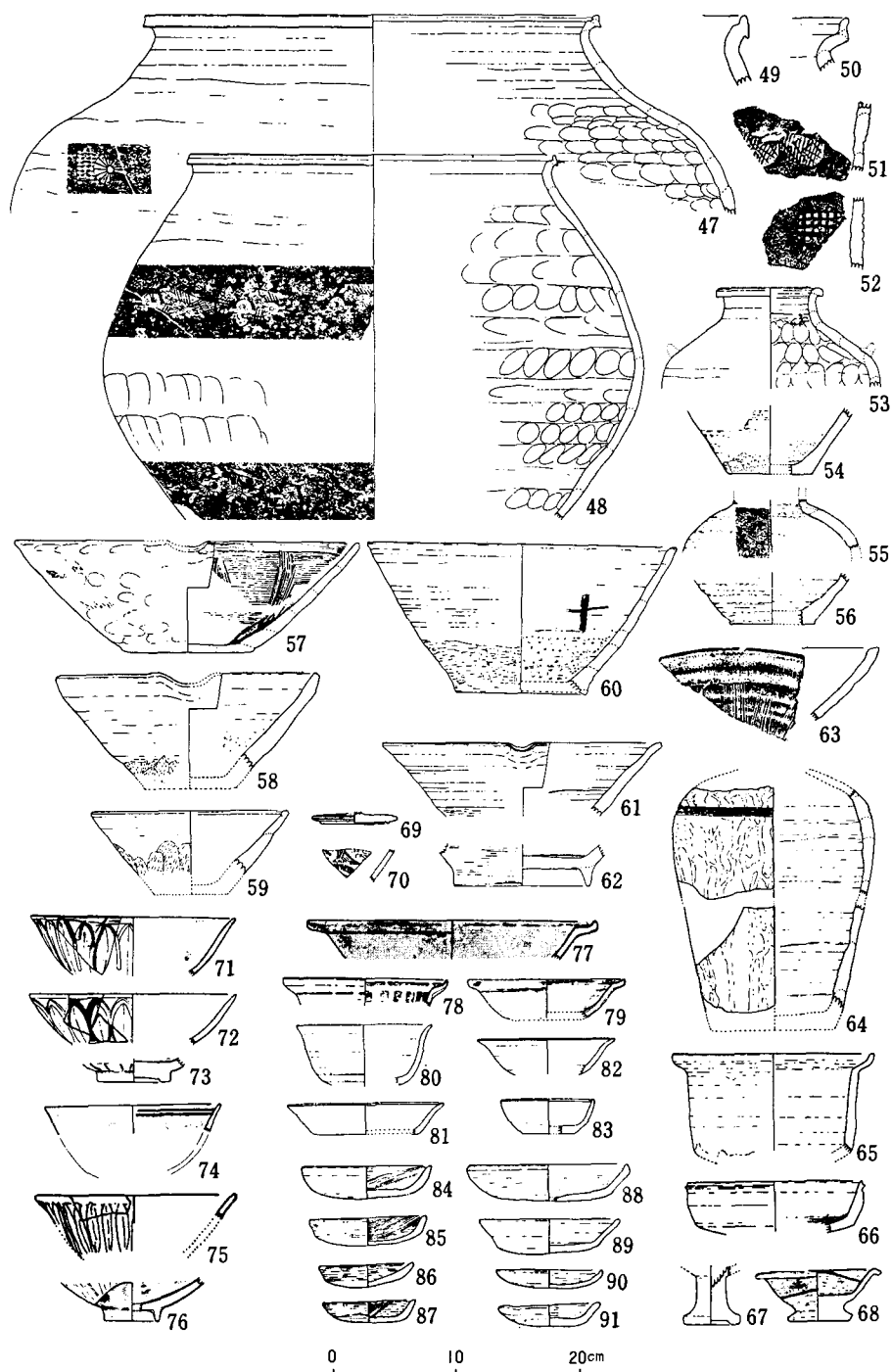
× 3 間, 37~49m²), 雑舎 2 棟 (2 × 1 間, 9.1~14.4m²) および倉 2 棟 (2 × 2 間, 15~29m²) より構成される在庁官人級豪族を想定させ、勅使館と異なる種類の豪族居館である。これに近似した事例は越後中部の番場館跡⁽¹¹⁰⁾ (三島郡出雲崎町, I~VII 期) でもみられる。当遺跡は中世後期に有力国人領主に成長を遂げた小木氏の居館とみられ、主屋と倉の建物の基本構成は変わらないが、相対的に建物がやや小規模で豪族居館間の格差が看取される。

さて、上記の中世居館・村落における珠洲 (系) 陶器の消費状態についてみると、神田遺跡 (I 期主) 出土の総個体数 173 点の内訳は、土師器 61%, 珠洲陶器 26% (片口鉢 15%, 甕 7.5%, 壺 3.5%), 輸入陶磁 13% で、後出的な若宮 B 遺跡 (II 期主) も同一の傾向性を示す⁽¹¹¹⁾。これに対し、じょうべのま遺跡出土 499 片の内訳は、土師器 24.8%, 珠洲陶器 59.6%, 輸入陶磁 15.2%, 他 0.4% の数値を示し破片数で算定されたため大形貯蔵器を含む珠洲陶器の量比がやや高く出ているが、貯蔵・調理器は珠洲製品で独占され、潤沢に流通している状況が判る。これをいまい少し具体的に検討すると、甕は口径 40~50cm 代の中形品が多用され、60cm を越える大形品は殆んどみられず、窯跡の組成と一致をみる。壺類は通有の T 種中壺のほか、器種・法量とも多様で、菊花状装飾叩打文中壺 (若宮 B, II 期), 櫛目文四耳壺 (同上他), 蓮弁文水瓶 (神田, I 期, 第 8 図 9) のほか櫛目文小壺 (神田・若宮 B, I~II 期, 第 8 図 8) も比較的目立つ。問題の一点は、珠洲陶器の消費形態が初期中世村落を構成する (b)~(d) の身分・階層の格差によって異なるのかどうかであり、出土状態から厳密な限定は至難であるが、建物周辺の遺物出土状況からみて少なくとも個別経営の主体となった (c) 有力農民層までは、開発資材として広汎に流通したと判断してよい。ただし、製品の入手に当たっては、(a)(b) 層を媒体としたことは充分予測できよう。なお、(b)(c) 層の経営体内部には隷属労働力 (下人・所従) を包摂していたはずであるが、西川島遺跡群大町縄手遺跡⁽¹¹²⁾ (第 7 図) では、II 期の (b) 型建物グループ (SB 1, 7 × 5 間, 214 m² + SE 1) の南西約 15m に、小建物グループ (SB 4, 2 × 2 間, 37.8m² + SE 2) が検出され、「屋敷地内の小百姓あるいは下人・所従の建物」⁽¹¹³⁾ と推定されている。ここでは、前者に付設された井戸が大形入念で、しかも櫛目文で加飾し口頸部を打ち欠いた珠洲水瓶^{またこ}を目として沈めていたのに対し、後者の井戸は小形粗造で土師器皿類が出土したにすぎず、祭式・祭器の階層差が明瞭に認められた。同様の事例は桜町遺跡の (b) 型建物グループ (SB 1・5 + SE 2) でもみられ、やはり蓮弁文で加飾した珠洲水瓶が出土している。I・II 期に製作された型造りの本地仏も村 (草) 堂的寺庵で使用されたようで、寺社・在地領主層の宗教的欲求を満たす特殊宗教器と考定さ



第10図 石川県三木だいもん遺跡の陶磁器組成（2・3期）

1～3 常滑, 4～10 珠洲, 11 越前, 12 加賀, 13・14 加賀系, 15～17・22 白磁, 18～21, 23～26・29 青磁, 27・28 青白磁, 30～46 土師器（1～12は縮尺不同）



第11図 石川県三木だいもん・勅使遺跡の陶磁器組成（4期）

47～49・51・53・54・57～59 加賀，50・52・55・56・60～62 越前，63 珠洲，
64～68 瀬戸，69～79 青磁，80～83 白磁，84～91 土師器（49・63～69・72・
74 勅使，47～64は縮尺不同）

れるのである。

次に、中国陶磁碗皿類の所有・消費状況を典型的な庄村落と目される西川島遺跡群についてみると、珠洲52%（369点、甕22%、壺20.3%、片口鉢57.7%）とほぼ等量の中国陶磁48%（342点）の内訳は、白磁（Ⅱ～Ⅵ類）26.2%、同安窯系青磁8.5%、竜泉窯系青磁（Ⅰ類）59.8%、青磁・（青）白磁四耳壺・合子6%（18点、うち褐釉合子1点）となり、Ⅰ期から(b)(c)層に安定的に供給されたことが窺える。また、碗と皿は90.4%と9.6%と圧倒的に碗が多く、なお土師器皿の占める比重が高かったことを示すごとくである。中世前期の中国陶磁は少量のため、西川島遺跡群のあり方が全体的な出土傾向と確言できないが、陶磁器の階層性の観点からすると碗皿類の使用状況には殆んど格差が存しないようで、四耳壺・水注・合子の三器種に顕示されている（第3表）。すなわち、城館跡では殆んど例外なく前記三器種が出土し、それが西川島遺跡群や神田遺跡でも少数検出されることから大体(b)村落領主層までに限定され、村落遺跡ではその代用品とみられる珠洲櫛目文四耳壺・装飾壺や水瓶の出土が目立つのが注意される。中国陶磁と器種・器形を共有する13世紀代の瀬戸壺瓶類は、番場遺跡で水注、若宮B遺跡で花瓶Ⅰa類が出土しているにすぎない。

2 中世後期

中世前期から後期村落への構造的転換の具体像を検討しうる遺跡は乏しいが、越後南部、関川中流域東岸の中世遺跡群⁽¹¹⁴⁾では、子安遺跡（Ⅱ期主体）と支流櫛池川を挟み南約500mを隔てた今池遺跡（Ⅲ・Ⅳ期主体、第12図）で掘立柱建物29、井戸21と溝・土塀等が検出された。今池遺跡の建物は3群に大別され、中核的なⅡ群は先後関係未詳ながら5回程度建て替えられた庇付きの主屋と倉（S B534・535+S E532他、主屋3×2～4間、29～41m²）よりなるのに対し、南北を溝で画されたⅢ群の単位建物（S B668+S E652他）は劣勢ながら独立した小経営体を保持していると判断される。他方、Ⅱ群の敷地に包括されながら60mばかりの空間を挟んで隔離されたⅠ群は、Ⅱ群と多少存続時期が異なるようであるが、単位建物（S B345=3×1間、19.6m²+S B341=2×2間、14.5m²+S E344他）は明確な倉を所有せず、柱間不定、平面プラン不整な造作が粗末な小屋で、Ⅱ群に従属的な群である。ここに抽出した3階層が前期の各層とどう対応しつつ変容を遂げたかは慎重な検討を要するが、一応Ⅱ群を村落領主ないし有力名主層、Ⅲ群を名主層、Ⅰ群を小百姓に同定できるかと思われる。今池遺跡で名主級建物とした単位群（3×2間、30～40m²前後の屋と2×2間、15～25m²前後の倉）は、破片的ながら前記下夕野遺跡C・D群や、西川島遺跡群白山

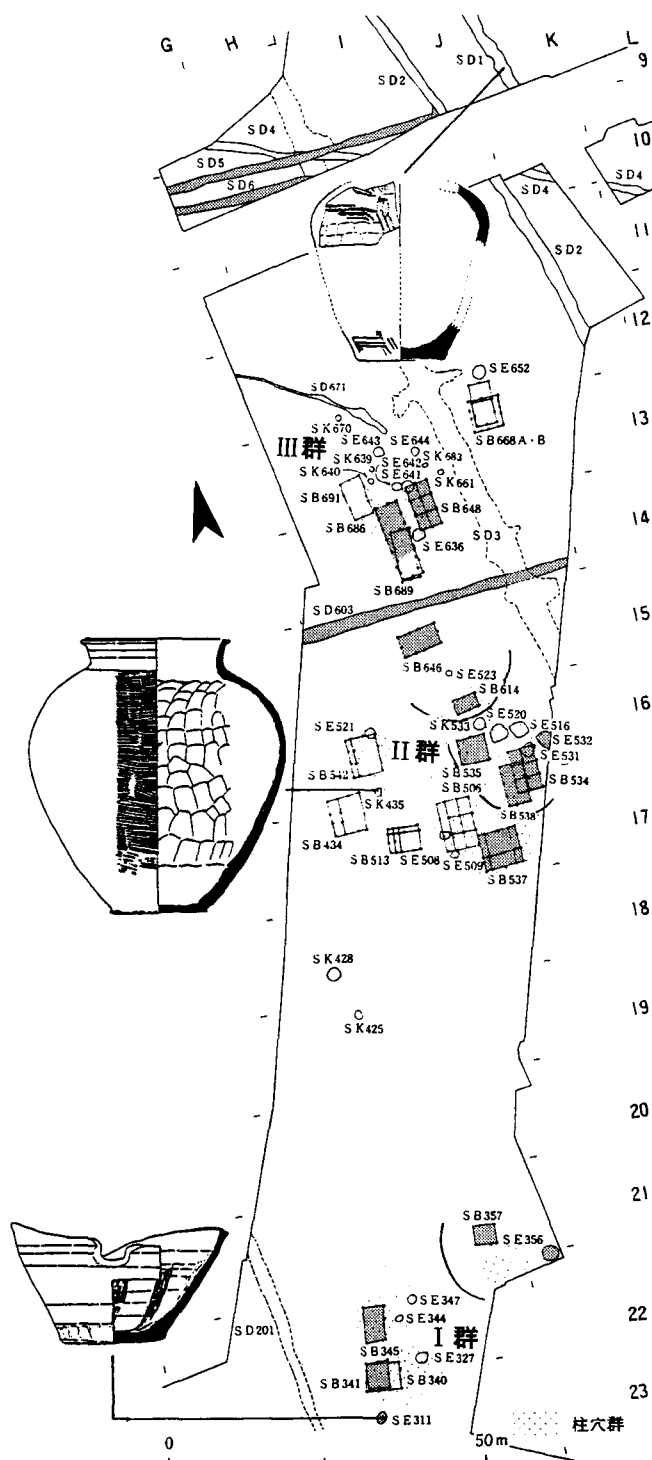
第3表 特殊器種出土主要遺跡

	県名	遺跡名	種別	存続年代 (世紀)	四耳壺	水瓶 水注	合子	瓶子	広口壺 (酒海壺)	黄楊 釉壺	壺瓶	香炉	花瓶
1	青森	尻八館	城館	14後～15	▲			▲	☒ ▲	☒ ☒ ☒	☒●●● ☒●●●	☒▲▲ ☒▲▲ ☒▲▲	
2	"	境 関	"	14～15				☐▲ ☒▲ ▲▲ ▲▲				☒▲▲ ▲▲▲ ▲▲▲ ▲▲▲	▲ ▲ ▲ ▲
3	秋田	後 城	港津	14～15				▲▲ ▲▲ ▲▲				▲	▲ ▲
4	新潟	番 場	"	12後～16	▲	☐ ☐ ▲	☐	☐					
5	"	坪ノ内	"	15～16						☒ ☒		▲	
6	富山	神 田	村落	12後～ 13前		●	☐ ☐						
7	"	若宮B	"	13	● ●						●		▲
8	"	江上B	"	13前～ 15前							● ●		
9	"	じょうべ のま (庄家)	"	12後～14	● ●		☐				☐ ☐		
10	"	弓 庄	"	"	●▲ ●●								
11	石川	三木 だいもん	城館	12後～ 14前	● ○		☐	☐			☐● ●● ●○		
12	"	勅 使	"	12後～14			☐	☒? ▲			○ ○		▲
13	"	道下元	門前	(12～)15									
14	"	西川島 桜町	村落	12後～14	☐● ☐▲ ●	●	☒			☒	☐ ●		
15	"	" 大町・縄手	"	13前～15	☐▲ ☐ ●	●		▲	☒		☐ ● ●	☒☒ ☒▲ ☒	▲ ▲ ▲
16	"	" 御館	"	13～16	● ● ●						☐ ●	▲ ▲ ▲	☒▲
17	"	" 白山橋	"	13～16	●						●	▲	
18	"	普正寺	港津	14～15	☐? ☒	☐		☐? ▲ ▲ ▲			☒☒ ☒☒ ☒☒	▲▲▲ ▲▲▲ ▲▲▲ ▲▲▲	▲▲ ▲▲ ▲▲
19	"	白 山	門前	12～16	☐		☐	☐		☒	▲	☒▲ ☒▲ ☒▲	▲

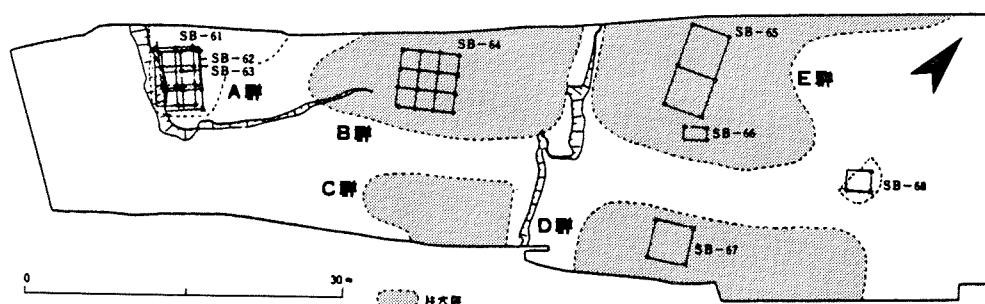
〔中国陶磁〕 ☐白(青白)磁 ☒青磁 ☒他 回染付 (朝鮮陶磁) ◻

〔国産陶器〕 ●珠洲(系) ○越前・加賀・常滑 ▲瀬戸・美濃

?は器種比定に不安ある個体 「壺瓶」は大形壺・装飾壺に限る(提・当該文献、実見)



第12図 新潟県今池遺跡遺構図 (拠・註104文献, 加筆)



第14図 富山県早月上野遺跡遺構概念図（拠・註117文献）

(115)
橋遺跡（Ⅲ・Ⅳ期，SB 1 = 4 × 2 間，40m²，SB 5 = 3 × 2 間，28.8m² + SB 6 = 2 × 2 間，13.2m²，第 25 図），越中・江上B遺跡（中新川郡上市町，Ⅲ～Ⅴ期？，第 13 図）で大小溝により東西南北方向に基盤目に画された 1 反程の敷地に主屋と倉（S B 124 = 3 × 2 間，35m² + S B 123 = 2 × 2 間，17.6m²他）で構成される建物小群として普遍的に指摘でき，名主級建物の規模が著しく縮小するのは間違いないが，前期との定員の増減という形での村落構造の変質を捕捉するに至らない。なお，江上B遺跡では，建物小群に隣接する区画に蓄銭遺構（Ⅳ期珠洲甕に銅銭 559 枚収納）と馬歯を出土した埋葬（祭祀？）遺構が発見され，経営主体の中世陶器，耕作馬の所有と蓄財の一端を物語っている。

これら一連の平野部の村落が，今池遺跡Ⅰ群グループを包括しつつも，村落上層は比較的均質な構成を示すのに対し，越中東部，角川と早月川間の台地縁辺を段築状に整地して営まれた早月上野遺跡（魚津市，Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ期，第14図）では，村落内格差は立地の選定に明瞭で，上段の主屋（SB 64，3 × 3 間，29.2m²）・倉庫様建物（SB 61～63，3 × 2 × 2 間，13～19.4m²）と下段の小屋 1 棟の複数小群（SB 67，1 × 1 間，13m²他）の複合体として把握される。本遺跡の下段に占地した隷属的な建物小群や，さきの今池遺跡Ⅰ群の住人の性格を，身分的・経済的権益の獲得を目指し上昇を遂げつつある小百姓層とするか，貨幣経済の浸透等による階層分化の過程で析出された隷属農とするかは，建物の厳密な時期比定と，付属する小屋を倉と認定するかどうかの事実関係が流動的な現状では留保せざるをえない。

不十分ながら村落各層を一応上記のごとく類型化し陶磁器の所有・消費形態をみると，上記 4 遺跡はいずれも遺物の遺存量が全体に少ないのが留意される。例えば，今池遺跡の14世紀代の陶磁器は，珠洲製品約20片（甕胴部片若干，壺略完形 1，片口鉢完形 1，口縁部片 6，胴底部片約10，刻画小壺片 1），中国陶磁 2 片（青磁碗片 1，白磁碗Ⅸ類片 1）と土師器皿類にすぎず，3 単位以上の建物小群 3～4 世代の消費量

は、もとより亡失分が算出できないため正確を期し難いとはいえ、複数の片口鉢を含む基本三種セット以上にどれだけ余剰分を備蓄していたかは疑問が残る。しかし、問題のⅠ群地区でも焼歪みの著しい片口鉢が井戸から出土しており、少なくとも調理器は村落下層にも普及していたのは確かであり、珠洲陶器については村落内部の家屋を所持する各層間で所有・消費形態に大差なかったと考えられる。一方、中国陶磁は今池遺跡ではⅡ・Ⅲ群地区から出土しており、早月上野遺跡のように皆無の村落もあるが、瀬戸四耳壺が1点出土している。類似の現象は遺構が不明なもの、越後におけるⅣ期を中心とした小島西遺跡（北蒲原郡加治川村）、坂井釈迦堂遺跡（西蒲原郡黒崎町）、杉之森遺跡（南蒲原郡中之島村）、あるいはⅤ期を中心とした越中・日の宮⁽¹¹⁸⁾ C遺跡等でも認められ、中国陶磁が供膳器に限って一定量消費されている。

中世後期でも14世紀と15世紀代では当然流通関係の変化が予測されるが、その点を遺物量が比較的多い西川島遺跡群についてみると、14・15世紀代を通して、珠洲陶器42%、瀬戸美濃陶器28%、中国陶磁26%、瓦器4%（土師器除外）の占有率が示されており、貯蔵・調理器は片口鉢を主体とする基本三種に集約された多量の珠洲製品のみが供給され、越前製品を一定数件出する半島外浦と異なる小地域差が窺われるとともに、瀬戸美濃製品が僅かながら中国陶磁を上廻るのが注目される。これは、中国陶磁の消費量が14世紀代より15世紀代に20%弱増にとどまるのに対し、瀬戸美濃製品は約90%増と大量に流入したことと、瓦器（火舎・香炉・花瓶・風炉他）が新たに加わったことによるもので、15世紀代の中国陶磁と瀬戸美濃製品の量比は約4対6となる。したがって、瀬戸美濃製品を主体とする増加分の数字をそのまま消費量増とするのは短絡的にすぎるとしても、流通量が質量ともに豊富になったのは確かであろう。15世紀代の瀬戸美濃陶器の器種は当遺跡で殆んど網羅され、供膳器4種、貯蔵・飲食器4種、調理器3種、茶器3種、宗教器他6種計20種以上にのぼり、特に平碗・小皿・天目碗、折縁深皿・卸皿および14世紀代からひきつづき香炉・花瓶が目立ち、供膳・宗教器は庄村落における中国陶磁の供給量不足の補完機能を果たしていたと考えられる。中国陶磁と瀬戸美濃製品の補完関係が村落各層間でどうであったか論証は難しいが、名主層主体の後期村落と墓域の一部とみられる白山橋遺跡の15世紀代の供膳器全体では、中国陶磁37%対瀬戸美濃製品64%（約0.6対1）となるが、器種別にみると碗類（天目碗含）は約2対1で瀬戸美濃製品、皿類は逆に1対3で中国製品が優勢である（付表1・2）。これが一般村落の法則的な数値とできるかは、なおデータの集積を必要とし、第1項で挙げた加賀南部の村落遺跡群では中世を通して中国陶磁が瀬戸美濃陶器を上廻る傾向が指摘されているが、少なくとも中国陶磁碗類は後述

する城館や港湾・門前町より供給量が少ないことは間違いないと思われる。さらに、本遺跡では中国陶磁の特殊器種とみられるものが青白磁瓶子1点にすぎず、依然名主級百姓には入手至難な高級品であったことが判る。なお、少量ではあるが、14・15世紀代の珠洲陶器に瀬戸美濃の瓶子Ⅰ類・広口壺・水注の仿製品が存するので、一部飲食・宗教器については、中国陶磁—瀬戸美濃陶器—珠洲陶器の重層性が認められることとなり、中世後期の流通を特色づける器種・産地別の商品格差の存在を示している。ただし、この重層性はあくまでも品質差であり、一般村落でも皿類は中国陶磁の流通量が瀬戸美濃製品を上廻っていることが示すように、少なくとも当該地域では奢侈的高級品を除けば、中国陶磁と瀬戸陶器で価値観（価格）に大差があったとは考え難い。

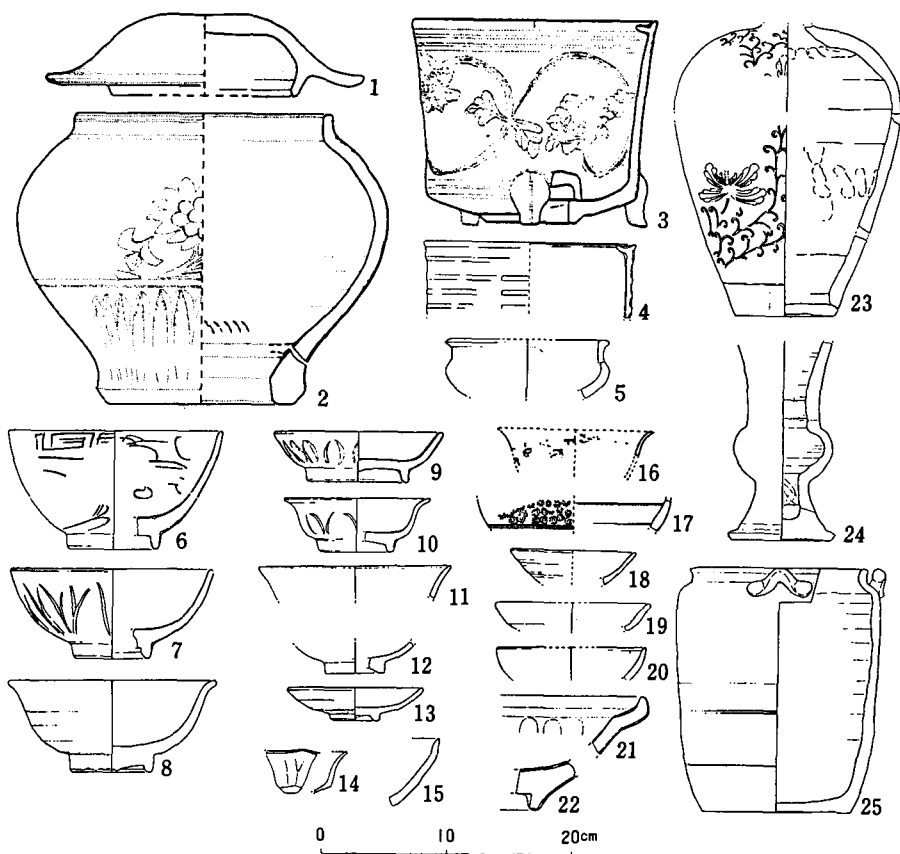
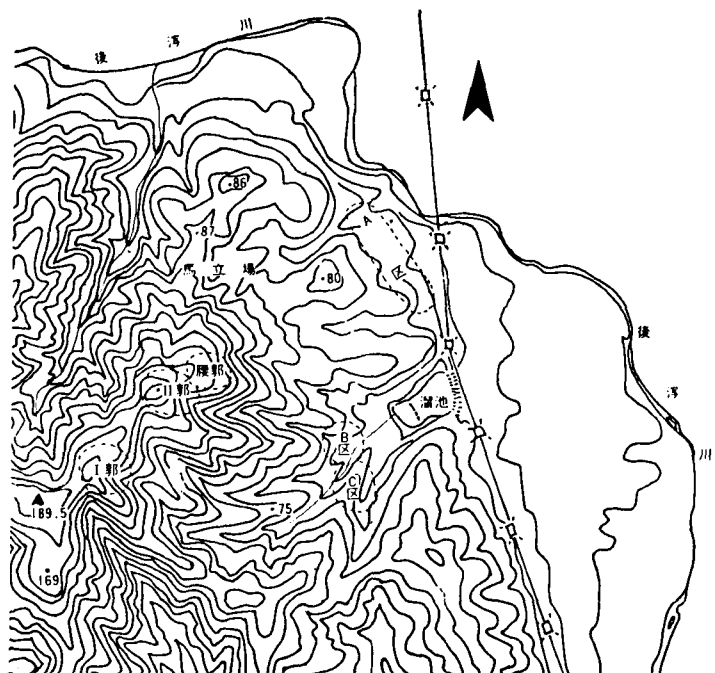
さて、上記村落遺跡を統括する在地支配層—守護・国人領主層の存在形態を具現する城館跡の類型整理作業も未了であって、山城と居館および周辺村落との一体的調査例は殆んどなく、城館構造の地域性を含め全て今後の論題である。ここでは、規模・構造に陶磁器組成を考慮して、(a)有力国人（守護代）級城館、(b)国人級城館、(c)村落領主級城館に大別し、15世紀代を中心とする良好な資料を出土した(a)陸奥・尻八館（城）跡、(b)同・境関館跡、(c)越後・坪ノ内館跡を素材に村落遺跡と対比しつつ陶磁器組成を検討する。

尻八館跡⁽¹¹⁹⁾（青森市後潟，Ⅳ・Ⅴ期，第15・16図）は、Ⅰ・Ⅱ郭と腰郭よりなる津軽屈指の山城（標高189.5m）であって、南西部から峰伝いに大倉岳を経て十三湊への山道が通じているとされ、安藤道貞の子重季が潮潟（後潟）氏を継いだとする伝承と、15世紀中葉頃以降に下る陶磁器が存しない点を重視すれば、安藤一族による外ヶ浜支配の拠点と推定される。境関館跡⁽¹²⁰⁾（弘前市境関，Ⅱ～Ⅴ期）も営造主未詳ながら、岩木川支流平川西岸にあって、内陸河川を介し河口に構営された安藤氏の居城福島城へ連繫する要地を占め、Ⅰ～Ⅳ郭が帯状に連結する50×240m（12,000m²）程の館跡である。主殿が設営されたⅡ南郭を中心に、掘立柱建物23、堅穴建物47、井戸45、竈状遺構129、土塹173等が検出されている。

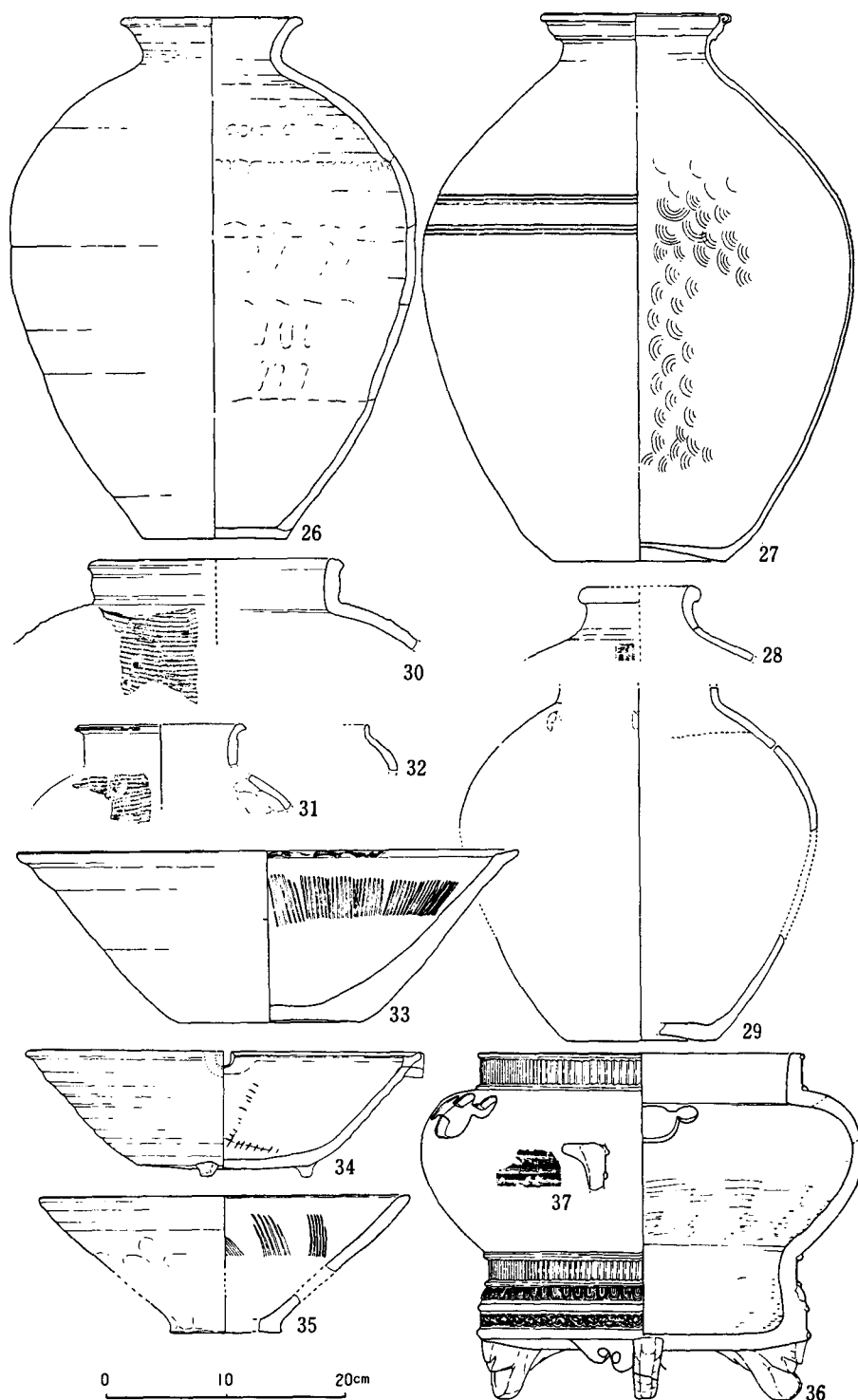
坪ノ内館跡⁽¹²¹⁾（新潟市長森，Ⅴ～Ⅶ，第17図）は、高田平野を貫流する関川支流、矢代川北岸段丘沿い1.5～3km間隔に構営された中世後期の居館の一つであって、営造主体は谷田を生産基盤とする村落領主とみられ、戦国時代には関山方面へ通ずる軍事経済的要衝に位置し、太鼓や法螺貝で連絡可能な“第2次支城”とされる。最終段階には、東西50～70m、南北30～50m（2,800m²）程の規模を有し、郭内で二面庇の館主居宅他8、郭外に被官屋敷4と井戸24、および柵・溝・土塹等が検出されている。

これら三城館跡は、いずれも15世紀代、特に尻八館・境関両遺跡は15世紀前半代が主体をなすが、該期の国産貯蔵・調理器は尻八館72%、境関93%、坪ノ内約100%と珠洲製品が大部分を占める（以下、付表3～5）。尻八館の比率が低いのは、境関同様に地産片口鉢が少量存するほか、茶壺とみられる越前・信楽大壺（3）を所有する点にある。なお、尻八館・境関で越中以東での出土例が稀な壺K種が各1片出土して⁽¹²²⁾おり、細片のため器種・法量の特定が難しいが、茶壺類に近似した性格を想定させる。15世紀代の珠洲製品は、尻八館で83%、境関で77%が片口鉢で生産地の動向を反映しているが、甕壺類を越前製品で補充している形跡は認められない。次に供膳器は、坪ノ内で中国陶磁を上廻る土師器皿類が出土しているのに対し、陸奥の2遺跡は⁽¹²³⁾皆無で顕著な地域差が認められ、そのことは尻八館出土唯一の土師器皿が黒漆塗り製であることに良く示されている。

該期の中国陶磁の占有率は、全体に遺物量が少ない坪ノ内にやや不安が残るものの、尻八館67%、境関39%、坪ノ内18%（土師器除外）と明瞭な格差が認められる。このことは、瀬戸美濃製品との量比におきかえてもほぼ同様であって、坪ノ内2.3倍、境関1.4倍に比べ尻八館は5.9倍の数値をえ、中国陶磁が圧倒的に多い。さらに両者の関係は、塙では尻八館が全て中国製なのに対し境関は3倍、皿は尻八館7.1倍、境関2.5倍となり、城館b・cタイプの格差が相対的なのに比べ、aとb・cでは中国陶磁の所有・消費量に大きな懸隔が存在する。尻八館・境関がともに朝鮮産塙皿類を少数出土しながら、尻八館で明代の青花碗が3個体確認されていることもその優越さを裏づける。このほか尻八館には、青磁牡丹文有蓋広口壺（酒海壺1）、牡丹文大香炉（1）、黄褐釉四耳壺（呂宋壺3）、朝鮮産褐釉大壺（1）、象嵌印花花瓶（三島手粉青沙器1）の多様な高級輸入陶磁が見出され、国産、中国・朝鮮産大壺を茶壺として⁽¹²⁴⁾よければ、茶陶を中心とし調度品を加えた品質の高い奢侈的陶磁器を所有しており、瀬戸美濃製品も貯蔵・宗教器が主体であることも合わせ、本山城造営主の政治・経済・文化的卓越性が看取される。一方、境関・坪ノ内で高級陶磁と認定できるものは、それぞれ、青磁瓶・青白磁梅瓶（各1）、瀬戸播座茶入（Ⅳ期、1）や瓶子（Ⅱ・Ⅳ期、5）・水注（Ⅳ期、1）および宗教器と黒褐釉壺（2）にとどまる。なお、城館内の建物ないし居住域相互の階層性と陶磁器組成の相関性に関するデータは不足しているが、境関では館主の主殿を核とするⅡ南郭からⅣ・Ⅴ期の陶磁器の63%が出土しており、坪ノ内では郭内の主殿と郭外の被官衆の屋敷地と推定される居住域を画する堀SD2より遺物の大半が出土しているため区分不能であるが、包含層の状態ながら郭外からも白磁皿・瓦器香炉等が出土しているので、日常的な陶磁器は変わらなかった

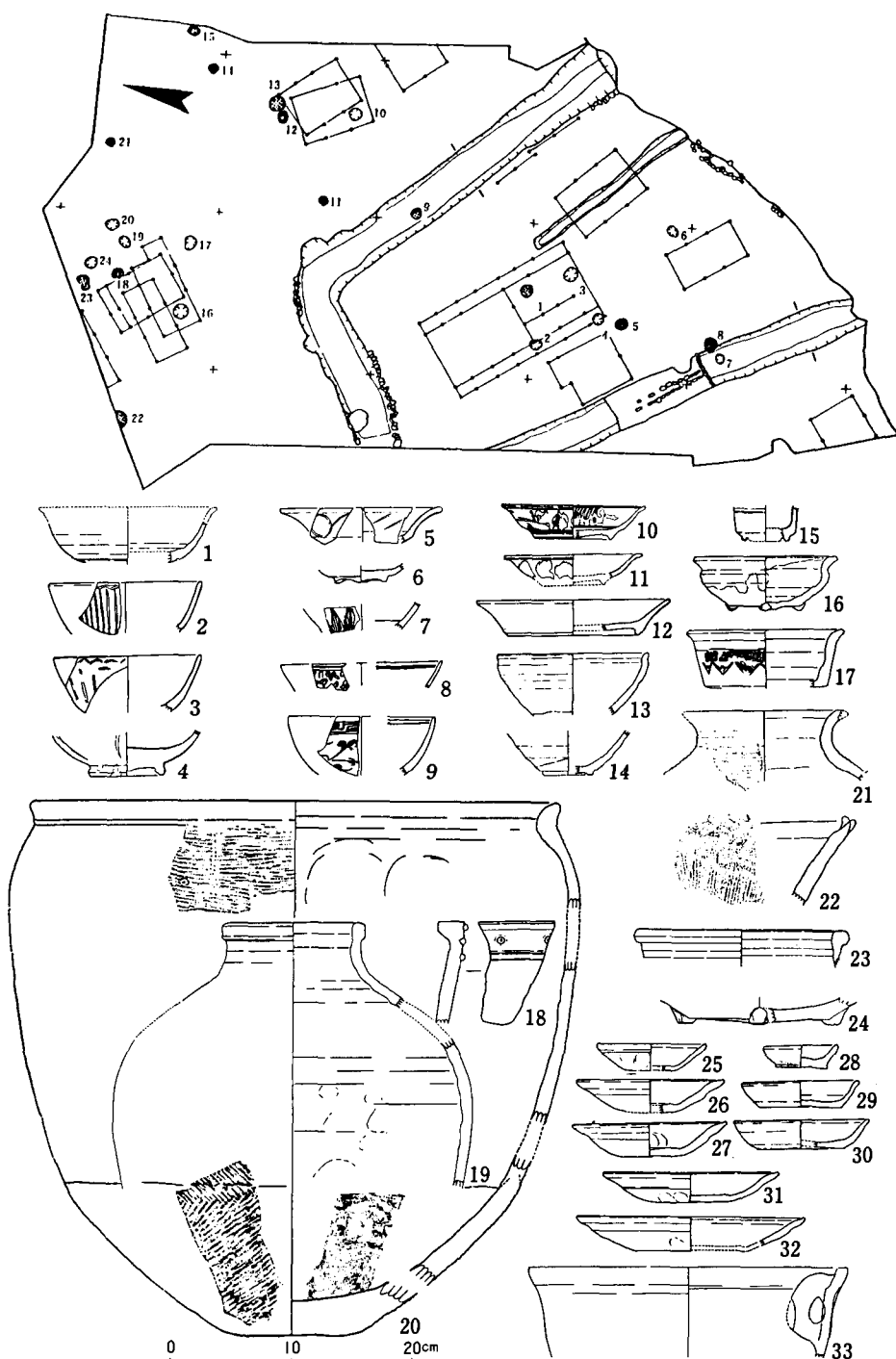


第15図 青森県尻八館遺跡の位置と陶磁器組成(5期) (1) 1～4・6～10・21・22 青磁, 11～14 白磁, 15 天目, 16 染付, 17・18 朝鮮, 5・19・23～25 瀬戸美濃, 20 土師器(拠・註119文献)



第16図 青森県尻八館遺跡の陶磁器組成 (2)

26 信楽, 27 朝鮮, 28・29 黄褐釉陶, 30~33 珠洲, 34 瀬戸美濃, 35 土師器, 36・37 瓦器 (26~29は縮尺不同)



第17図 新潟県坪ノ内遺跡の遺構と陶磁器組成(5・6期)

1～5 青磁, 6・12 白磁, 7～11 染付, 13～16・24 瀬戸美濃, 17・18 瓦器, 19 越前, 20～22 珠洲, 23 黒褐釉陶, 25～33 土師器(19・20は縮尺不同)
(拠・註121文献)

とみられるが、今後他の遺跡で厳密な検討を要しよう。

三 墳墓および経塚遺跡

前項で概述した城館・村落における日常的な耐久消費財としての陶磁器とともに、一過性の宗教器としての蔵骨器・経外容器類の消費形態は、中世陶器窯成立の現実的契機、ひいては各地域窯の器種組成の特質に一定の規定性を与え、蔵骨器の場合、陶磁器類の種別による重層性の存否、あるいは中世前期から後期への移行の指標となる、陶磁器の需要層の拡大と消費量の増加とのかかわりあいも問題となる。しかし、資料操作の前提となる墳墓群の類型的整理は村落同様未了で、蔵骨器の使用が少ない後期の集団墓ではそのこと自体のために、群構成の分析に困難を伴う事例が多いことも確かである。また、宗教器の特殊性として、陶磁器の製作年代と使用年代のずれが常に問題とされながら、その判別は土師器を共伴する事例に限られ、使用痕等の観察による未使用品と日常器転用品の識別も不透明な現状にある。このほかに、蔵骨器の消費形態は、火葬と土葬の併存、有機質蔵骨器の併用、15世紀後半以降陶製蔵骨器使用の習俗が衰退する等の事情も、階層別保有を模式化しにくい状況を作り出しているが、以下、不十分ながら階層構成の観点から基本的な墳墓類型を設定し、そこでの蔵骨器のあり方をみてゆきたい。

〔AⅠ類〕平地と隔絶した丘陵尾根上に、数基ないし10基前後の小有丘墓が列状に築造されたもの。

昭和10年に発掘された羽後・田川七日台墳墓群⁽¹²⁵⁾（鶴岡市田川，第18図）は、庄内平野南部、小沢川東岸に所在する伝平泉藤原氏家人田川太郎行文館跡背後の南北走する山稜線上（比高約70m）に1列に並ぶ、径3～5m前後の礫積の小有丘墓10基よりなる。頂部に占地し群中最古とみられる9号墓に石櫃状容器が使用されていたほかは、片口鉢ときに甕・壺下胴片で蓋をした壺T種（5基）ないしR種AⅡ類（3基）を蔵骨器としており、器肌が赤褐色に発色した製品を含むことから、庄内盆地の中世窯から供給されたと考えられる。和鏡・鉄製武器（刀子・剣？）の副葬例（3基）がある。類似の遺構は、七日台につづく北方の尾根（8基）や田川小字宮の前（2基）でも確認されている。また、能登と加賀を画する大海川^{みぎのうみ}を挟む丘陵地では、約400m圏内に黒川又七郎山群（5基、石川県河北郡高松町）、元女堂山群（7基、同町）、箕打群^{みうち}（8基、同町）が所在する。このうち一部調査が行われた元女堂山群⁽¹²⁶⁾は瘦尾根上に径5m、高さ1m前後の礫で被覆した低有丘墓が3～7m間隔で1列に並び、珠洲壺

T種・片口鉢を使用し、和鏡・鉄刀を出土した墳墓もある。

当類がこのような、小地域に2～3群のまとまりをもって築造されるのが普遍的なあり方かどうかは今後の調査をまたねばならないが、管見の範囲では大体珠洲系陶器Ⅰ期におさまるので、中世前期の典型的な類型であることは間違いない。ここにみられる規模・構造・配置と蔵骨器の器種、および副葬された和鏡・鉄製武器類は青白磁合子の欠落を除けば、当地方で12世紀後半～13世紀初葉頃に最盛期を招来した経塚とその供養具セットと同一である。埋経と埋葬行為の親縁性はつとに指摘されて⁽¹²⁷⁾おり、その思想的基盤の究明は今後の課題であるが、当該タイプの墳墓がほぼ12世紀代に限定される点に着目すれば、初期の埋経にみられる極楽往生の願意や、靈山信仰に随伴する分骨習俗の一般化は有力な手がかりとなろう。したがって、前掲2遺跡を墳墓とする確証はえられないものの、造営主体は小地域の開発を領導した在地領主層であり、近傍の2～3群が2世代を越えない年代幅で併存しつつ継起的に築造され、かつ群内部で明確な格差を認め難いことからすると、特定の在庁官人ないし庄官級在地領主と近親を中心とする族縁的な墳墓群として大過あるまい。

なお、当類型と経塚は、外観上はもちろん陶器を直接経容器とした事例の多い当地方では、発掘品でも識別が困難なことは前記の通りで、経塚と墳墓が複合していることも充分考えられる。北東日本海域の経外容器については再論をひかえるが、須恵器（珠洲）系48件82点、瓷器系9件13点、須恵・瓷器折衷系3件4点の数値に地域的特色が良く反映されており、中国陶磁（四耳壺）の転用例は1件にすぎない。そして、越後・天神山⁽¹²⁸⁾経塚出土珠洲系経筒のごとく、粟田重包を檀越とし宗儀執行の日時に合わせた特注品の存在は、窯元と発注者の緊密な需給関係の一端を伝えるが、経筒銘文に檀越として断片的に姿をみせる、「佐伯時兼」（羽後・湯田川経塚）、「倉持宗吉 菅原氏」（越後・加茂青海神社経塚）、「藤原正宗 縁支草加部代」（同・金仙寺経塚）、「きよわらのたけひら」（越中・上向田⁽¹²⁹⁾経塚）、「おちのためひさ」（出土地未詳⁽¹³⁰⁾）等の在地領主層こそ、珠洲（系）窯の成立を惹起し、居館・経塚とAⅠ類墳墓を残した消費主体であった。経外容器・蔵骨器に転用されたⅠ期の壺T種に時折みられる略押や紋章文刻印が、在地領主層の嗜好に応ずる加飾法として発達を遂げた理由も、その意味で肯首しうるであろう。

〔AⅡ類〕平地に近い低丘陵上に10数基の小有丘墓が密接して営まれたもの。

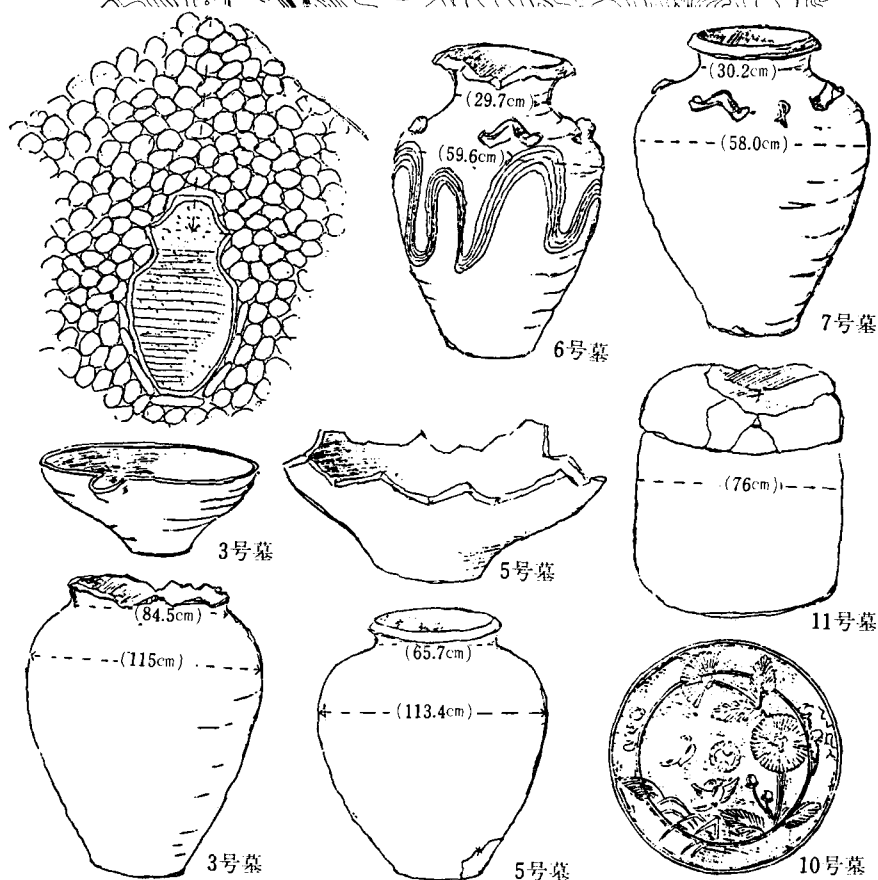
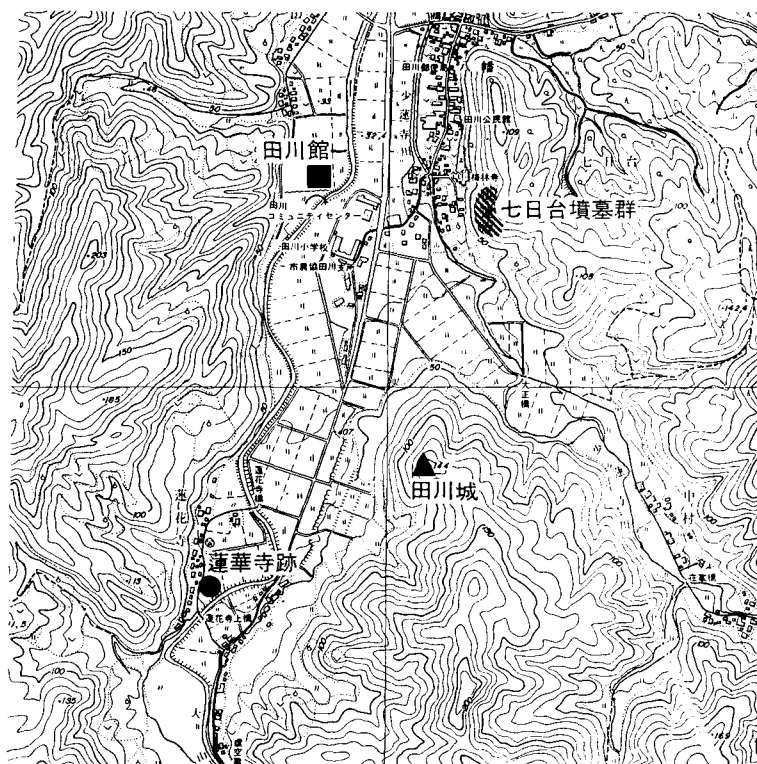
加賀・湯屋⁽¹³²⁾チョウ塚遺跡（能美郡辰口町、第19図）は、入り組んだ丘陵間の小平地を臨む丘端に径1～5m、高さ数十cm以下の礫で被覆した小低有丘墓16基が3列に密接して墓群を形成する。加賀中甕（1号）・壺の蔵骨器を主体とする比較的大形で古

いもの（2～3基）も見出せるが、大半は曲物を使用するか、整地した地山上に盛られた灰黒色炭層中に直接火葬骨を納めているようで、箱形土壙土葬墓（9号）も1基ある。供献品は土師器皿のほかは、短刀・火打鎌・宋銭？（2号）、青磁碗片（9号）ぐらいで、12世紀末～13世紀にかけて築造された。墓丘の規模、蔵骨器の有無、副葬品の寡多が直ちに被葬者の格差に結びつくといえないが、未掘墓に14世紀代以降のものを含むようで、小形五輪塔を墓標に採用している。本類型に帰属する他の調査事例に接しないが、1基を除き単葬墓である点でAⅠ類と同じであっても、立地・配置を含め群の構成原理は異なり、中央列の1・5号墓の周囲から、次第に間隙を埋める形で継起的に造墓したと推定され、村落領主級の一族の家族墓とみられよう。

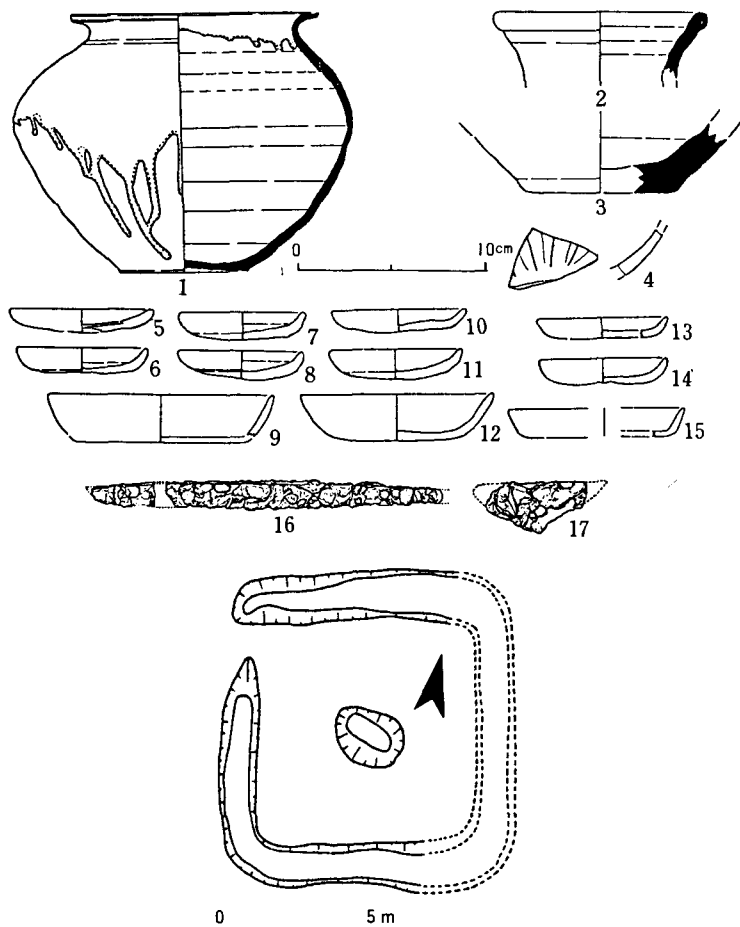
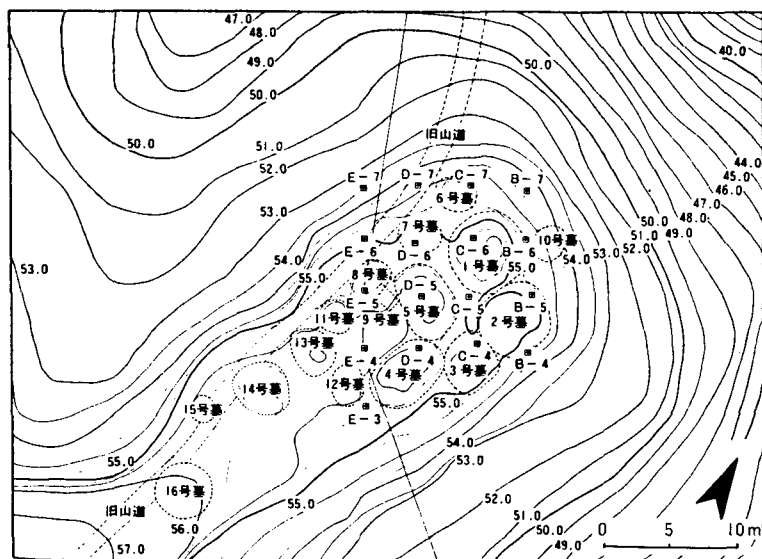
〔BⅠ類〕 村落から隔絶した丘陵地に、方形敷（配・集）石墓を基礎単位とする共同墓地を形成したもの。

加賀・軽海墳墓群⁽¹³³⁾（小松市、第20図）は、南加賀を南北に分かつ^{かけはし}梯川南岸を望視する丘陵斜面を切削して4段の平坦面を造成し、各段に1辺1～2m弱の長方形敷石墓を列状に配置し墓域を形成している。上1段10基、上2段3基が調査されたが、敷石下に①石蓋をした陶製蔵骨器、あるいは②有機質の蔵骨器を埋置、③20×40cm程の埋納穴に直接火葬骨を埋納の3型式がみられ、②③タイプが多い。陶製蔵骨器は主として加賀、珠洲壺・片口鉢類であるが、青磁壺片も出土しており、大甕片も見出されるので、埋葬状態は不明であるが土葬墓も混在していたと考えられる。築造年次は13世紀前半代を上限とし14世紀代に亘ることが確認できるが、中世後期には地輪の1辺が25cm前後の五輪塔が造立されている。本遺跡の方形敷石墓は、長辺0.8～1.9mの面積差があるが、陶製蔵骨器の有無とは関係がなく、大形石塔類が見当たらないこともあって、概して均等な墓域占有原理によっている印象を受ける。

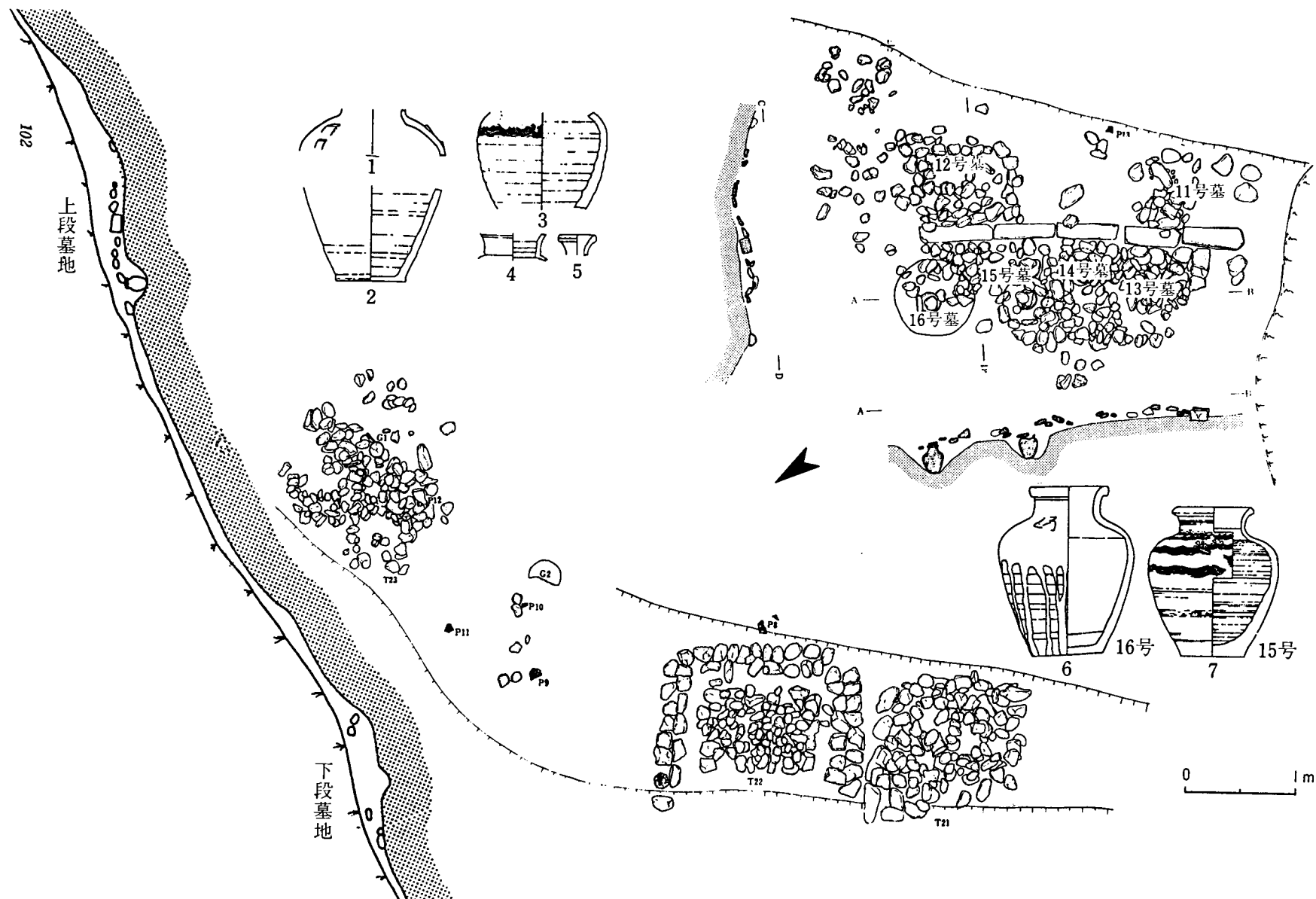
当類型の墳墓群は、著名な近江・大谷遺跡⁽¹³⁴⁾（蒲生郡日野町）をはじめ全国に広く認められ、軽海遺跡と対峙する梯川北岸の台地上でも古府十九塔山遺跡（小松市、12世紀後半～14世紀）、得橋神社遺跡（同市）が径1.5km圏内に所在し、北東4kmを距てた支流鍋谷川北岸の丘陵斜面に営まれた金剛寺坂遺跡⁽¹³⁵⁾（能美郡辰口町、13～14世紀）も基本的に同じ性格の墳墓群である。これら加賀国衙周辺の墳墓群は、11世紀後半～12世紀前半代に任用国司が郷司、のちに庄官・地頭等として在地領主化し、一族・庶流が板津庄・白江庄・長野郷等の開発領を獲得した、板津介に具象される在庁官人を頂点とする擬制的同族団⁽¹³⁶⁾との関連を考えるべきであろう。前記古府・軽海両遺跡がいずれも10世紀代の加賀国分僧寺・尼寺に同定される寺院跡に営まれているのは偶然の一致とはみなし難く、金剛寺坂遺跡の山麓に「上館・館・下館」の字名をとどめるの⁽¹³⁷⁾



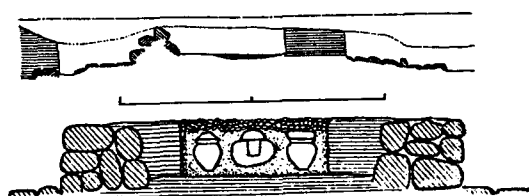
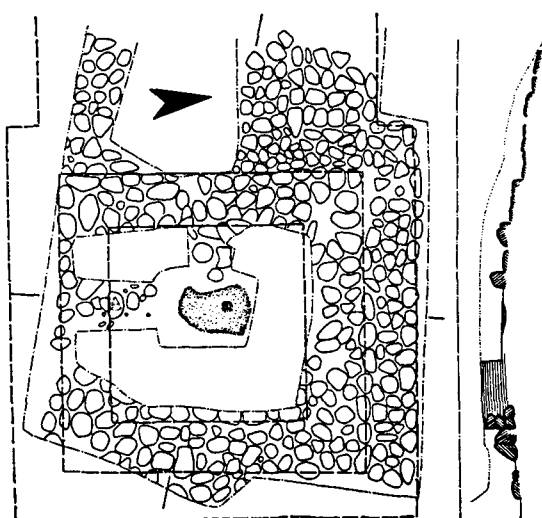
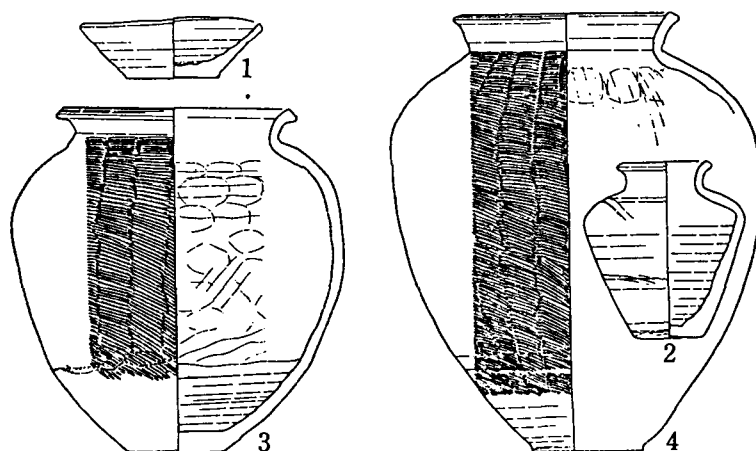
第18図 山形県田川七日台遺跡の位置と遺物（遺物図は拠・註125文献）



第19図 石川県湯屋チョウ遺跡の分布と遺物(上), 同剣崎遺跡遺構図(下) (拠・註132, 148文献)
1・5～9 1号墓, 10～12・16・17 2号墓, 13～15 3号墓, 4 9号墓, 23 採集



第20図 石川県軽海遺跡の遺構と遺物（1・2・5・6 加賀，3・7 珠洲，4 青磁）（拠・註133文献）



(納骨施設復原模式図)

第21図 新潟県華報寺高阿廟の遺構と遺物（拠・註70文献）

も看過できない。当類型の群構造を分析する遺跡に恵まれないが、その規模からみて党（惣）的結合を紐帯とする相当数の家系の歴代惣領・庶子と家族の共同墓地とみられる。

なお、在地領主の族縁墓で寺院との関係が分明なものに越後北部の華報寺遺跡（北蒲原郡笹神村出湯，第21図）⁽¹³⁸⁾を挙げることができる。華報寺遺跡は、五頭山麓に造営された寺院背後の経沢・目洗沢から西方の蓮台野にかけての広い丘陵斜面が墓域化されている。目洗沢の一角には、白河庄地頭大見氏の女と推測される高阿弥と子素詰和尚、および高弟を合葬したとみられる禅門墳墓堂や北接する斜面に平場を造成し、正安元（1299）年在銘経筒蔵骨器を内蔵した壺をはじめとする陶製蔵骨器（3以上）、ときに切石造りの小石槨を礫で被覆した集石墓上に五輪塔を造立する墓地が知られている。華報寺背後にはこうした平場が何箇所か設けられ、地頭級領主をはじめとする複数家系の家族墓と考えてよいが、珠洲、笹神壺・片口鉢類のほか青磁壺、瀬戸四耳壺・瓶子も出土していることから、蓮台野一帯と別個に設定された歴代住僧と檀那をはじめとする特定家系の墓域かと思われる。このことは、石塔類からいえるようで、寺院裏山では14世紀初頭、畿内工人の作とされる復高約2.5mの大形宝篋印塔をはじめ、南北朝期に中心をおく大形、精巧な石塔類がみられるのに対し、蓮台野出土と伝えるものには、永仁7（1299）年在銘六字名号板碑や1m弱の大形石仏も存するが、概して後出的な総数300基以上といわれる小石仏が目立つようである⁽¹³⁹⁾。蓮台野の被葬者は、坪井良平氏が指摘されたごとく、華報寺が五頭山信仰に発する修験道場を足場に13世紀前半代のうちに臨済禅寺に改組されるという経緯を背景とした霊地納骨習俗の盛行とかかわる、近郷の村落領主・上層農民を含む幅広い階層を想定すべきであろう。能登北部の中継地を占める明泉寺旧境内通称鎌倉屋敷⁽¹⁴⁰⁾（鳳至郡穴水町明千寺）で4,200m²程に124基以上の石塔類（五輪塔56、宝篋印塔2、板碑26、石仏38他）が林立する有様は、かかる中世後期の在地領主層を主体とする墓地の地上景観を今に伝えている。詳細は不明であるが、同じ越後北部の孤島栗島小泉庄地頭色部氏との関係が考えられる内浦観音堂遺跡⁽¹⁴¹⁾（岩船郡栗島浦村）、越中西部の石垣遺跡⁽¹⁴²⁾（魚津市）、加賀北部手取扇状地の一隅に営まれた室町幕府奉公衆倉光氏の墓地とみられる倉光ゴキ山遺跡⁽¹⁴³⁾（松任市）等も華報寺裏山と同類型の中世墳墓と推定され、瀬戸製品を含む陶製蔵骨器を潤沢に消費しうる階層としてよい。

〔BⅡ類〕 BⅠ類に近似した存在形態をとるが、中世後期に造墓を開始し墓域も狭いもの。

能登中部の上町マンドラ遺跡⁽¹⁴⁴⁾（鹿島郡中島町）は、七尾西湾に注ぐ熊木川中流域の

平野からやや奥まった丘陵先端を溝で画し、600m²程を墓域としている。頂部に径5m、高さ1mばかりの中甕を埋置した有丘墓が1基築かれ、周囲を2、3段に切削して、14～15世紀代にかけて1辺2m前後の方形配石墓40基以上を計画的に配置している。配石墓には殆んど例外なく陶製火葬蔵骨器を納め、周りに2、3の有機質蔵骨器を追葬し、さらに配石墓の間隙に小石槨、小集石墓、板石で蓋をした小納骨孔等が設けられており、墓地の縁辺に後出的な土壙土葬墓数基も検出されている。供献物は若干の銅銭・土師器皿に限られるが、大半が小形五輪塔・板碑を造立している。群構成の詳細は正式報告をまたねばならないが、墓域の分割的占有を前提に方形配石墓を一世代的な家族墓として、10家系程度が累世的に造墓した事例とみられるが、小群相互の格差は目立たない。陶製蔵骨器が全て珠洲陶器で占められているのは、生産地に近いという地縁性に加えて、領主層間の相対的な階層差に由来するものであろう。本遺跡の被葬者は、北約500mに所在する熊木（貝田）城を拠点とし熊木庄に蟠踞した国人熊木氏と親族、被官の地侍層を主体とする共同墓と推定される。

次に、越後北部の平木田イダテン山遺跡⁽¹⁴⁵⁾（北蒲原郡中条町）は、独立丘頂部10×20mを溝で囲画し、北方に径7m程の敷石区、南方に3基の敷石墓が設けられ、敷石下より14世紀後半から15世紀前半代に亘る陶製蔵骨器11点のほか、鉄製蔵骨器1個が埋置され、火葬骨埋納穴も検出された。蔵骨器は瓶子1点のほかは全て珠洲小壺（壺R種B類）で占められている。墓標に小形宝篋印塔を用いるのも特徴的で、おそらく墓地全体の標識とみられる多層塔残欠のほか阿弥陀種子板碑も1点確認されている。供献品は宋銭7枚と青磁合子が1点存する。

当類型はBⅠ類に準ずるが、造墓時期が中世後期に下り墓域も狭少で、陶製蔵骨器は全て在地産でまかなわれており、中世後期に小地域を基盤に成長した下級国人領主層の家族墓とみられる。さきの熊木城が能登でC級の規模・構造にとどまり、造立された石塔類が小規模なことはその傍証となろう。なお、平木田イダテン山遺跡は、墓地の設営と陶製蔵骨器の器種選定にみる強い規制からして、一家族墓とすればC類に帰属させるのが妥当とも考えられるが、詳報をまって検討したい。

〔CⅠ類〕村落（屋敷地）の一角ないし近辺に、礫敷方形壇状ないし方形周溝の墓域を設営し、特定家系の累世的な家族墓を営んだもの。BⅠ類を構成する基礎単位と考えてよく多様な存在形態が予測されるが、代表的な調査例を紹介する。

普正寺遺跡⁽¹⁴⁶⁾（金沢市、第22図）は、北加賀の中核的港湾町の一角から顕現され、2.4×3.6m程の低壇丘内に、略方形の敷石ないし大石を基礎に1辺40cm前後を主体とする大形五輪塔6基が3列に配置されていた。陶製蔵骨器は大体石塔類に先行する

とみられ、石塔造立の時点で改(合)葬されたと観察される1点が2基の五輪塔(5・3号)間に置かれた地藏菩薩陽刻石仏下に意図的に埋置されていたほか、3個は五輪塔から遊離しており、14世紀前半～15世紀前半頃にかけて継起的に造立された五輪塔に直接伴うのは、火輪および地輪底面の刳り穴に納められたかと推定される火葬骨の可能性が大きく、壇丘周縁の礫間から出土した4個以上の漆塗り製品を混えた曲物蔵骨器は随次追葬された近親者であろう。ここに埋葬された乳幼児を含む6世代程の十数人は、次の剣崎遺跡より石塔規模がひとまわり大きいから、庄官級在地領主と近親の累世的家族墓と考えられる。近似した事例として、1辺約3.7m、高さ60cmばかりの壇丘内に、Ⅰ・Ⅱ期の珠洲系陶器櫛目文壺(壺R種AⅠ・Ⅱ類)4個以上を埋納した、越後西部の河沢西袋河沢塚遺跡⁽¹⁴⁷⁾(中頸城郡吉川町)が知られている。

〔CⅡ類〕 CⅠ類と同一の立地・構造をとるが、石塔規模が小さいもの。

剣崎遺跡⁽¹⁴⁸⁾(松任市、第19図下)は、普正寺遺跡の南西約11kmに所在する、外周の1辺約10mの方形周溝墓である。削平を受け正確な原状を知りえないが、中央に大甕を埋設する不整楕円形の土壌を穿ち、13世紀後半から15世紀前半頃に亘り西辺から左廻りに蔵骨器と地輪の一辺30cm前後を測る五輪塔と宝篋印塔9基以上を造立している。溝内に直接火葬骨の追葬が確認されているので、五輪塔の規模差以外、基本的な構造は普正寺遺跡と変わらない。普正寺・剣崎両遺跡の陶製蔵骨器は、北から搬入された珠洲陶器と南から移入された越前・加賀陶器の壺・片口鉢のほか、剣崎遺跡では瀬戸瓶子も出土していて、この点での階層差は認めにくい。後者の被葬者として藩政期の地誌類に伝承された剣崎土佐などの村落領主が同定されている。越中中部の上野Ⅱ遺跡⁽¹⁴⁹⁾(婦負郡小杉町)も当類に帰属し、良好な陶製蔵骨器資料が出土している。

〔DⅠ類〕 山裾ないし丘尾の自然丘頂、あるいは平地に一辺数m、2、3段築の石組施設を築いたもの。孤立した場合と付近に類似遺構が存する場合がある。

越中・銭甕山遺跡⁽¹⁵⁰⁾(東砺波郡井波町清玄寺、第23図)は、八乙女山西麓の丘頂に一辺6×5mの2段配石遺構を造作し、中央の土壌に14世紀後半代の珠洲大甕を埋置してあった。また、平地の事例としては、手取川中流域の河岸段丘上に築造された加賀・白山遺跡⁽¹⁵¹⁾(石川郡鶴来町、第23図)がある。下級神官の居住・墳墓域から隔離した独立墓で、正面に3段の石段を付設した6×3mの長方形壇状区画を大形河原石で造作し、中央に珠洲壺を埋置していた。壇上の石塔類は失われているが、白山宮長吏など上級神官の墳墓と考えられる。

当類型の遺構は、越中・香城寺遺構⁽¹⁵²⁾(東砺波郡福光町)の山裾で諏訪社旧地に立つ杉の古木の根元に1基(一辺4×4.2m、方形3段築成石組)と南側の尾根上でも数

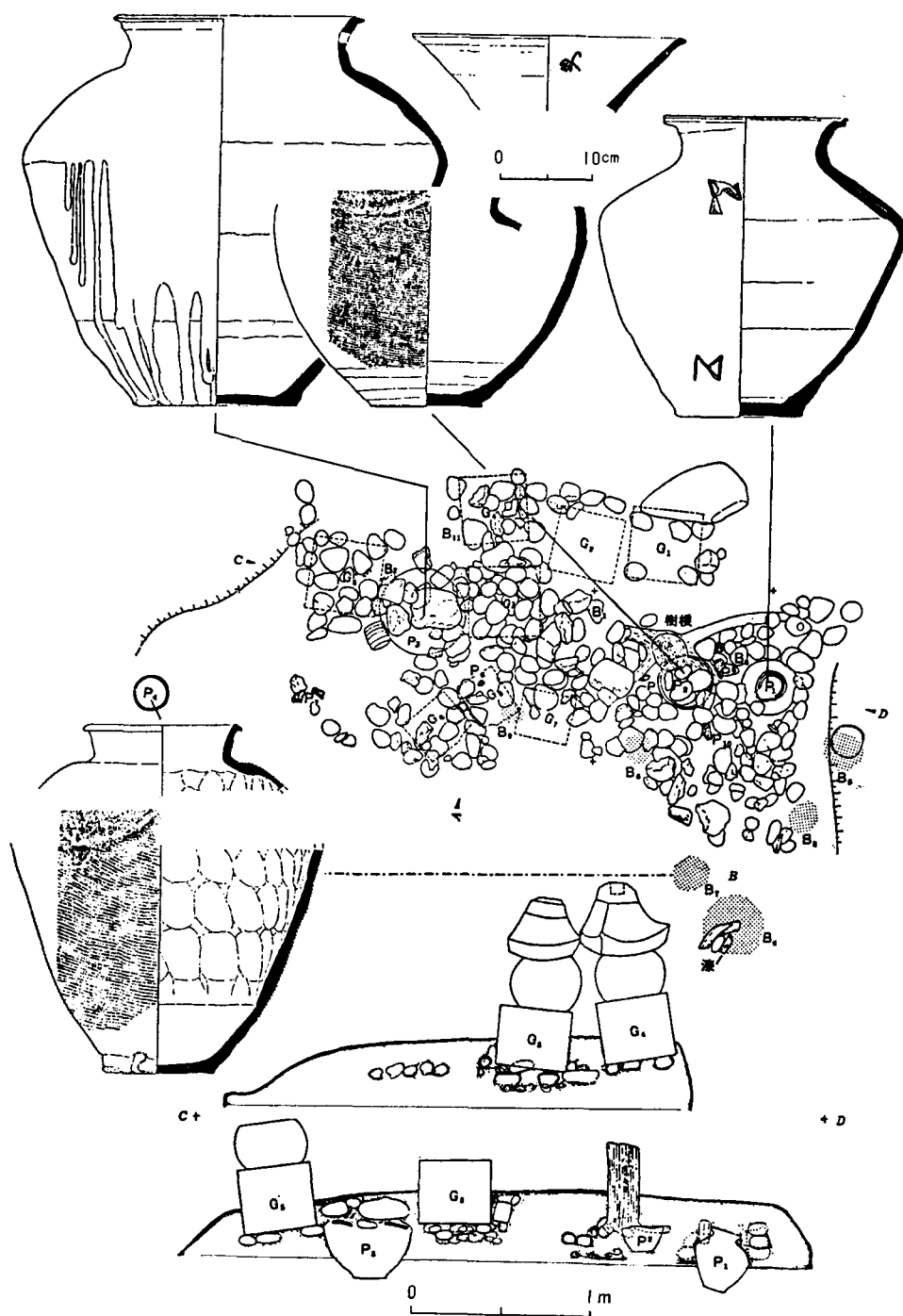
基発見されている。岸本雅敏氏はこの種の遺構に勝手が含まれる可能性を留保しつつ、三層塔を具象した構築物とみなし、銭甕山遺跡の被葬者を、「集団墓域内に包括されえない、つまり集団から超越した特殊な人間」、「天台の止観寺あるいはその子院である清玄寺・蓮代寺などの⁽¹⁵³⁾高僧」を想定されたのは妥当な見解であろう。さきの越後・華報寺高阿廟は、張り出しを付した下段の一辺7.3m、高さ1.3mばかりの3段築成配石遺構の上段に石組施設を設け、石櫃に納めた徳治3（1308）年在銘素喆和尚の銅製蔵骨器と、母高阿弥および高弟の遺骨を納めたとみられる珠洲系壺3点を合葬、仏像・和鏡を副納し、壇上に小堂宇を建てたとみられる墳墓堂である。DⅠ類より一段と大規模かつ入念な造作で、その原型としてよく、今後DⅠ類遺構上面の精査がまたれる。

〔DⅡ類〕 DⅠ類と同様の立地に、数mないし以下の有丘墓を築き、陶棺ないし陶製蔵骨器を主体とするもの。

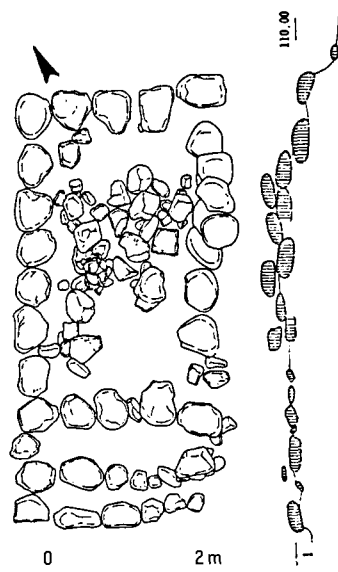
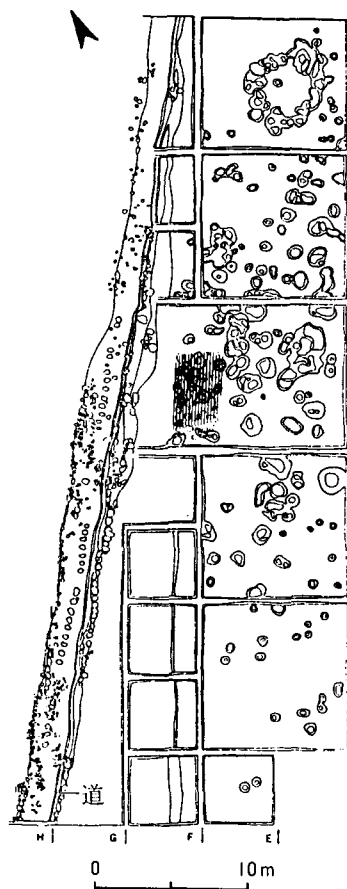
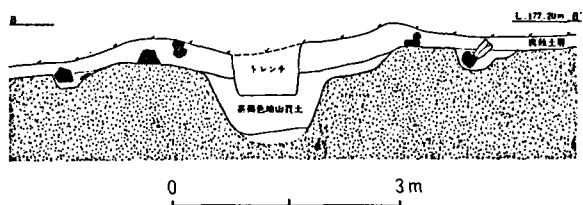
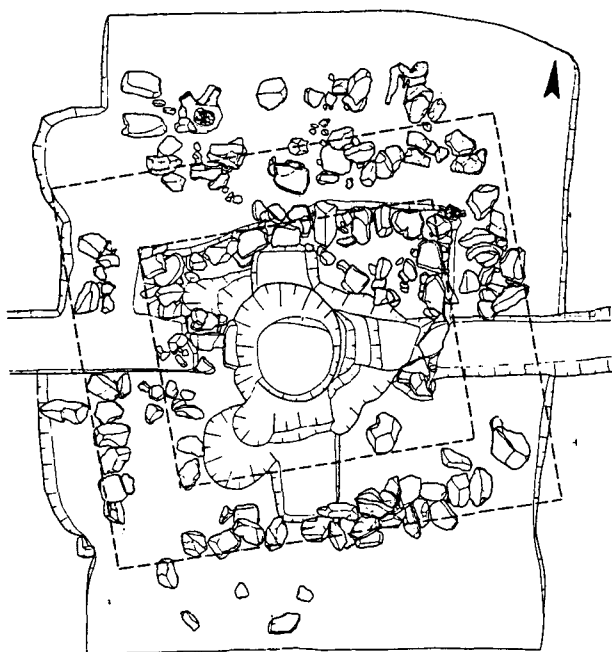
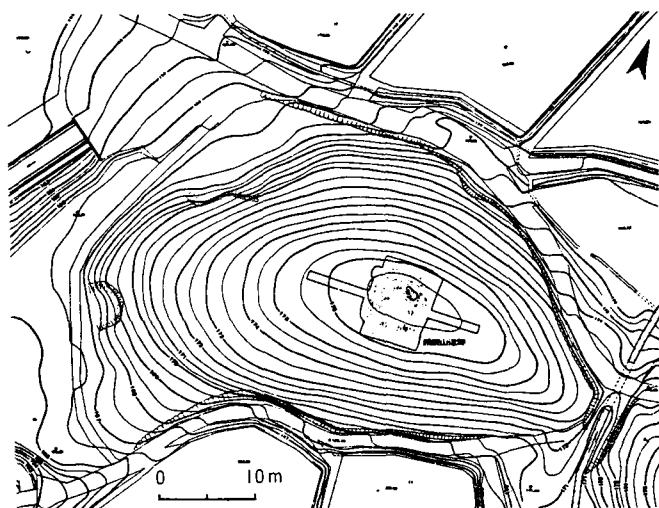
越後・座禅塚遺跡⁽¹⁵⁴⁾（長岡市雲出町水梨）は、丘頂に高さ1.3m、5×7mばかりの方形台状塚を築き、2次的に改造された段階で周溝中より14世紀代の大甕が出土し墳墓の可能性がある。越中・殿村遺跡⁽¹⁵⁵⁾（下新川郡朝日町）は、径3m程の塚上に五輪塔を造立し、地下から倒置した珠洲大甕が出土した。この他、明確に塚状の盛土を確認できなかったものの、同・笹川臼ヶ谷遺跡⁽¹⁵⁶⁾（同町）では土壇に玉石を敷きつめ座位屈葬の遺体に珠洲大甕を倒伏し、加賀・日吉および八幡遺跡⁽¹⁵⁷⁾（石川郡鶴来町）は、山麓部で礫積み中に石蓋をした加賀大甕を正位に埋設し、八幡遺跡では甕の周囲に鉄刀を矢筈状に立てめぐらしてあったとされ、白山宮の中級神官の墳墓群の一部とみられる。こうした塚状墳墓は、羽前・城の下遺跡（鶴岡市水城）では墳丘中央に珠洲系甕と四耳壺を埋置し川原石で覆い、同・木谷地沢遺跡（同市三瀬）では盛土上に礫を敷き珠洲系壺を埋置するなど北東日本海域で一般的な墳墓形態であるが、居住域から隔絶した丘頂に営まれたものと、居住域に隣接した山麓ないし平地に営まれたものがある。座棺と火葬蔵骨器との性格の差異等については稿を改めることとし、ここでは現象的にDⅡ類をDⅠ類の簡略化された類型、すなわちより下位の階層の中世墳墓、DⅡ類に一応包括したが明確な墓丘を有せず複数の小群を構成するのは、一段と普遍的なものと解しておく。

〔EⅠ類〕 中世後期、村落近辺の丘陵に数十基ないし以上の集団墓を形成したもの。

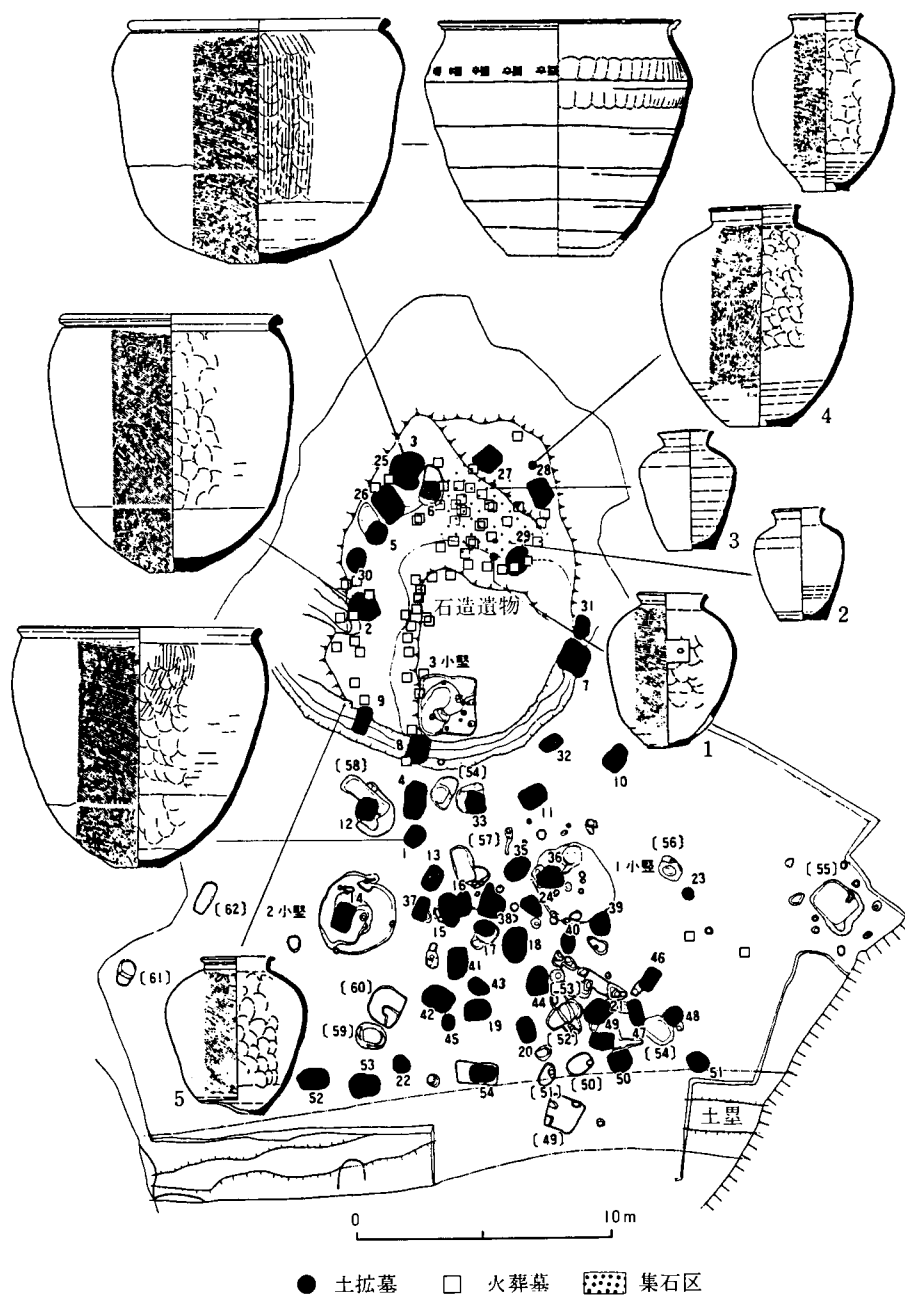
全面発掘が行われた能登中部の細口源田山遺跡⁽¹⁵⁹⁾（七尾市、第24図）は、邑知低地北西辺の一角を占め、基部を土塁で画した舌状丘陵の先端500m²程の墓域から、土葬墓54（陶棺3、木棺16、直葬35）、火葬墓約80（陶製蔵骨器約10、木箱・曲物類約70）が



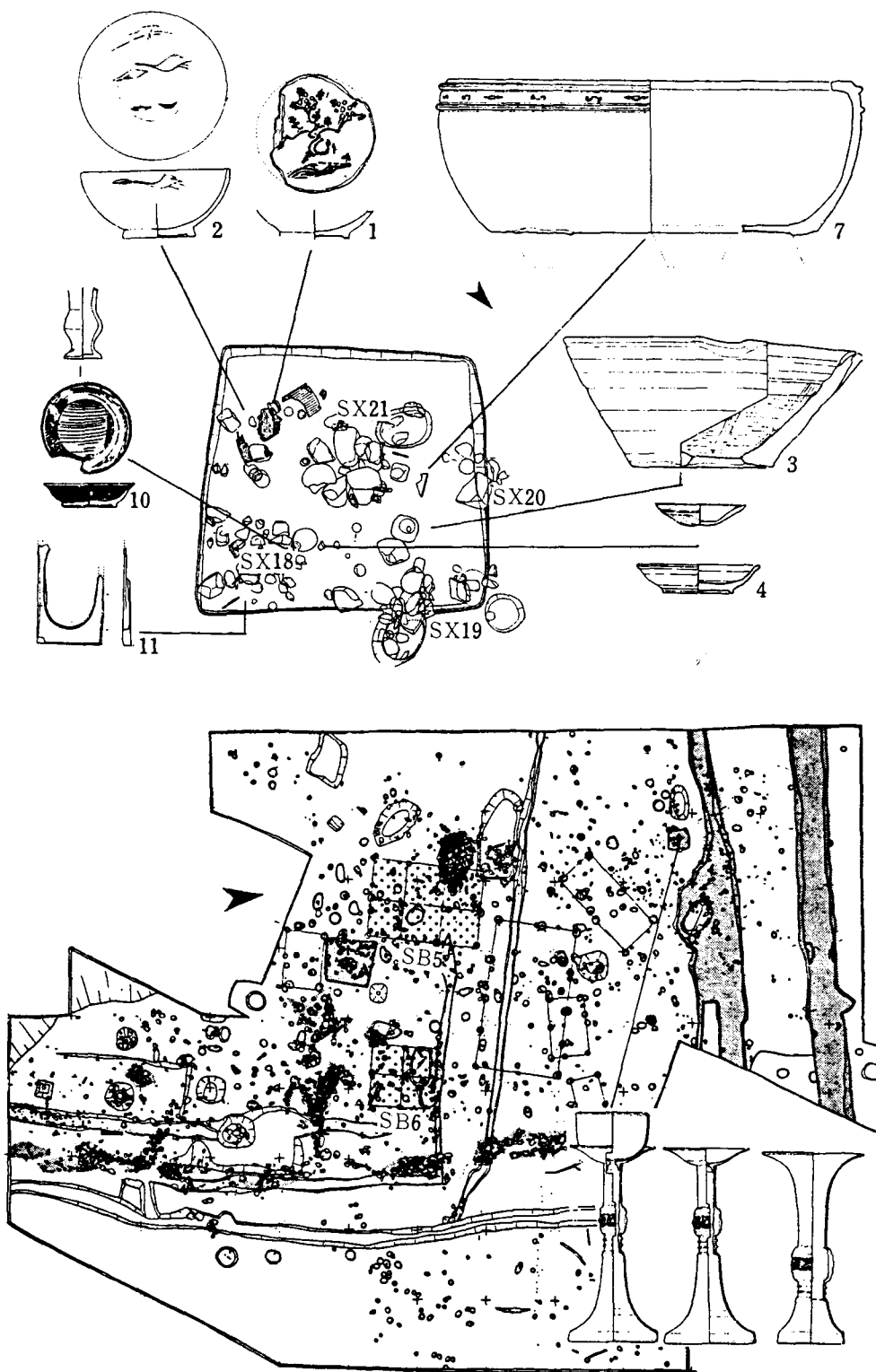
第22図 石川県普正寺遺跡の遺構と遺物（註146文献より作成）



第23図 富山県清玄寺銭山遺跡(左), 石川県白山遺跡(右)遺構図 (拠・註151, 152文献)



第24図 石川県細口源田山遺跡の遺構と遺物（註159文献より作成）



第25図 石川県白山橋遺跡の遺構と遺物（註30文献より作成）

検出されている。伴出土器が少なくグルーピングも至難なため墳墓群の推移を整序的に捉えにくい、14世紀後半代に5～7小群程が墓域を分割・占有し、まず陶棺ないし木棺土墳墓が営まれ、次第に簡便な直葬土墳墓へ移行するようである。ついで15世紀前半頃には土墳墓と併存して陶製火葬蔵骨器が丘陵先端の集石区に出現し、15世紀後半頃以降、土墳墓小群と新たに陶製蔵骨器の周囲を単位として、1辺20～30cmの方形掘形に木箱・曲物類を用いた火葬墓が4グループ程展開している。火葬が採用された段階で北辺を弧状溝で再区画しているが、必ずしも土葬墓主体の時期の占有墓域を踏襲しているようにみえないところからすると、火葬墓が普及する段階での村落内の社会・経済関係の変動を反映して墳墓群が再編成されたとも考えられよう。

本遺跡は、当初5～7の家族単位かと思われる小群が小墓域を占有したようであるが、土墳の規模・形態・方位・配置等は概して計画性、規則性に欠ける。陶棺・木棺土葬者と直葬土葬者では、親族内部あるいは相互に区別があったとみられるが年代差も無視できないようで、卓越した被葬者（群）は見出せない。このことは、陶製蔵骨器と有機質蔵骨器の使用についてもいえよう。土葬墓の過半は、銅銭（20基、1～17枚）、土師器皿（6基、1～4口）、漆器（3基、1～10口）などの副葬品が認められたが、4号木棺土墳墓に宋明銭17枚、数珠玉1連、漆器約10口を供献していた以外は若干数であり、有機質蔵骨器への銅銭の供献は3例にすぎない。また石塔類（五輪塔残欠）は、墓域の中核として何らかの宗教施設が設けられていたと推定される北辺中央の丘状の無埋葬区で2個出土したにとどまり、石塔を有するものは一部に限定されたと考えられる。このようにみえてくると、本遺跡で確認された140人程度の被葬者は、150～200年間（6～8世代）に亘り、世代別平均20人前後と見込まれることから、中世後期に成立する惣墓の構成単位となった1村の名主層と近親墓と推定されるが、簡便な火葬墓が普及する段階で、陶製蔵骨器＝名主層を核として小百姓層が造墓に参加する状況を想定することも可能である。ただ、その場合土葬墓と火葬墓数が大差ないことや、弧状溝の意味を適確に説明する必要がある。いずれにしても、火葬習俗の採用時期の遅れとともに、村落領主層以上ほど陶製蔵骨器の使用が一般的でなかったとみてよいであろう。

〔EⅡ類〕 中世後期、平地で村落に隣接して数十基の小規模な墳墓が群集するもの。

能登北部の西川島遺跡群白山橋地区⁽¹⁶⁰⁾（鳳至郡穴水町、第25図）は、北方を溝で画した800m²程の範囲で、14世紀代に帰属する少数の土墳土葬墓小群（SX31～33、35～37、SK4・5・10）と、15世紀後半～16世紀前半代を主体とする50基以上の配石墓群が検出されている。地下に0.4～0.8mばかりの小土墳を穿つもの（SX15～17）も

あるが、大半は人頭ないし拳大の礫を用いた0.5～1 m程の略長方形を呈する集石墓で、礫間に火葬骨を埋納しており、調査区東寄りに南北、一部東西に列状をなして蜷集し、明確なグルーピングは難しい。副葬品も12世紀後半代以降の村落遺構と重複するため確実な伴出状態の認定は困難であるが、方形掘形内に3～4基の配石墓を入れたS X 21（珠洲片口鉢1，漆碗2，土師器皿2）→S X 18（瀬戸花瓶1，漆盃1，土師器皿1，石硯1）→S X 19（なし）[?]→S X 20（瓦器火鉢1），およびS X 9（瀬戸香炉1，漆盃1，土師器皿11，摺粉木1）が目立つほかは、比較的規模が大きく造作が入念なものが一定数あり漆器を副葬しているものの、一般に土師器皿等が散発的にみられるにすぎず、銅銭の供献例はみられない。このように、平地の居住域の一隅に墓域を設営し、蔵骨器・塔類も皆無なところから、「下級の名主層以下の墓地⁽¹⁶¹⁾」と考定されているが、墓域の北西寄りで、方形土壙（S X 34）内に村堂あるいは前記方形掘形に特定家系墓を入れた有力農民の仏供養具かと思われる、引鑿1・香炉1・花瓶2・燭台1の銅製三具足を埋置した祭祀遺構の存在や、小百姓（作人）層のみで墓域を占拠することに問題が残るとすれば、名主層を包括する村単位の墓地と考えられる。ここで確実に供献された陶器が、底部穿孔した磨耗著しい片口鉢1点なのは身廻り品若干を副葬する15世紀代以降の葬法の変化と関係があり、簡便な集石墓と細口原田山遺跡の埋納孔施設は基本的に同じであって、細口原田山遺跡との差異は立地を含めて、村落間の経済格差とするのが穏当であろう。

以上、中世墳墓の類型的整理を試みたところによれば、おおまかに領主層を造墓主体とするA～D類と百姓層のE類が設定でき、前者は庄郷領主層A I，B I・II，C I類と村落領主層A II，B IIの一部[?]，C II類に、後者は名主層主体となる。守護級領主層や有力在地領主層（守護代等）の一部は別個の墳墓形態をとると思われ、庄郷領主墓には“やぐら”（能登・羽咋郡富来町地頭遺跡⁽¹⁶²⁾），国人層が被葬者と推定され、E I類に後続して15世紀後半～16世紀代により普遍的な中世後期の墓制として展開した“横穴墓”ないし“地下式墓”（能登・羽咋郡志賀町矢駄遺跡，同町印内ラントウ遺跡，加賀・小松市津波倉ホツジ遺跡等⁽¹⁶³⁾），C II類の変異型として一辺13.5m⁽¹⁶⁴⁾の方形周溝有丘墓で河原石積の竪穴式石槨土葬墓（越中・下新川郡朝日町柳田遺跡⁽¹⁶⁴⁾）等がある。これを存続時期別にみると、ほぼ12世紀後半代のA I類，12世紀後半～14世紀代のA II，B I類，13世紀後半～16世紀前半代のB II，C I・II，D I・II，E I類，15世紀後半～16世紀前半代のE II類となり、14世紀頃に村落領主・有力百姓層に造墓範囲が拡大する大画期，15世紀後半代に小画期が認められ、造墓開始の時期差

を大体階層格差と考えてよい。さらに、造墓主体とともに類型設定の基準とした存在形態によって、族縁墓AⅠ・Ⅱ，BⅠ・Ⅱ，地縁的集団墓EⅠ・Ⅱ類，一家系墓CⅠ・Ⅱ類，個人墓DⅠ・Ⅱ類の大半に分れるが，AⅠ類は経塚との区分が困難で，BⅠ類との系譜関係も詳らかでない。

さて，第4表は陶製蔵骨器を出土した代表的な遺跡である。まず年代・器種別に見ると，座棺として大甕，火葬蔵骨器として中・小甕，各種壺，四耳壺・瓶子等が蓋に当てられた片口鉢，各種碗皿類とセットで用いられており，14世紀代を画期として消費量が急増し，15世紀前半代のうちに陶製蔵骨器使用の習俗は急速に衰退することが読みとれる。次に産地別にみると，①中国陶磁は僅少で，確実な蔵骨器としては，軽海遺跡（青磁壺1），金丸遺跡（青磁四耳壺1），華報寺遺跡（青磁四耳壺・白磁水注各1）にすぎない。②瀬戸陶器も7県で14遺跡16点と少ない。したがって，蔵骨器の大部分は③在地の中世陶器で占められ，越後・平木田イダテン山遺跡以外は手ごろな容量の器種が珠洲・加賀・越前陶器の区別なく，各流通圏に相即した量比で消費されており，日常用器の様相と何ら変わるところがない。このことは，中世前期には各地の中世諸窯とも宗教器を生産しているが，珠洲窯についていえば水瓶と仏神像以外は日常の飯酒器類と共通の器種で，蔵骨器に限っていえば日常器と未分化のまま器種＝機能に応じて使用する段階にとどまっており，予め備蓄ないし有事の際に購入する富裕層ならば広く使用する条件があったことになる。

これに対し，中国陶磁の経外容器，特に蔵骨器転用例が乏しいのは東日本全体の傾向であり，四耳壺・水注類の所有がほぼ村落領主層以上に限定されたことと無関係ではないが，中世前期に珠洲系陶器の特徴的な器種である櫛目文四耳壺（壺R種AⅡ類）がしばしば宗教器として使用されたのは，その原型となった白磁四耳壺ないし黄褐釉系四耳壺の代用品として認識されていたことを示し，四耳壺の入手者もまた限られていたと考えてよからう。かかる一部器種の選択は瀬戸陶器の場合一段と明確で，蔵骨器としての使用は大体四耳壺と瓶子（含梅瓶）に限られ，中世前期の準蔵骨器としてその需要を見込んだ計画的生産が行われたことは疑いないと思われる⁽¹⁶⁵⁾。そして，当地方への供給量が少なかった13・14世紀代には，中世陶器のみの消費層と一線が画され，中国陶磁同様，庄郷・村落領主層を中心とする階層にとどまったとみてよいであろう。ただ，中国陶磁—瀬戸陶器—在地中世陶器が厳密な重層関係を構成したといえないことは，かの高阿・素詰合葬廟で高阿および高弟たちが珠洲系壺類を蔵骨器としていることから明らかである。また，中世後期における造墓者層の拡大と火葬の普及に伴う壺類の増産を定量的データとして示すに至らないが，生産力向上の一要因

第4表 蔵骨器の時期・産地別構成

		産地	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	他
1	新潟 平木いだてん山	珠洲			青磁合子
2	石川 小間生 (鳳至郡柳田村)	"			片口鉢1、灯 明台1(15世 紀)
3	石川 上町まんだら	珠洲			年代未詳壺10以 上、片口鉢1以 上、青磁碗片2
4	" 細口源田山	珠洲			○○	片口鉢4 (14~15世紀)
		越前				○	
5	" 普正寺	珠洲		●●			
		加賀		○			
		越前		○			片口鉢1 (13世紀)
6	" 劔崎	珠洲		・			片口鉢1(14 世紀)、壺片1
		加賀			○		加賀・越前襷 片各1
		瀬戸		☒☒			平埴1 (15世紀)
7	" 輕海	珠洲		●●			片口鉢1 (14世紀)
		加賀		●●■	☒		片口鉢1
		越前					片口鉢2
		中国			●		
8	福井 南屋敷	加賀	■	○○○			
		越前	●●●●	○○○●●●	○○●●☒		片口鉢9 (12~14世紀)
		瀬戸		■☒☒			埴(美濃)1
		東播磨		・			
		中国					青磁碗2
9	" 法樂寺	越前		●●●☒	●●●●●●●● ●●☒☒	○●●	

○大・中襷 ○小襷 ●壺 ・小壺 ■四(三)耳壺 ☒瓶子 ☒水注 (拠・当該文献、実見)

となったことは想像に難くない。その意味で、珠洲陶器独特の球胴研磨四耳壺（壺K種CⅡ類）は分布がほぼ能登・越中に限られているが、村落的遺跡からの出土例は皆無といってよく、⁽¹⁶⁷⁾ 実見した完好品が約50点にのぼることから在地の特定階層向けに特注生産された蔵骨専用器に近い器種かと思われる。中世後期には有機質蔵骨器も多用され、陶製蔵骨器の使用者が階層的に優位と限らないことは軽海遺跡上1段と2段目の状況からも知られるが、他方14世紀代に限っていえば、陶製蔵骨器を多用したB類と使用者が限られたとみられるEⅠ類では階層差がある。また、B類では敷（配・集）石墓の核をなす家長の遺骨は陶器に納めるのが普通で、周辺に追葬された近親のそれが有機質蔵骨器を使用する形で区別しており、集団内で無秩序に使用されたのではないのが注意される。

これを要するに、中世墳墓の階層構成は墓域の占定（立地）、群構造、特に後期には石塔類の有無と規格差に明示され、蔵骨器による区分は陶磁器の種別による所有関係を把握するのに必ずしも有効でない。ここではおおづかみに、(A)中国陶磁・瀬戸陶器を含む中世陶器を潤沢に購入・消費しうる庄郷ときに村落領主層、(B)日常用器を陶棺・陶製蔵骨器に転用しえた名主層、(C)墓制の実態未詳ながら陶製蔵骨器使用の形跡が認めにくい小百姓層以下、の大別にとどめねばならない。

四 港湾遺跡と沈船遺跡

前項で概述した中世城館・村落にみる陶磁器組成とその変遷は、北東日本海域における流通の諸段階の投映と解されるが、これら消費地に製品が移入される過程—交通運輸形態とそれを規定した地域の流通機構—分業関係の進展度を具体的に捉える考古学的方法として、港湾遺跡と沈船遺跡をとりあげる。

現在、北東日本海域で考古学的に輪郭の把握が可能な港湾遺跡として、加賀・普正寺遺跡、羽後・後城遺跡、陸奥・十三遺跡が挙げられる。普正寺遺跡⁽¹⁶⁸⁾（金沢市普正寺、第26～28図）は市街を貫流して日本海に注ぐ犀川河口から北端が500m程遡った砂丘地一帯に所在し、南北400×東西100mばかりの拡がりが推定されている。昭和40年、護岸工事中に包含層が露呈し、庄官級領主の家族墓の調査とともに、河岸一帯の分布調査によって埋没家屋や居住域の一端が確認され、また約150mを距てた2地点から大量の鉄滓と鑊羽口が出土し、各種曲物類が使用されていることから鍛冶・檜物等の諸職の居住が注意された。昭和57年には、大形船の接舷が可能視される旧河道西岸で約150m²の遺構面が精査され、上・中層（15世紀前半代）で掘立柱建物と鍛冶

台、火床、研ぎ場を内包する鍛冶場遺構が検出されるとともに、下層（14世紀後半代中心）から土鍾・外洋性魚骨（マダイ・フグ・イルカ）と銭貨の出土が目立つ数棟の小規模な掘立柱建物が確認され、海産物の商品化を予測させる魚屋の実態が明らかにされた。当地は、寛治3（1089）年、醍醐寺領得蔵保（100町）の四至記載に、「東限津屋寺 西縄手 南限河 西限浜 北限湊」とみえ、「湊」=犀川河口とすればのちの大野庄域の北西部を占める当庄の年貢物積出港の機能を果たしたこととなるが、考古学的徴証はえられない。得蔵保をこのように位置づけた場合、これに南西接する大野庄は鎌倉時代末期に一時得宗領とされたが、建武3（1336）年、隣接地を包摂して臨川寺領大野庄として一円支配を達成後の大野庄湊（宮腰湊）⁽¹⁶⁹⁾に該当する。

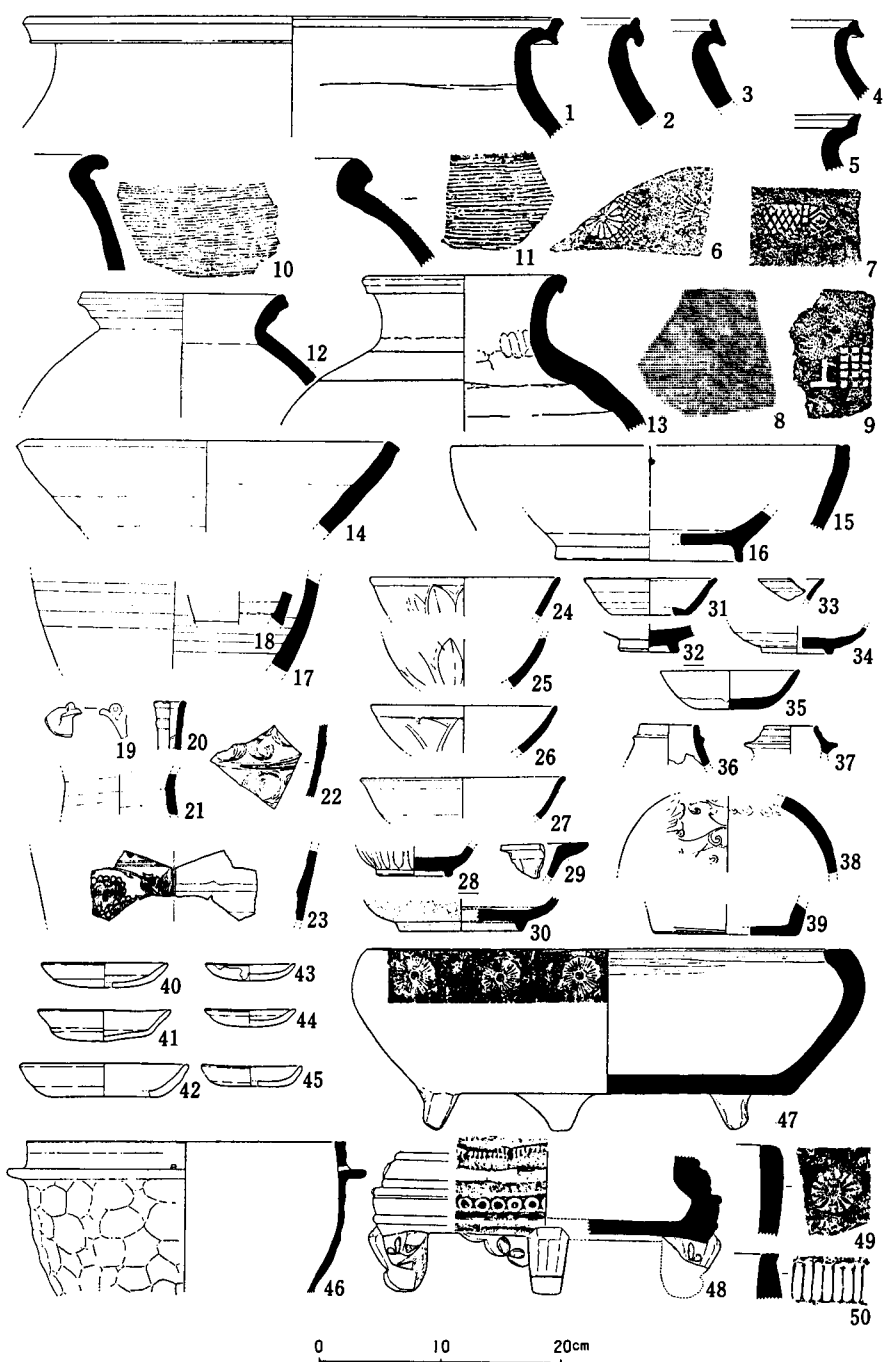
後城遺跡⁽¹⁷⁰⁾（秋田市寺内）は、秋田城の構営された旧雄物川東岸の砂丘地にあって、中世の拠点港湾土崎（秋田・羽州）湊の後背隣接地に営まれている。昭和53年の発掘調査によって、共同貯水施設（B区）、焼米を多量に出土した掘立柱建物1、堅穴2、小鍛冶1、井戸20、土壌58、溝等（C区）が4面に亘って検出された。町割の有無等は未詳なものの、14世紀末以降上国安藤（秋田）氏の湊城を望見し、土崎湊の港湾機能に直結する遺跡の一角が知られた。

また十三湊遺跡（北津軽郡市浦村）は、日本海域に突出した小泊岬の内懷に形成された十三瀨北辺に所在し、14世紀代以降、蝦夷俘囚長安倍氏の後裔と目される下国安藤氏の経済基地として周知されて⁽¹⁷¹⁾いる。昭和51年に永暦元（1160）年平泉藤原氏の建立にかかると伝える檀林寺跡⁽¹⁷²⁾、同57～61年には福島城の北2.5kmに所在する山王坊（中世日吉神社）跡が調査され、2群の社殿建物が良好な状態で発掘されたが⁽¹⁷³⁾、港湾地の規模・構造は未詳で、散布地の拡がりから輪郭を窺知しうるにすぎない。

そこでまず、上記3港湾の存続時期と発展段階を知るため、年代判定が分明でかつ出土量の多い中世陶器の時期・産地別内訳を付表6・7に整理した。それによれば、珠洲Ⅱ期を上限としⅥ期ないしⅦ期までの長期に亘るが、Ⅱ期の陶片は僅少でⅢ・Ⅳ期に急増し、3遺跡ともⅤ期で最多量に達し、普正寺・十三両遺跡はⅥ期につづかず、後城遺跡のみⅥ期で下降線を辿りながらなお安定的出土量を維持している。もちろん、当該遺跡出土陶磁器の定量的推移を港湾機能とかかわらせて論ずるには、住民の所有・消費のほかに集散（備蓄）地的性格の考慮など慎重な手続きを必要とし、遺構との関連性が不明瞭な現状での限界が痛感される。それにもかかわらず、普正寺、十三両遺跡は包含地から採集された無差別抽出資料であるだけに、3遺跡の上限年次と遺物量の推移傾向の一致は偶然とはみなし難く、そのことは普正寺遺跡第2次調査で検出された遺構の性格と遺物によって明らかで、各遺跡の面的膨張、ひいては交易機能を核と

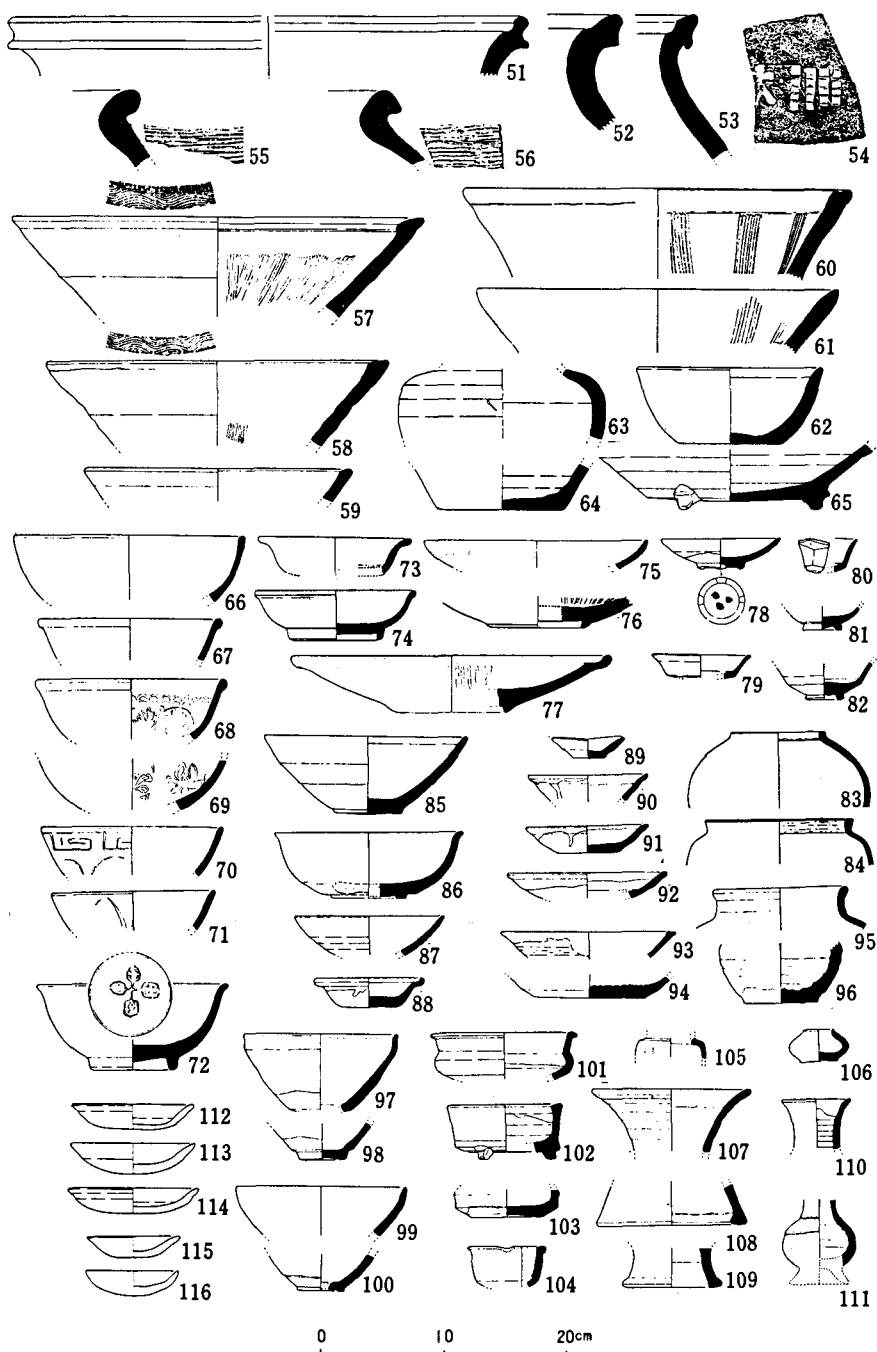
する経済活動の消長をおおづかみに反映していると解すべきであろう。すなわち、大胆に言えばこれら北東日本海域の拠点港湾は、年貢積出港としての港湾機能の開始は遅くとも13世紀前半（のちに大野庄北東部に包摂される得蔵保の「湊」を犀川河口としてよければ11世紀後半）に遡る。普正寺遺跡で一端が顕現された生産・流通の場としての港湾町の形成は14世紀前半代と推定され、15世紀前半代には最盛期を迎えたと予測されるのである。その意味で、十三湊に守護神として勧請された日吉神社の存続年代の一点が、出土珠洲片口鉢より15世紀前半代と確認⁽¹⁷⁴⁾するのは象徴的といえる。ただし、3遺跡の衰微・廃絶年代は自然・人文的条件によって一様でなく、普正寺遺跡の場合15世紀中葉前後には砂丘の移動による港湾機能の停止を余儀なくされており、そのことは永享11（1439）年から文安元（1444）年の「砂成不作」「砂山成」による年貢の減免、宮腰在家屋敷地子銭損免の記事からも裏づけられる。十三遺跡の自然環境の変移についての考察はなされていないが、管見の範囲では珠洲VI期に下る遺物は殆んど見出せないの、永享3（1431）年ないし嘉吉3（1443）年ともいわれる津軽安藤氏の没落、蝦夷渡島という政治・軍事的変動と一致をみるごとくである。これに対し、土崎湊は飛砂の被害を被りながらも慶長8（1603）年久保田城下への移転まで存続したことは、大形共同貯水施設とみられるB区S X43遺構に廃棄された15世紀代を主体とする一群の陶磁器に、若干の唐津製品が混在することに端的に示されている。

次に、3遺跡の陶磁器組成についてみよう（付表8～10）。第1に第1項でとり挙げた中世陶器相互の流通関係については、後城、十三両遺跡で14～15世紀代の越前製品が4～12%移入されているものの、珠洲製品の基本三種単一の流通圏を形成しているのに対し、普正寺遺跡では越前5、加賀1、珠洲4の量比を示す。この数値は二次調査の発掘資料からえた、越前52%、加賀16%、珠洲32%に近く、加賀窯が稼動した15世紀前半代までに限れば加賀製品の量比は第1次調査分で16%、第2次調査分では2倍程度になると見込まれるものの、越前、珠洲、加賀の順位は変わらないであろう。これを器種別にみると、甕は越前58%に対し珠洲、越前は各々22%と19%ではほぼ等しいが、片口鉢は珠洲86%と優位に立ち、越前10%、加賀5%を圧倒している。中世後期に特徴的なかかる器種別補完関係は、加賀製品の比重が上昇する地元の加賀南部では、甕壺は加賀、ついで珠洲が目立ち越前は少ないのに対し、片口鉢は越前3、珠洲2程（前記辰口西部遺跡群徳久・荒屋地区）で、地域窯との競合を避け不足する器種を地域毎に選択して供給する越前製品の動態をよく物語っている。いま3窯から普正寺遺跡までの海上航続距離を比較すると、珠洲窯から約230km、越前窯から約100



第27図 石川県普正寺遺跡の陶磁器組成（4期，47～50は5期）(1)

1・2・5・8・9・15・16 越前，3・4・6・7・13 加賀，10～12・14 珠洲，19～22・24～30 青磁，17・18・31～34 白磁，22 青白磁，23 染付，35～39 瀬戸，40～45 土師器，46～50瓦器



第28図 石川県普正寺遺跡の陶磁器組成（5期）（2）

51～54・60～64 越前，55～59 珠洲，65・85～96・99～111 瀬戸美濃（89・90 鉄釉），66～77青磁，78～84 白磁，97・98 中国天目，112～116 土師器

km, 加賀窯から約40kmを測り、海運に依存しつつ広域市場を獲得した珠洲製品の強大な流通力を改めて実感させ、越前窯が加賀南部を迂回し北部へ集中的に搬入しえたのもまた、海運のゆえに可能であったことが判明する。一方、加賀窯は生産規模のほかに加賀三湖系の内陸水運を利用しても海港との連携に不利で、かつ加賀南部に中核港湾が未発達なため、港湾経済を左右する富裕問丸商人不在の状況が想定され、その結果、甕は普正寺遺跡で珠洲製品を下廻り加賀北部以東で殆んど出土しないことからすると、内陸ないし峠越えのルートで移動することが多かったと推定でき、加賀北部については、梯川上流域から中峠を介する手取谷の中世遺跡での出土状況を検証する要があろう。そして、ここにみられる器種別補完関係は、中世前期における各窯独自の流通、遠隔地と地廻りが併存する二重の運輸手段による無統制に近い競合状態から、頻度の高い一連の遠隔地海運の発達による消費者層の意向を体して、産地・器種別に製品の組成を一元的に調整する流通機構が地域毎に成立してきたことを示唆し、地域流通網の咽喉を扼する中核港湾出現の意義の一因もそこに求められよう。

陶磁器組成の問題点の第2は、中核港湾独自の類型設定が可能かどうかである。問題に立ち入る前に普正寺遺跡の陶磁器の消費形態についてみると、上・中層で実態の分명한鍛冶屋は、1～2寸釘を主とし刀子等小形日常器の製作に従事した小鍛冶であるが、鍛冶場の遺構（SK1・2土壌，SD1～3号溝）より鍛冶関係遺物（鑢羽口、増柄、砥石）、行火、箸状木器等とともに、供膳器＝青磁碗・漆碗、白磁皿・土師器皿、および瀬戸美濃天目茶碗・水注、厨房器＝越前甕、珠洲片口鉢、瀬戸美濃鉋皿の使用が確認でき、15世紀前半代に普遍的な竜泉窯系青磁碗、漆碗と白磁X類皿・土師器皿の基本セットが消費されている。また、下層の魚屋も民家付属遺構（SK3・6・7土壌他）より土鍾、硯、砥石等とともに、供膳器＝青磁碗・盤・長頸瓶、白磁皿・坏、瀬戸美濃小皿・瓶子、厨房器＝珠洲・越前・加賀甕、片口鉢が混用されており、先行遺物を含み年代幅が大きく、青磁瓶・瀬戸瓶子等の高級品が存するため上・中層程消費者を明確に特定し難いが、港湾の一隅に居住する漁撈民（魚問屋ないし網元か）が中国陶磁および国産中世陶器をかなり豊富に所有・消費していたとしてよい。この点を念頭において流通状況総体の検討に移ると、3面の遺構出土土器・陶磁器は1万1千片以上（うち70％は土師器）を数え、これを陶磁器に限っても各面（約150m²）のm²当たり出土数は平均7.3（片）となり、中世後期村落地区の典型事例とした能登・白山橋遺跡の0.2はもちろん、越前・一乗谷遺跡各地区の平均値⁽¹⁷⁵⁾4.0をも上廻る。普正寺遺跡の場合、遺構中枢部を対象とする局部調査の所見だけに民家の密集度を考慮せねばならず、出土密度の数値を消費量として安易に一般化できないこ

とは当然としても、一般村落よりかなり潤沢な流通量を想定して間違いないと思われる。そして消耗率の高さは中世陶磁器より中国陶磁供膳器に端的に現われている。この点を中国陶磁と瀬戸美濃陶器との量比でみるため15世紀代の供膳器を抽出すると、皿および盤鉢類は略等量であるが、碗類は青磁碗2.7対瀬戸美濃平碗・天目碗1、天目碗を茶陶専用器とみなし除外すると4.7対1となり、中国陶磁が断然優勢となる。同様の方法で白山橋遺跡分を算定すると、皿類は普正寺遺跡と逆に白磁X類が大多数を占めるが、碗類は2対1で瀬戸美濃平碗・天目茶碗が多い。瀬戸美濃碗皿類の消費量は遺跡によるばらつきがかなり大きい⁽¹⁷⁶⁾が、皿類は白山橋遺跡で碗類と逆に白磁X類約2対瀬戸美濃1の量比を示すのをはじめ全般に中国陶磁が卓越し、瀬戸美濃製品が中国陶磁の不足分を補完したのは主として小形貯蔵器・宗教器他の分野であって、供膳器は即断できない(付表1・2)。なお、一般村落で入手しにくい高級陶磁器として、普正寺遺跡の青白磁梅瓶・水注、青磁瓶、郊壇窯(?)小壺、高麗象嵌青磁盤他、後城遺跡の瀬戸四耳壺・瓶子(6以上)⁽¹⁷⁷⁾、十三遺跡の貼付文香炉、黒褐釉鉢他が存するのも中核港湾に蓄積された富力ないし活発な交易活動の側面を語る物証といえよう。このようにみてくると、(1)陶磁器の多量消費(過密出土状況)、(2)中国供膳器の大量使用、(3)多様な奢侈的陶磁の所有の諸点で、一般村落と区別できる見通しを提示しえた⁽¹⁷⁸⁾と思う。

さて、中核港湾に搬入された陶磁器類が、当該地域の経済構造の段階的変質と相即してどの範囲に流通市場を獲得したかは、中核港湾の構造・性格を規定する基本的な論題となる。この点を普正寺遺跡と白山宮門前町を核とする加賀北部で模索すると、普正寺遺跡で認められた陶磁器組成は、河北潟から大野川沿いに約1~1.5km間隔で散開する大野庄隣接地の近岡・戸水(富積保)・無量寺・桂・寺中(佐那武村)(金沢市)等の臨海村落でも断片的ながら認められる⁽¹⁷⁹⁾が、その実態は詳らかでない。今後、後背地村落群と異なる経済圏(陶磁器組成)を形成していたのかどうか検討をすすめねばならないが、一連の臨海村落=小港湾(浦)と中核港湾(湊津)の関係は、14世紀以降交易量の飛躍的増加と諸職が定住する“町”として整備・拡充される過程で、大野庄湊の地位の向上、流通機能の集約化を予想させる。加賀北部平野は手取川と犀川の複合扇状地形をなし、北半部は犀川・浅野川を基幹とする内陸小河川網を媒体とする流通・交通体系が、犀川河口と扇頂部に位置する白山宮(石川郡鶴来町)を結ぶ縦軸の流通路に収斂される地勢的条件をそなえ、北と南に展開する後背地に広域分業圏が成立する基礎をなしている。当該地域の流通構造を分析された浅香年木氏は、「市」と白山宮配下の紺掻神人の分布を手がかりに、内陸部を縦断する前記縦軸の流通路

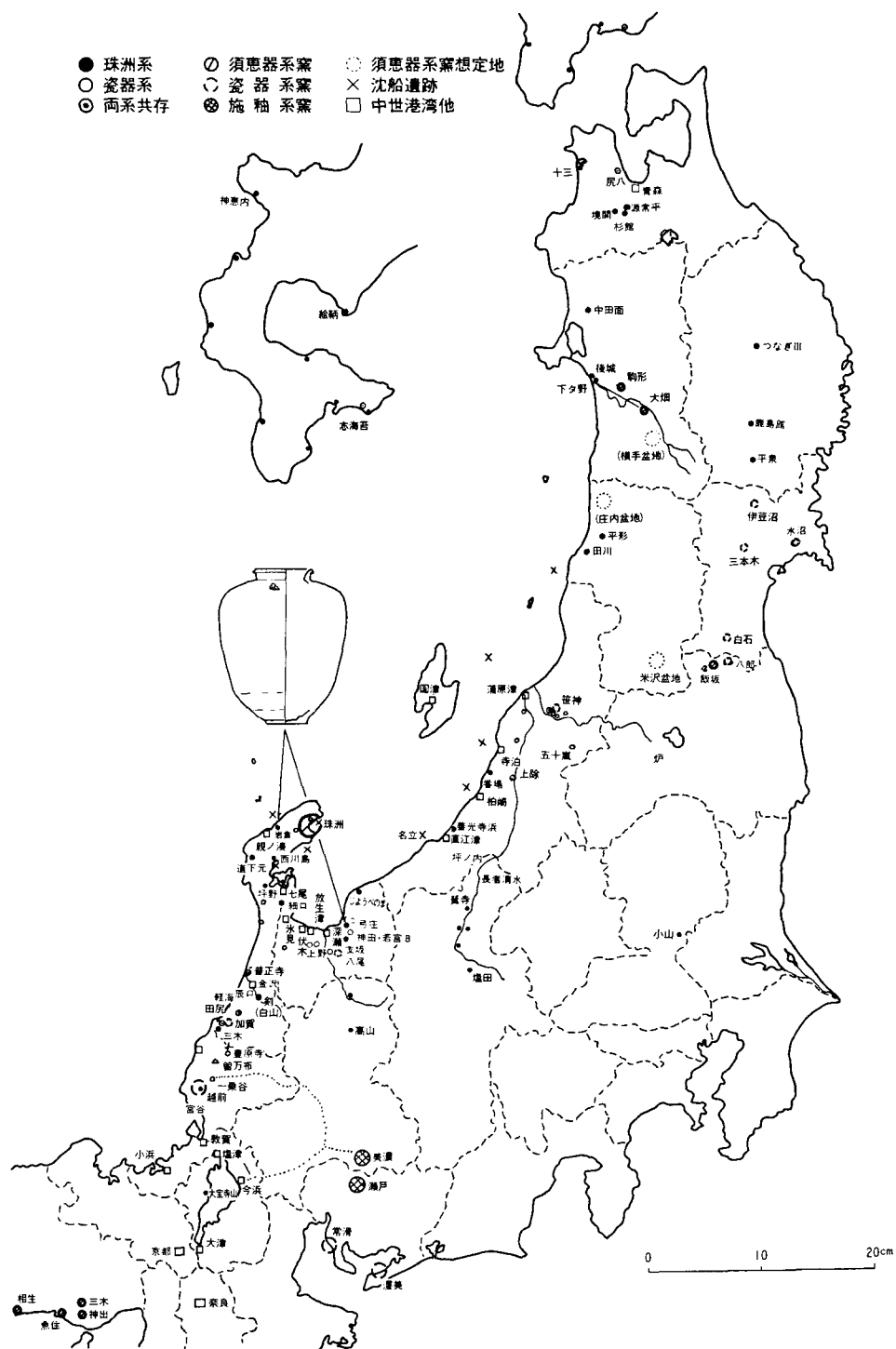
と、守護所の設営された「野市」(石川郡野々市町)付近で交叉する山麓線に沿う横軸(北陸道)の流通路を検証され、加賀北部の流通の十字路の实在を浮き彫りにするとともに、14世紀中葉に至り流通機構の管掌主体が白山宮から守護富樫氏へ移行していることを指摘された。さらに、後背地における繊維原料の換貨と加工專業地の出現にみられる地域間分業構造を展望しつつ、臨海地を包括する臨川寺領大野庄が成立をみた14世紀代を、大野庄湊を核とする加賀北部平野に一円的な流通圏が形成される画期とされた⁽¹⁸⁰⁾。

限定的な考古学的調査に即して文献学の成果を深化するのは至難であるが、浅香氏の考察も14世紀代から15世紀代への発展段階の理解は必ずしも明らかでなく、大野庄湊を基地とする流通市場は河北郡におよんだと推定されている。確かに河北郡には中核港湾とみなせるものを欠いているが、加賀製品の2次流通圏の北限が浅野川辺と推定され、以北は珠洲製品の1次流通圏として明瞭な一線が画されることから、珠洲製品は能登南部の中核港湾羽咋湊の南方海域に連なる小港湾を掌握し河北郡を市場化していたと判断され、14世紀代の流通圏は今湊(石川郡美川町湊町)と浅野川を結ぶ石川郡内にとどまっていたと推測される。このように、運輸形態が中核港湾を基地とする隔地間海運と小港湾間を往来する地廻り海運が併存する段階から、普正寺遺跡が⁽¹⁸¹⁾かの備後・草戸千軒遺跡の約6分の1程に膨張を遂げ、地域の分業生産を凝縮した銀治・檜物・魚介・紺掻の諸職のほか、15～16世紀代の文献に散見する「宮腰の酒」(菊酒)や「梅染」など加賀の特産品、および塩など広域用民間必需物資の集散地として発展する15世紀前半代こそ、15世紀後半以降の本願寺教団に編成された惣郷を基盤とする領国経済に連結する、一円的な流通市場の完成期だったのであろう。このことを陶磁器の生産・流通動態についていえば、14世紀末～15世紀初葉頃の瀬戸美濃製品および大和火鉢座産瓦器の大量移入にみられる、畿内一湖岸ルートと日本海海運の起点たる小浜・敦賀に連動する流通機構の一元化、あるいは15世紀前半代のうちに生じた加賀製品の越前化に伴う技術的主体性の止揚とそれに継起する加賀窯の廃絶、他方15世紀代以降における越前製品(甕類)による加賀南部の商圈化と日本海全域での一定量の恒常的流通は、浅香氏が指摘する加賀南部経済圏の越前・三国湊への従属化に連動する動きと理解される。かかる地域中世窯間の淘汰と器種別分業関係の進展に呼応して、珠洲窯でも14世紀代の支群・単位群の増加に体现される基本三種の量的拡大生産体制から、15世紀代の片口鉢の重点的生産に示された專業化示向への転換と緊密にかかわっており、必然的に中核港湾を中継地とする隔地間海運への依存度を高めることになったと考えられる。15世紀代の日本海域の消費地にみられる陶磁器組成が、

中国陶磁の消費量において拠点的分配の傾向を強める一方で、同一の組成が平均的に検出される事実は、この段階から小浜・敦賀の間丸（問職）により越前製品に中国陶磁、瀬戸美濃製品を加えたセットが構成され廻船に積載され、各地の中核港湾へ搬入・配分された可能性を想定させるのである。⁽¹⁸²⁾ 上記想定で大過なければ、この時期に列島規模で流通した大和火鉢座産の火鉢を主体とする瓦器類は、権門から賦与された独占的販売権を行使する段階から脱皮した、問丸商業資本による商活動の所産とみるのが妥当であろう。

ところで、中核港湾が、中世後期に地域間相互の非自給物資の交易を機軸とする隔地間海運の基地であったことは、徳田劔一・豊田武氏らが断片的な文献史料からつとに復原されたところである⁽¹⁸³⁾（第29図）。応安5（1372）年、大野庄湊への「商船」の出入と守護による関料の賦課が知られるが、幸若舞曲「信田」によれば、主人公信田小太郎の人身売買ルートとしてみえる、小浜→敦賀→三国→宮腰（金石）→親之湊（輪島）はいずれも北陸の中核港湾であり、小太郎の買主は津軽外ヶ浜から航程480km余、往復18日を費やして親の湊の刀禰＝問丸宅に宿をとった塩商人であったと伝える。同じく舞曲「笈さがし」にも、羽前酒田湊と敦賀湊一大津間を例年定期的に行商する廻船業者が登場し、謡曲「婆相天」に直江津湊で津軽方面から南下する「東国船」と敦賀・小浜方面より北上する「西国船」の船頭が商品と人を交換したと伝え、北東日本海域の中核港湾から廻船が盛んに発着し、問丸が港湾業務の実権を掌握していた有様を彷彿とさせる。問丸はこれら一連の説話に登場する段階では、すでに庄郷年貢・公事物の保管、委託（請負）販売および輸送業務から、すすんで廻船を所有し一般貨物の卸売、宿泊、金融業を兼務する商人に成長を遂げていたのである。なお、中世日本海海運の終着港十三湊の経済的権益に深く関与したとされる陸奥の守護級土豪安藤氏が「十三湊日之本將軍」と賞揚され、永享9（1437）年、小浜湊羽賀寺の再興に際し、「捧加莫大之貨錢」していることは、蝦夷地—十三湊—小浜湊の海上権の媒体者と遠隔地海運の展開を象徴するできごとといえる。⁽¹⁸⁴⁾ 十三湊の殷賑ぶりを伝える記事として、しばしば引用される『十三往来』の「而夷船京船群集。並艫先調舳、湊成市」の語句は、中核港湾の考古学的所見からすると14世紀後半～15世紀前半頃の状況描写とみてよいであろう。

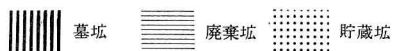
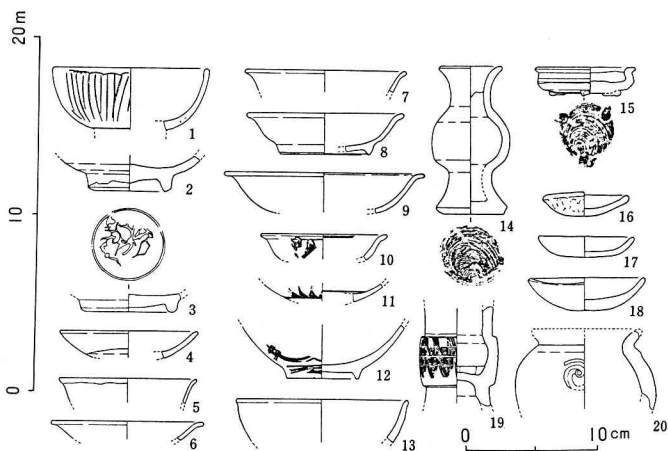
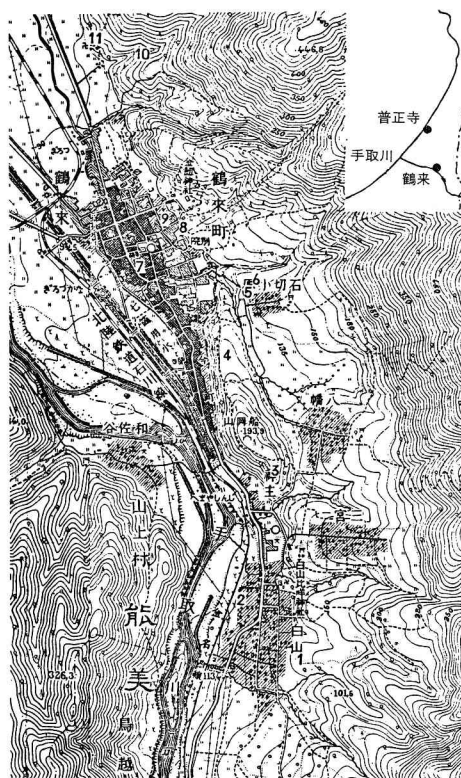
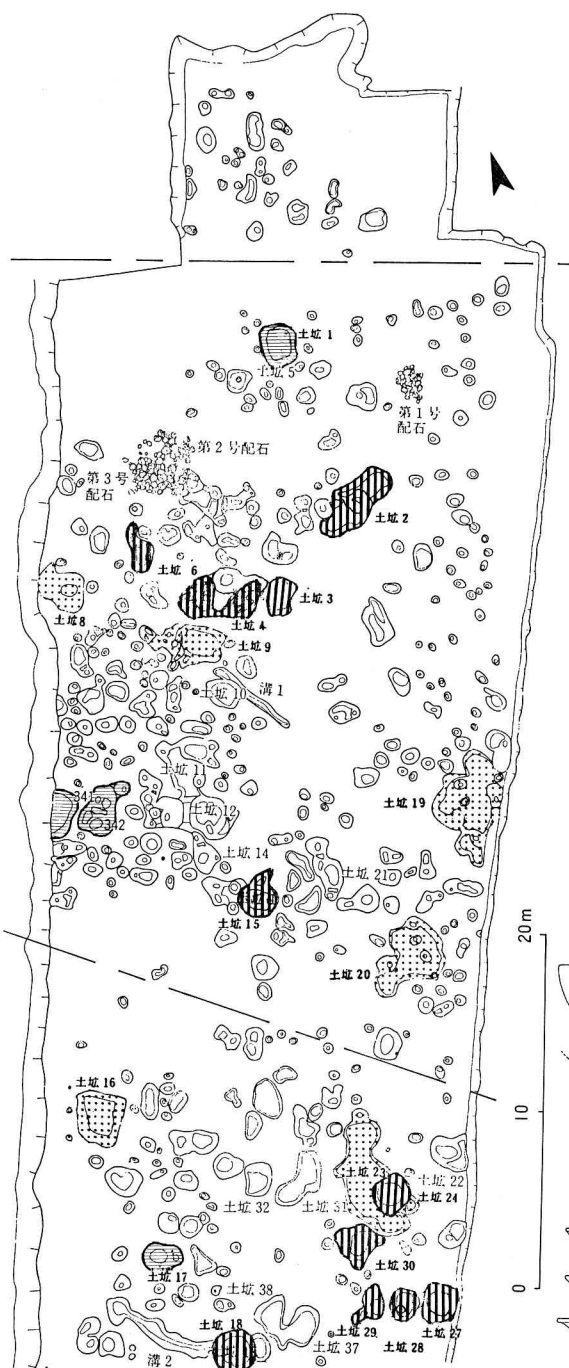
上に摘記した中世後期における流通構造の変革と港湾町固有の陶磁器組成をより確かなものとするため、若干の事例を以下補足しておく。第1は、さきの加賀北部の流通幹線の終着、ないし平野部と手取谷の結節をなす白山宮門前町遺跡である。大野庄湊と白山宮門前町との関係を端的に物語るのは、普正寺遺跡出土の「白山□□（迂宮



第29図 北東日本海域の陶磁器流通要図

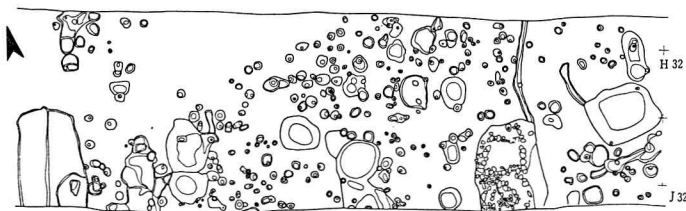
米カ)」墨書木札であって、長寛元(1163)年成立とされる『白山之記』にみえる「佐那武大野庄在之」以来、当該港湾の確保を意図する白山宮の姿勢を伝えるごとくである。他方、康永4(1345)年、白山本宮配下の榎坂住人(後述)とともに馬場道の埒を負担した「八幡在家人」の有力者を埋葬したとみられる14世紀前半代の加賀大甕(座棺)に普正寺遺跡出土陶片と同一の押印が認められ、門前町を構成する「平等寺市」を担う商工業者の経済活動の一端を窺わせる。当門前町は14世紀後半代以降、白山本宮方と金剣宮方へ両極分解を遂げたが、白山遺跡は旧本宮所在地(現鶴来町一の宮古宮公園付近)の上流約500mの河岸段丘縁辺に所在し、南北朝時代には「本院別所」に西接し大念仏会・修正会の灯油や臨時祭礼時に馬場道の埒を結んだ榎坂住人の生活域である。第4次調査区(第30図)では、南西に重複する居住域=小形掘立柱建物・貯蔵穴(地下室)群、北東に墓域=配石墓・土壙墓群が隣接した南北40m、東西推定20mばかりの屋敷地(25坪前後)⁽¹⁸⁷⁾2単位が検出された。こうした生活単位は東方への拡がりが見られ、第2・3次調査区の空白(南北約250m)を挟む北方でも検知され、14世紀代に一点をおく配石墓5基と居住域の存在が確認された。この南北2ブロックはいずれも12世紀末葉頃には居住の形跡が認められるが、遺物量が急増するのは14世紀代以降であって、普正寺遺跡同様15世紀代を盛期とし16世紀前半代まで存続する。

榎坂地区について中西国男氏は、「本宮に隣接して、宗教活動を支える生産地区」で、「在家人(百姓)や百姓身分の下級神官・聖たちを束ねる有力者」の生活域に⁽¹⁸⁸⁾同定されたのは妥当な見解であるが、12~13世紀、ないし14世紀段階と遺構の主体を占める15世紀代以降における内部構造あるいは身分構成の変質については問題を残しており、配石墓・土壙墓の被葬者層の特定も課題となろう。本遺跡で居住地の一角に墓域を取り込む形態は、12世紀末葉に遡る土壙墓(SK7)の実在から中世前期以来のことと考えてよく、出土遺物を遺構とのかかわりで検証しにくい憾みがあるものの、限定された生活域内に均質の屋敷地が過密に設けられたことが、14世紀代以降の陶磁器消費量の急増を招来したのは確かであり、道路・溝等による明確な区画整理の証跡はえられないが、平等寺市等商工業地区=「町」の整備・拡充、ひいては大野庄湊の発展と一体的に進行した現象であろうことは容易に推察できよう。榎坂地区の住人の生産基盤は、石臼・石鉢の出土が目立つことから雑穀栽培(畑作経営)に依存していたと推定されており、鉄製紡錘車にみられる紡織など家族的副業のほか鞆羽口から小鍛冶生産の従事者がいたことも判る。彼らはまた、短刀・石突(推定)・冑(小札)・櫛等武器・馬具の所有者でもあり、火打鎌・銅製燭台と青磁瓶・香炉、瀬戸美

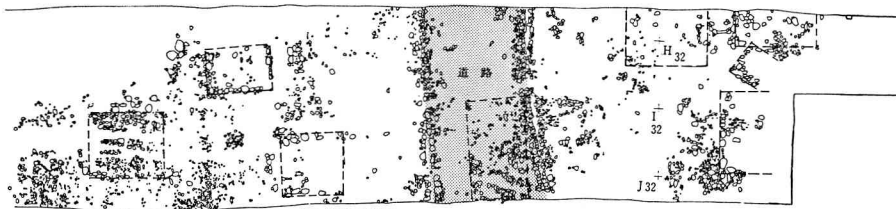


第30図 石川県白山遺跡の位置・遺構(第Ⅳ次調査南地区)と陶磁器組成(6期)(拠・註151文献, 加筆)

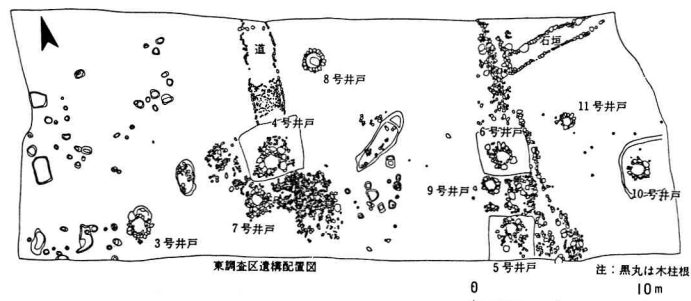
2・5・6・20 第16号壇, 1・3・7~10・12・13・18・19 第17号壇, 1~3・13 青磁, 4~9 白磁, 10~12 染付, 14・15 瀬戸美濃, 16~18 土師器, 20 越前



第2遺構面配置図



第1遺構面配置図



東側並列区遺構配置図

第31図 石川県道元町遺跡の位置・遺構図（拠・註191文献，遺構図加筆）

濃香炉・花瓶，多数の灯明皿等宗教器の出土は，教学活動と勤行に恒常的に参加し，ときに武装集団，あるいは商人にも転化しうる有力堂衆の映像を提供する。そのことを墳墓についてみると，北ブロック寄り（第4調査区北端より約130m）に，段丘縁辺を南北走る飛石を連ねた墓道と結ばれる前記石室墓（第2項D I類，第23図）が1基存し，珠洲壺蔵骨器を埋置しており，当地区を統括する有力神官ないし坊主の存在を明示する⁽¹⁸⁹⁾。また，南ブロックの配石墓・土墳墓には五輪塔を地上に据えたもの（3号配石墓・5号土墳墓他）があり，かつて当該地から移出された在銘五輪塔に，「□運権少僧都」（文明2・1470年），「良快」（文明5・1473年）が確認できることから，小僧房の住人の実態を知ることができる。

遺跡の性格を大略上記のごとく考定し陶磁器組成に目を転ずると，まず第1次調査（北ブロック）分では，越前・加賀・珠洲製品の量比が各々53%，6.5%，38%と普正寺遺跡に近似し⁽¹⁹⁰⁾，器種組成も甕が越前68%，加賀13%，珠洲19%，片口鉢が越前12%，加賀2%，珠洲86%と白山遺跡の加賀窯廃絶後の存続期間が長い⁽¹⁹¹⁾ため，全体に加賀製品の量比が低く，越前製品が高い点を考慮すれば，大勢はよく一致をみる。また，15世紀代の供膳器は皿類は中国陶磁（白磁X類）が卓越し，碗類も2.2対1程度で青磁碗が優勢である。中国陶磁の所有・消費のあり方はSK16（青磁碗1，白磁碗皿各1，越前小壺1）・SK17（青磁碗2，白磁皿3，染付碗皿各1，瀬戸天目1，瓦器花瓶1，土師器皿1）等一時廃棄あるいは地下室に保管された一括遺物からも窺うことができよう。なお，当遺跡の宗教器は，瓦器香炉が存するぐらいで格別多いとはいえず，奢侈品も青磁瓶，白磁四耳壺，青白磁梅瓶・合子等14世紀代の高級品が目立つ程度である。

第2は，能登半島北西部に所在する道下元町遺跡⁽¹⁹¹⁾（鳳至郡門前町，第31図）である。本遺跡は，半島外浦の中核港湾親之湊（輪島市）と福良泊（羽咋市福浦）を結ぶ中継港湾石瀬湊として，曹洞宗本山総持寺を擁する櫛比庄（90町9反）の玄関口を抑え，また周辺の製鉄遺跡群と緊密にかかわる同庄惣社鉄川宮寺の門前町に比定される⁽¹⁹²⁾。八ヶ川河口から約500m上流の砂丘地にあって，八ヶ川と支流鉄川の合流地東岸一帯，南北650×東西200m程の大規模な遺跡と予測されている。発掘調査は遺跡の北辺部を対象とし，西区では12世紀後半～16世紀前半代に亘る三面の遺構が捉えられ，下層は木組井戸1と疎な柱穴群，鉄滓・韃羽口が出土したにすぎないが，14世紀代以後に帰属する中層では溜枿を伴う石塁で画された過密な柱穴群と土壇6以上よりなる居住域が顕現したが，道路幅の調査のため地割りや屋並の復原に至らなかった。上層は前記石塁上に南方の宝泉寺（鉄川寺僧坊）から北方湿原に所在したという「旧市の河原」

に通ずるとみられる幅約6mの側溝つき幹線道路が設けられ、両側に略方形ないし矩形を呈する $3.3 \times 2 \sim 4.2\text{m}$ ($11 \sim 18\text{m}^2$ 前後)ばかりの円礫敷の配石遺構6以上と小掘立建物1が道路と軸線を揃え雁行状に検出された。また、約70mを隔てた東区でも南北走する石敷道路(幅1.8m)と併走する排水溝の一部を東西方向に画する石塁(幅2.5m, 高さ0.8m)が、多数の柱穴群・井戸・土壇と重複して見出された。上層で発見された道路両脇の石敷遺構は類例が少なく確言できないが、出入口とみてよい配石の張出し部分を有し平面規格・規模が一般民家と変わらず、しかも3基より50~77枚にのぼる銭貨が出土したことからすると、道路両脇に密接して並列しない配置状況に疑点が存するが、それはかえって店舗商業の前段階の不規則な土地区画に基づく定期市の実像を伝えるとも解されるので、15世紀後半~16世紀前半頃の「旧市」の河原⁽¹⁹³⁾そのものの景観、すなわち市庭在家の建物群と考えてよいのではなかろうか。

本遺跡の遺物は、度重なる河川の氾濫を蒙った際の2次堆積物が大部分を占め、したがって集積物質を含む可能性があり、出土密度データとしては参考にとどめねばならないが、陶磁器類の総破片数は1万点を越えるとされるので、 m^2 当たり2~3片となろう。うち珠洲製品は全体の70%を占め、時期別推移はI・II期6%、III・IV期21%、V・VI期73%の数値をえ(付表11)、ここでも13世紀後半~14世紀代をステップとし、15世紀前半代に八ヶ川流域の一市市場化を達成し港湾・門前町として発展を遂げたことを知りうる(片口鉢口縁部の集計値では15世紀前半代=V期と後半代=VI期の量比はおよそ3対4)。また器種別組成は、甕34%、壺8%、片口鉢79%で、15世紀前半代には一定数の貯蔵器が使用されているが、15世紀代を主体とする越前製品は全体の15%とされ、珠洲甕類の不足を補完する形で流通量が増強しているのが注目される。ただ本遺跡では、土師器皿類が全体の5%と極端に少ないが理由は詳らかでない。また、港湾・門前町の指標としてきた中国陶磁と瀬戸美濃製品の量比は全体で3対2、15世紀代に限ると碗類6.4対1、皿類5.7対1と中国陶磁が瀬戸美濃に圧倒的優位を占め、一般村落と異なる陶磁器組成のあり方をここでも確認しうる。奢侈品は若干の青磁瓶、青白磁梅瓶、褐釉四耳壺若干のほか、朝鮮碗・瓶が一定量出土している。

上記によって、不十分ながら港湾・門前町の構造的変革の一端とかわらせ固有の陶磁器組成を提示し、その意味を考えてきた。次に、これら中核港湾を結ぶ日本海海運の映像を検証する考古学的素材として、沈船遺跡(揚海陶器)をとりあげよう。

第5表は主要な沈船遺跡で、なお未報告分が相当数見込まれるが、能登半島沿海と越後では能生町徳合沖から岩船沖まで連綿と続いている(第29図)。このうち、越後南

第5表 主要沈船遺跡

	出 土 地	器 種 ・ 数 量	時 期
1	石川県七尾市和倉沖	小壺 1	V
2	鳳至郡穴水町中居沖	中壺 1	IV
3	輪島市沖(含舳倉島近海)	中壺 1	III
4	珠洲市飯田町沖	中壺 1	II
5	鳳至郡能都町沖	中壺 1	I
6	新潟県西頸城郡名立町沖	大・中甕, 大小壺, 鉢 16以上	II ~ IV
7	柏崎市沖	甕壺他	
8	三島郡寺泊沖(含佐渡島近海)	中甕, 中・小壺, 鉢 30以上	I ~ III
9	岩船郡村上市岩船町沖(含粟島近海)	大甕2, 中甕2, 壺1以上	
10	山形県西田川郡温海町沖	中壺 1	III

部の名立沖遺跡⁽¹⁹⁵⁾は、国境親不知から45kmばかり北上した海岸線に塊状に張り出す島首岬の沖合い約5km、深度150m程のクリ(岩礁)間のヌマ(泥底)より数度に亘って引き揚げられ、特に昭和34年には、中甕の中に2個の小壺を納めた中壺を入れ、2個の片口鉢を蓋のように被せ入れ子の状態で出土しており、II期の日常用器の1セットが梱包単位で輸送・販売されていたことを窺知させる資料である。越後北辺の岩船沖の揚海陶器も複数回採取されながら、珠洲製品のII期に限られていることから、一艘の難破船の遺物かと推定される。また、佐渡海峡に面し、『義経記』に直江津湊から出羽へ向かう義経一行の海難ルートに記される寺泊から間瀬沖遺跡⁽¹⁹⁶⁾は、名立沖から北へ延びる大陸棚縁辺部のタラバ(鰐場)の延長線上にあって、海上約10~12km、水深約180~240mに所在し、弥生土器、土師器、須恵器甕・長頸瓶・横瓶とともにI期からIII期に亘る30個体以上の珠洲(系)陶器が出土しているが、知られた範囲では基本三種に限られる。このように、越後沿海に沈船遺跡が顕在するのは、寺泊のごとく佐渡への渡海港湾の存在を含めて大陸棚が古代・中世の定期的航路で、かつ多くの岩礁があり潮流の早い海難の頻発地であったこととともに、冬季に底曳網によるタラ漁が行われてきたという事由を考慮しなければならないが、なお地元に残存する陶器は海底に漂没する遺物のごく一部とみてよく、揚海陶磁出土地点の追認調査がすすめば、中世の日本海海運の航跡の復原が期待できよう。

上記調査資料の限界を認識しても、なお中世の揚海陶磁から次の帰結が導かれる。

- (1) 沈船遺跡は中世日本海域の中核港湾の沖合いに所在する。⁽¹⁹⁹⁾
- (2) 寺泊沖出土の明前期の青磁盤(出土地未詳)を除けば全て珠洲陶器で占められており、瓷器系陶器は皆無である。
- (3) 揚海珠洲陶器はI~V期に亘るが、集中的に出土する名立・寺泊・岩船遺跡で

はⅡ期の甕、中・小形壺、片口鉢の基本器種が大半を占め、Ⅰ期の櫛目文四耳壺（R種AⅡ類）やⅡ・Ⅲ期の櫛目文壺（T種，R種C類）も見出せる。

第1点については、北東日本海域における珠洲陶器の卓越した流通量と、海上輸送の運輸形態に依存する流通手段を直截に反映している。これら揚海陶器のうちⅣ期以降が珠洲製品であることは間違いないとして、Ⅱ期に帰属する遺物の観察所見（器形・技法・胎土）も笹神背中炙窯の製品とはみなし難く、奥能登から積出され富山湾岸沿いに350km余北上し、越後沿海の港湾を目指した船舶の軌跡とみなされる。そう考えてよければ、第2点のⅡ期の遺物が目立つのは、同一の難破船から何度かに分けて引き揚げられている可能性を考慮するとしても、生産量が増強される珠洲窯の動向、および前記のごとく越後・羽後の珠洲系陶器がこの段階で片口鉢主体の生産に転換するらしいことと相即する事象と解してよかろう。しかも、名立、間瀬（三島郡間瀬町）、角田（南蒲原郡赤塚町）の揚海珠洲陶器のように基本三種が商品としてセット販売されていた状況を窺わせる事例が存するのが注意される。

問題は沈船の性格が、(1)各地で諸物資を積み込み交易活動に従事する隔地間海運用の廻船だったのか、それとも(2)珠洲陶器の直接の担い手と推定した土豪的有力名主等の持船による局地的な地廻り海運の範疇に属するのか、あるいは(3)庄領主の仕立てた年貢運送船かであり、この点の理解は日本海域の流通構造の基本的評価にかかわる。脇田晴子氏は首都市場圏論の立場から、中世前期の土器・陶磁器の海上輸送は年貢運送船の帰り荷として積載・売却されたと推定される。⁽²⁰⁰⁾ 新城常三氏によれば、北陸道からの年貢・公事物の備進は、越前・加賀・能登では米等の重貨が50%，越中、越後はそれぞれ15%，31%と軽貨が多く、中世前期（1250年以前）に限ると、18庄中5庄が絹・綿・銭貨を負担しているが、越後は5庄中4庄と軽貨が目立ち大半が陸送の可能性を有する。⁽²⁰¹⁾ この点に留意して一度珠洲製品の分布圏をみると、東は遅くともⅡ期には越後北部から一部東北に2次流通圏がおよんだと予測され、西は1次流通圏が加賀北部、2次流通圏が加越国境まで包括し、在地の加賀製品、北上する越前製品と競合状態におかれていることからして、到底帰り荷のみでは説明できない。すでに述べてきたように、珠洲窯の中世前期の生産経営方式が交易を前提とする指定年貢・公事物の弁済物としての側面をもっていたとしても、民間必需の地域間交易物資として一定の商圈を確保していたと考えねばならない。

一方、網野善彦氏は「廻船」の初見が筑前で元暦年間（1184～85年）まで遡り、廻船人（「舟道者」）が有力社寺に所属する寄人（神人・供祭人）であったことを指摘し、遅くとも鎌倉前期には列島を一周する廻船ルートが成立をみ、中世陶磁器類の多くも

鉄・塩同様、廻船によって各地へ運送されていたと説かれる。⁽²⁰²⁾この点を沈船遺跡に即していえば、珠洲製品のみの一括出土例が目立つことからすると、Ⅱ期は珠洲窯の支群を管掌する経営主体を統括する法住寺白山社のごとき庄領主の庇護をうけた経営主の地廻り海船の可能性を示唆するごとくである。もっとも、これら沈船遺跡が対馬暖流の第3分枝に沿うタラバ地帯、現汀線から5～10km沖合いで点的に発見されることから、小形の地廻り海運の航跡としては遠きにすぎ、かつ東北まで2次流通圏が拡大された段階とすれば航続距離にも疑問がもたれるかもしれない。中世日本海域の船舶構造と航海技術関係史料は知られていないが、石井謙治氏によれば、クスの巨材に乏しい北陸では一般にヒノキないしスギ材の刳船部材を横継ぎに結合し両舷をとりつけた複材刳船型式の準構造船が用いられ、規模は瀬戸内の海洋船同様300～400石程度を限度とし櫓漕を主とした帆走船を考定しておられる。⁽²⁰³⁾したがって、沈船の性格規定は至難であるが、比較的大形の定期的な廻船であったとしても、窯業生産経営主自身ないしその要請によって陶磁器類は珠洲製品専用の運送船を生産圏で仕立て東と西へ進発させた点で、貨幣流通を前提とした高利貸商業資本によって支配された、日本海全域の一連のルートとする中世後期の廻船とは性格が異なるように思われる。さきに網野氏が引用された筑後の「廻船」の経営主が前記2形態のいずれかは確定できないが、米年貢の弁済のための塩の売却にかかる事例である点に、中世前期の廻船のあり方が示されているのではあるまいか。

五 陶磁器流通の諸段階と特質

第1～4項で、中世日本海域における陶磁器組成と所有・消費形態を、階層性と14・15世紀代における変革の観点から検討してきた。以下、段階的な特質を要説する前に、陶磁器組成の変遷・画期を概観しておく。

第1段階〔第1期〕 11世紀後半～12世紀前半代（中世初期）

在地の中世陶器窯が稼動する前段階であって、中国陶磁が供膳器で一定量を占めるが、土師器は平安中期以来の器種・器形・技法が遺存する過渡的な時期である。加賀・田尻遺跡⁽²⁰⁴⁾（加賀市小塩辻）SD1溝出土の11世紀末～12世紀初葉頃の一括資料によれば、供膳器は轆轤成形品を主とする多様な土師器碗皿類が主体をなし、共伴する中国陶磁は白磁碗（Ⅱ・Ⅳ1・2類、Ⅴ類）・皿（Ⅴ・Ⅵ類＋Ⅱ類）のみで構成されている。貯蔵器は地元産を主、産地未詳の外来品を従とする須恵器甕類が寄せ集められ

た状態で多数消費されており、在地中世窯開窯前の不安定な流通状況を示す。土製の煮沸器は13世紀代まで少量検出されるが、以後全くみられなくなるのも当地方の特色である。白磁碗皿類の流通初現を確定しえないものの、日本海全域に日常食器として急速かつ一定量を供給する流通機構が存在したと考えられる。

〔第2期〕 12世紀中葉～後半代（中世前期Ⅰ）

在地の中世窯が一斉に開窯し、貯蔵・調理器が日本海各地に供給され、供膳器は新来の非轆轤成形品（京都系の“かわらけ”）を主、在地の轆轤成形品を従とする土師器碗皿類に一定量の中国陶磁が共伴する、中世陶磁器の基本組成が定型化される時期である。西日本に生産技術系列の一半が求められる珠洲（系）窯の成立と、中世京都系の非轆轤土師器の出現・普及は一体的な事象であり、庄園公領体制の定立期における当地方の分業関係の一端を特徴づけるものといえる。珠洲陶器Ⅰ期の基本三種を多数出土した越中・神田、じょうべのま⁽²⁰⁵⁾地区遺跡、加賀・勅使、三木だいもん遺跡では、少量ながら白磁碗（Ⅳ2類）と同安窯系青磁碗（Ⅰ1類）・皿（Ⅰ類）が検出され、依然白磁碗皿類が主流を占めるごとくである。他地方同様、青白磁合子、稀に白磁皿（越後・横峯2号経塚⁽²⁰⁵⁾）が経塚の副葬品として奉養されているが、中国陶磁の経容器類は越後・十楽寺経塚出土白磁四耳壺⁽²⁰⁶⁾が知られているにすぎず、他は全て珠洲（系）と常滑・越前陶器が転用され、経塚・墳墓とその営造主体となった開発領主層で潤沢に消費されている。煮沸器は少量の土鍋・土甕が中世前期を通して出土する。

〔第3期〕 13世紀前半～中葉代（中世前期Ⅱ）

珠洲、越前、加賀の各窯が生産体制を確立する反面、東北で狭域分業圏を確保してきた珠洲系窯の淘汰が進行した状況が窺知される。前掲第2期の諸遺跡で良好な資料が出土しているが、出土状況による第3期との区分は分明さを欠く。本期の珠洲陶器は器種が最も豊富で、基本三種とともに碗・小皿・羽釜・鉢・鍋など寺社の儀礼に供されたかと思われる供膳・厨房セットや、四耳壺・水瓶などⅠ期以来の各種貯蔵器のほか型造りの本地仏など、寺社・在地領主層の奢侈・宗教的欲求を満たす多彩な特注的製品を生産し、中国陶磁・瀬戸陶器の流通量の不足を補完していたと考えられる。加賀陶器は、本期も越前北部に一定の流通量を確保しているが、第4期以降、ほぼ加賀一国に限られるようである。しかし、依然、越前・珠洲製品と併用され、1次流通圏を確立するに至らなかった。中国陶磁は白磁碗皿に代わって竜泉窯系青磁碗皿が移入され、瀬戸陶器が主として宗教遺跡で点的に確認されるようになる。供膳器は、北陸では少数の轆轤製碗と多量の非轆轤製皿（大小）の規格化と安定した量比が固定するが、東北では土師器は僅少で明瞭な地域差が生じている。中国陶磁は竜泉窯系青磁

碗皿が主流を占めるが、白磁碗皿、同安窯系青磁碗皿も使用されるようで修内司官窯系青磁碗も検出されている（羽後・中田面遺跡）。片切彫り劃花文碗（Ⅰ 2～4・6類）を主とし、鮮鋭な鎬蓮弁文碗（Ⅰ 5類）を従とする遺跡（羽後・中田面遺跡）と後者を主体とする遺跡（越中・じょうべのまⅠ地区）があって、編年的細分の余地を残している。貯蔵・調理器は少なく特定遺跡に限られるが、青白磁ないし白磁四耳壺・水注・合子の出土が報ぜられている。良好な一括資料に恵まれないが、竜泉窯系青磁の初現ないし流通の一般化が九州北部より半世紀程遅れる可能性がある。また、瀬戸陶器は若干の貯蔵・宗教器が特権階層に供給された点中国陶磁と同様で、東海・中部高地のごとく恒常的な流通ルートは存在せず、中継地の湖東地域より断続的に供給されていたと予測される。いま試みに北東日本海域で出土状況の明らかな完好品13例についてみると、瓶子8、四耳壺5の時期別内訳は前期（13世紀代）7、中期（14世紀代）6⁽²⁰⁷⁾となり、仏具祭器・蔵骨器の一部として使用されたことが判る。土師器は、非轆轤製皿が大半を占めるが、轆轤製碗が遺存する。在地産の土製煮沸器は、本期を最後にほぼ消滅するようである。

第2段階〔第4期〕 13世紀末～14世紀代（中世中期）

珠洲系諸窯の廃絶に伴い、珠洲窯は越前窯とともに生産体制を一段と増強し、他方越中中部（八尾窯）と越後北部（笹神窯）に小規模な瓷器系窯が成立し、地域窯間の淘汰と民需の急増に対応する量的拡大再生産と製品の画一化が同時に進行した。本期の遺物も中世後期の遺跡から普遍的に出土しているが、純粋な組成を抽出できない。珠洲製品は、器種組成の基本三種への単純化、刻印・刻文等加飾法の簡略化・類型化と使用の一般化が顕著である。本期から第5期前半にかけての奢侈・宗教的器種の生産や加飾性を、珠洲固有の性格としてどの程度に評価するかなお検討を要するが、いわゆる呂宋壺写しとみてよい珠洲独自の四耳壺（K種CⅡ類）のほか、瀬戸瓶子・広口壺の模作品も認められ、高級施釉陶磁を補完する性格をよく示している。また中国陶磁は、竜泉窯系青磁鎬蓮弁文碗・皿・杯・盤（Ⅲ類）といわゆる口禿げ白磁碗皿類（Ⅸ類）の組み合わせが基調をなし、内底に印花を有するいわゆる柘榴系白磁碗が少量伴う遺跡があり、貯蔵・宗教器（青白磁梅瓶・水注、青磁香炉・花瓶・広口壺等）は少ない。土師器は、北陸南部では非轆轤製皿類のみとなるが、北東部（越後）では轆轤製品が併存するようである。煮沸器は滑石製石鍋が能登まで散発的に出土する。⁽²⁰⁸⁾

〔第5期〕 14世紀末～15世紀代（中世後期）

在地の中世陶器と土師器・中国陶磁の組成に瀬戸美濃陶器が一定の量比を占めると

ともに、第4期まで確認されなかった近畿産の瓦器（火舎・香炉・花瓶・風炉他）が日常用器のセットに加わる画期である。瓦器の一類として火舎類に随伴して搬入されたとみられる土釜も散見する。15世紀前半代を中心とする資料は全期間を通して最も豊富で、城館跡を中心にまとまった資料が存在するが、なお第6期への移行については越前・一乗谷遺跡以外明確な編年区分をなしえないのが現状である。加賀窯が15世紀前半代のうちに廃絶する一方で、第4期以降北東日本海全域に商圏を拡大した珠洲窯は、器種別専業志向が一段と強まり、基本三種の均衡が崩れて片口鉢類の増産と甕壺類の大幅な減産を招き、特徴的な加飾法である櫛目波状文は片口鉢口縁部に限られるようになる。そして、本期の後半には片口鉢類偏重の生産傾向が加速され、胎土・焼成とも粗質化し機能性の低下が著しい。本期以降、越中以北の各地で、珠洲および越前製品を模作した土師・瓦質片口鉢が少量みられるが、編年的併行関係や生産組織は詳らかでない。中国陶磁の組成は、竜泉窯系青磁素文玉縁反り口のタイプを主とし、少量の篋描き蓮弁文あるいは雷文帯碗と皿・鉢・盤類、大量の粗質の白磁皿・小坏類（X類）を基本とする。瀬戸美濃製品の器種は豊富で、前代以来の瓶子・水注が減少する反面、供膳器（平碗・小皿）、茶器（天目碗・茶入・茶壺）、調理器（盤・卸皿・柄付片口）、宗教器（香炉・花瓶）が移入され、轆轤成形の小形高級日常用器の製作へ転換を遂げた生産地の状況をよく反映している。本期の瀬戸美濃製品の占有率を能登・西川島遺跡群および陸奥・境関館跡についてみると、それぞれ13～14世紀代の3.8%と11.8%から、15世紀代の65.8%と81.7%へ飛躍的に上昇している。V期の珠洲陶器に瀬戸写しの瓶子・広口壺等の新器種が出現するのは、瀬戸美濃製品の比重の高まりと表裏一体の事象と解される。ただし、瀬戸美濃製品の流入が直ちに中国陶磁の減少をもたらした形跡はなく、城館や港湾・門前町では中国陶磁が主流を占めた（付表）。なお、本期を中心に、越後中部で底部糸切り、北部で回転篋切り技法による土師器皿の存在が知られており、内耳埴とともに関東・甲信に通ずる独自の地域性をみせることが知られている。⁽²⁰⁹⁾

第3段階〔第6期〕 15世紀末～16世紀代（中世末期）

中世を通して終始貯蔵・調理器を供給してきた珠洲窯の廃絶に伴い、15世紀代には珠洲甕類の不足分を補完する段階にとどまっていた越前陶器が、北東日本海全域で一円的に流通するとともに、中国陶磁の組成も竜泉窯系青磁に代わり染付・白磁が主座を占め面目を一新する画期である。本期の組成は、越前守護朝倉氏と家臣団の居館群、特権商人・職人の居住地と寺院より構成される福井県一乗谷遺跡群⁽²¹⁰⁾の組織的調査

によって網羅的に把握することができる。当遺跡の基盤をなす城下の成立時期については定見がないが15世紀末葉（文明年間頃）が有力視され、したがって主体的な遺物群は天正元（1573）年の館跡焼亡に至る期間の所産と理解されている。美濃斎藤氏関係の屋敷地かと推定される東新町地区で占有率18%を有する越前陶器は、甕・壺・鉢それぞれの量と器形の分化がすすみ、これに徳利・火桶・薬研が加わりきわめてバラエティに富んでいる。この段階の越前陶器にみられる普遍的な器種の量産、規格性と特定器種の多様性の両側面は、北東日本海全域を制圧した生産組織の集約化を裏づけるものであろう。⁽²¹¹⁾第5期に顕在した瓦器火舎・香炉類は殆んど見出されない。一方、器種別專業を極限までおしすすめ存続を図りながら、基本三種の器種組成の解体と還元焰焼成技法を廃棄して越前窯との競合に敗退、自壊の途を歩んだ珠洲窯は、本期のある時期まで片口鉢に限って生産を持続し余命を保ったが、製品は全て赤褐色、軟質粗胎な粗造品ばかりで、消費地では当期の製品は確認されていない。

また供膳器は、土師器と中国陶磁、瀬戸美濃系陶器であるが、東新町地区出土遺物総破片数の量比は、前記三者が各々64%（過半は灯明皿）、5%、3%の集計値を示し、一乗谷遺跡の平均的な占有率とされている。⁽²¹²⁾ところが庄郷集落の複合体である西川島遺跡群の16世紀代の中国陶磁と瀬戸美濃陶器の関係は、立地・地名からみて穴水保の中核地と目される御館遺跡を除く美麻奈比古神社前、縄手両遺跡では第5期と逆に主として美濃製品が目立ち、⁽²¹³⁾陶磁器の消費にみる階層性の存在を示唆するごとくである。中国陶磁は、竜泉窯青磁系列の口縁が直線的に開く線描き山形細蓮弁文および素文碗・鉢、稜花草花文および素文皿とともに、大量の白磁反り口碗・皿、後半には菊花および輪花皿・坏と各種の白磁染付碗・皿が消費されている。中国陶磁の補完的役割を担った瀬戸美濃陶器は大窯によって量産される民間雑器に転じ、灰釉の中国陶磁写しの線蓮弁文・素文碗、灰釉・鉄釉の皿から後半には丸碗・丸皿へ移行し、器種は香炉・小壺・水注・合子他の小形品、天目・茶入・茶壺等の茶器をはじめ変化に富むが、天目碗・皿類とともに量産された片口鉢は、一乗谷遺跡では越前製品との競合を避けて殆んど搬入されていない。村落領主以上の城館では、15世紀代以降、黄褐釉系四耳壺ないし信楽四耳壺が移入され、中世後期の支配層の階層標識をなす。なお、16世紀末葉には、瀬戸と備前工人の移植によって、越中東部で越中瀬戸窯（中新川郡立山町）、加賀南部で作見窯（加賀市）が出現し、在地の流通関係に変動を生じているが、唐津系陶器の大量移入とともに、近世的体制への始動と考えるので、ここでは省説する。

上記要説した中世陶磁器を中心とした組成の変遷をふまえ、北東日本海域の特質を

列記すると、(1)貯蔵・厨房器は広域・近国窯に在地窯が挟在しながら地域窯の製品、土師器皿類は別にして、地域内部で自給不能な施釉陶磁の供膳器、および飲酒器・茶器等の高級奢侈品（中国陶磁・瀬戸美濃陶器）は異なる大分業圏から移入するという中世的日常用器の産地・器種別構成が認められるが、東海・関東地方と対比すると、特に中世後期には中国陶磁の占める比重が高い地帯に属する。(2)第1・2段階で生産地を擁しない加賀北部が、越前・加賀・珠洲各窯の競合地となったのを除けば、能登から道南部に至る列島の約4分の1を包括する広大な地域が、須恵器系（珠洲）陶器の圧倒的優勢なほぼ単一の分業圏を形成した。(3)中世陶磁器は、小浜・敦賀を起点とし道南部に至る日本海沿いに展開する一連の海運・港湾を主幹線とした点で、関東・東北太平洋域より卓越した海上の運輸・流通形態をとったとみられる。(4)北陸南西部は、12世紀中葉～後半、15世紀後半の再度、京都の“かわらけ”文化圏に編入され⁽²¹⁴⁾、土師器が灯明器、酒杯、一部副食器として大量に消費されたが、越後を緩衝地とし、東北日本海域は文化圏外におかれた。(5)土製煮沸器は11世紀後半以降激減し、土鍋・土甕が13世紀代まで少量使用されるが、中世後期には石鍋と畿内産土釜が散見されるにすぎない。これを鉄鍋の民間普及地帯と確定するには、なお、関東における中世後期の土製煮沸器の復活現象、ならびに鉄器生産のあり方を整合的に説明する必要がある、として約言できよう。これら特質の背後事情の解明には、生産地を異にする各種の陶磁器の流通機構―流通経路と運輸形態、その管掌者像等多岐に亘る問題を段階的に把握し中世経済史の中で正しく位置づける作業が要請されるが、筆者の力量不足と資料的拘束を蒙って、若干の留意点の指摘にとどめねばならない。

まず、流通の画期の設定については、11世紀中葉と16世紀末葉～17世紀初葉を中世の始期と終期としておさえた上で、12世紀中葉以降の地域窯相互の第1次競合・淘汰の過程が珠洲窯の日本海全域への商圈拡大として結果し、その挺子となった隔地間海運の発達と基地としての中核港湾の成立を指標とする14世紀前半代、広域市場圏確保のための飛躍的増産と特産的商品としての品質向上の同時達成という時代的要請が惹起した、15世紀後半代に生起する第2次競合・淘汰が、越前窯の日本海域の一元的制覇として結果する16世紀初葉頃、の2つの画期を設定することができると思う。この2つの画期に、中国銭貨の流通とともに東アジア貿易圏への参入の証しとなる中国陶磁と第2段階の後半に顕現化する瀬戸美濃陶器の日常用器への参加の仕方が第1点にかかわる問題となるが、中国陶磁についていえば、竜泉窯系青磁の流通始期等に研究課題を残すものの、大体整序的な組成による推移傾向を示しているといえる。中国陶磁の遺跡（階層）・地域別の占有率については前項まで検討を加えてきたが、貯蔵器

をはじめとする中国陶磁が民間雑器として普及した大宰府（博多⁽²¹⁵⁾）を核とする九州北部と異なる外縁地として位置づけられるとはいえ、第1段階からすくなくとも在地領主層に広汎に流通し、第2段階では中核港湾に集住する魚屋・鍛冶屋も確実に消費者であり、一般村落での所有・消費量はいまひとつ安定した集計値をうるに至らないものの、15、16世紀代には道南部の館主層を含む守護から国人領主層に大量に集積されていた。そのことは、元亀元（1570）年前後に落城した、加賀一向一揆最後の拠点で旗本鈴木勝重軍の居城、鳥越城（石川郡鳥越村別宮⁽²¹⁶⁾）の貯蔵施設から一括出土した約100個体の中国陶磁（染付・白磁・青磁碗皿・香炉）や蓄陶磁遺構⁽²¹⁷⁾に端的に示されているが、村落での流通量を過少評価できないことは前記の通りである。一方、瀬戸美濃陶器は、予想される瀬戸・東濃地域から陸運→（湖上水運？）→海運の中継運輸形態が日本海域への移出の阻害的要因として作用し、13～14世紀代は貯蔵・宗教ないし奢侈用の特定器種（四耳壺・瓶子・天目茶碗等）を主体に在地領主層に少量もたらされるにとどまったことは、中継地となった湖東南部における近江・大谷墳墓をはじめとする瀬戸陶器の豊富な流通状況と⁽²¹⁸⁾、在地製品を主体とする日本海域のそれがきわめて対照的なことから窺える。その意味で、隔地間海運と中核港湾が最盛期を招来した15世紀前半代にみられる器種が豊富な瀬戸美濃陶器の大量移入は、民間雑器への性格転化の側面を強めつつ運送経費の支出を補填し中国陶磁に匹敵する廉価な製品の量産体制を確保し、おそらく敦賀に連結する恒常的ルートを開拓したと考えられる点で、流通機構の再編成を促進する動きといえる。ただし、能登・西川島遺跡群でみられたように、供膳器を主体とする15世紀代の瀬戸美濃陶器は全体で中国陶磁の約1.4倍（白山橋遺跡の供膳器に限れば約1.2倍）なのは一般庄村落の場合で、中核港湾・門前町では中国陶磁碗皿が瀬戸美濃陶器をはるかに凌駕しており、その日本海域への搬入経路と流通機構が改めて問題となろう。中国陶磁と瀬戸美濃陶器の関係は、後者による前者の仿製として終始したが、当地方では後者が前者の不足分を補完する役割を果たしたのは貯蔵・宗教器等奢侈的器種であって、供膳器については中国陶磁—瀬戸美濃陶器の厳密な重層関係が存したかは疑問である。中世の供膳器は、これに漆器、土師器が加わる複雑なセットを構成したが、各段階、各階層の日常、非日常的な場における組成の実態は、天目茶碗の飯盛器への転用等の問題を含め必ずしも明確ではない。ただ、特に中世後期の村落的遺跡で中国陶磁碗皿類が一定量消費され、かつ相当長期間の使用が考えられる実状に即していえば、村落上層の日常食器を構成したと考えられる規格的な中国陶磁碗皿類の高級性、高価格の評価は両検討を要する⁽²¹⁹⁾。

さて、中国陶磁の流通経路としては、(1)中国…博多→(山陰)→小浜・敦賀→各地、

(2)中国…小浜・敦賀→各地, (3)中国…博多→(瀬戸内)→京都→各地の3コースが想定される。このうち(1)のルートは、北東日本海域と山陰を含む南西日本海域が技術系譜を異にする中世陶器の分業圏を形成していたこと⁽²²⁰⁾に示現されるごとく、一般物資の恒常的定期的交易路として機能していたとは考え難い。次に(2)については、三上次男氏も注意されたように、長徳元(995)年から天永3(1112)年にいたる約120年間に、若狭に3回、越前に6回宋船の来着記事があり、寛治5(1091)年には敦賀へ入港したとみえる。そして、元永年間(1118～1120年)頃と推定される「某書状」⁽²²²⁾は、京某所からの指令を受け白藤を「敦賀唐人」から購入した経過等を報じたものであるが、文中に「於国者、此一兩年唐人更不著岸仕□者也、是非他事、国司御苛法無期由令申者、不罷留候也」、あるいは「重又別唐人尋遣族候之處、不候之由」云々とみえることからすると、敦賀津には当時かなり頻繁に宋船が入航し商客の私館が置かれていたことを知ることができる。11世紀後半～12世紀前半代の中国陶磁は、前記のように流通始期が九州北部より幾分遅れる可能性があるものの、11世紀末葉以降一定量の供給が確保されていることを重視すれば、数量は別にして、敦賀・小浜を介して直接北東日本海域の各地にもたらされたと考えねばならない。ただ、以後、正中元(1324)年祖継大智が高麗を経て「加州石川郡宮腰津」に帰国、応永15(1408)年南蛮船が小浜湊に入港、天文20(1551)年明船が三国港⁽²²³⁾に到着した記事が散見する程度で、文献史料のみでは14世紀代以降急増する中国陶磁の供給経路を一貫して説明できないのも確かである。

これに対し(3)は、基本的に琵琶湖を経由し塩津から木の芽峠・椋木峠を越えて南越盆地へ入る陸路と海津から愛発関を経て敦賀津へ出る(1)と逆の海路が設定でき、平安時代に平安京周辺、ついで近江産の緑釉陶器、東海ないし中部高地産の灰釉陶器、さらに中世初期に西日本から中世陶器が搬入されたのはこのルートのいずれかと推定される。中世初期の中国陶磁がどの程度これを踏襲しているか明らかにできないが、中世後期に三国湊の商圈に吸収されたと考定されている加賀南部橋立浦刀禰級居館跡かと思われる田尻遺跡、能登南部の要衝に位置し気多神社の関連遺跡と推察される寺家砂田遺跡⁽²²⁴⁾、入善庄所かとみられるじょうべのま遺跡等臨海地区の遺跡グループにおける中国陶磁を考慮すれば、第1段階は庄園年貢・公事物の保管・積出の帰り荷として海路敦賀からこれら中・小港湾を介して入手したとも考えられ、主として関丸商人管下の廻船を媒体とする中世後期とは異なる流通構造が想定されるのである。もっとも、第1段階の中国陶磁の流通が全てかかる庄園制収取関係の副産物として捉えきれかどうか、そうとしても帰り荷の商業的所得が全て庄領主に帰したと考えることは

困難であろう。この設問に答えるためには、12世紀代における消費的政治都市京都と周辺地帯の流通経済機構の解明が重要な課題となろう。

次に、第2・3点にかかわる珠洲分業圏の評価は、つとに指摘してきた、(1)瓷器系陶器と遜色のない堅牢精質な還元焰燵焼成品という高い機能性、(2)寺社・在地領主層など特定少数を対象とし、中国陶磁・瀬戸美濃陶器の仿製品を含む、多彩な加飾性に富む奢侈・宗教器の特注的生産体制、(3)海運に直結する生産立地および個別・自給的な地廻り海運への依存、が挙げられる。(1)については、瀬戸内海域における常滑―東播―亀山陶器のごとき貯蔵・調理器の器質・価格の重層性が、当地方の瓷器系と須恵器系の間に存した形跡が認められないことは、前記加賀北部にみる越前・加賀製品と珠洲製品の競合・併用的使用状況、14世紀代に一時的に稼動した越中・越後内陸部の小規模瓷器系窯の流通状況、さらに墳墓出土蔵骨器の産地別構成に明らかである。珠洲製品の機能性の高さは、例えば片口鉢では堅牢さに加えていち早く卸し目を採用し、独自の櫛目波状文による加飾と合わせ特産の商品として広汎に使用された。(2)は、中世前期の多様な器種が後期には基本三種ないし特定器種に集約される一般的動向のなかで、中国製黄褐釉四耳壺＋白磁四耳壺→珠洲壺R種A II類、同黄褐釉四耳（呂宋）壺→壺K種C II類、瀬戸瓶子I類→瓶子B類、同印花文広口壺→刻印文広口壺等の高級飲食・宗教器写しの製作を持続したところに進取的な一面すら窺える。また、東海にみられる瀬戸窯と常滑・渥美窯他との分化、あるいは後者の甕窯と埴窯にみられる窯群内の器種別分業生産は、中世後期に甕を主産品とする越前・加賀窯、片口鉢を主産品とする珠洲窯のゆるやかな窯群間の器種分化として進展したが、系譜・品質・器種ならびに生産規模の異なる多様な地域窯と、常滑に代表される遠隔地窯の製品が競合しつつ相互に補完し合う器種・産地別の分業的生産、流通体制を現出した瀬戸内と異なり、分業関係の未成熟な当地方の産業構造の反映とみなすべきであろう。また(3)は、鉄素材等について北陸と山陰の海上交渉が行われ、13世紀代以降越前製品が丹後・但馬あたりまで移出されたものの、山陽と峠越えの流通路を保持した山陰とは別個の、北東日本海全域を一連のコースとする大分業圏を形成し、そうした流通・運輸形態が地域産中世陶器のみで貯蔵・調理機能をまかなう生産形態をも規定したと考えられる。

ところで、日本海域の中世前期における海上権の支配者像については定見がないが、加賀最大の宗教的権門である叡山末寺白山宮の教線が、12世紀中葉の段階で西は普正寺遺跡の位置する佐那武白山社、東は能登半島先端の高峯（倉）および雲津白山社から越後南部の能生白山社等沿海の主要港湾に橋頭堡を築いていたことに着目する

ならば、珠洲陶器も白山宮神人の身分を帯びる刀禰級在地領主層の管掌下におかれた廻船によって末社の所在する港湾伝いに運送されたとも考えられる。なお、加賀に隣接する越前・若狭の海上権は、敦賀郡を中心とする十数箇所の庄・保と敦賀・三国の2要港、浦々を領掌し、臨海部の社領の一部が越中国射水郡奈古浦から佐渡におよぶ⁽²²⁵⁾ことから、気比神宮神人が関与していたと推定され、これに連携する北陸道への流通路を扼する湖西の経済的権益を掌握していたとされる比叡山の富豪神人の動向とともに⁽²²⁶⁾今後の考察がまたれる。中世前期の「廻船」の実態が不明な現状で珠洲陶器の運輸形態も確定できないが、窯跡群が所在する能登半島先端部は大船の碇泊港に恵まれず、外浦の馬繰（繫）浦（西海浦）、内浦の塩津、正院浦（蟹浦）のほか文献にみえない鶴飼港、松波港等珠洲窯を構成する各支群に対応する沿岸の岬と河口を利用した小港湾を積出港としたはずであるが、これら小港湾は窯跡群の直接の経営主体とみなされ、あるいは白山宮神人職を帯したとも推察される、刀禰級有力名主の多角的経営の一環としての地廻り海運の基地であり、それへの依存は軽視できないと推察される。

これに対し中世後期の海運は、越前陶器の出土数の定量化が難しいものの、13世紀前半代までの製品は能登以東で殆んど見出されないが、14世紀代以降北東日本海全域で均一的に検出されるようになり、15世紀代には珠洲甕類の減産を補充する形で一定量供給されていることから、越前陶器専用の運送船の往来は考えにくい。このことは、加賀南部へは甕・片口鉢、北部へは甕を主体に特定器種の不足分を補う形で供給する流通形態とも関係があらう。すなわち、14～15世紀代の越前製品は、敦賀を進発した廻船に中国陶磁、瀬戸美濃陶器とともに積載され、各地の中核港湾で地域内部に即した器種セットとして売却されたと推定される。さきの大野庄湊（普正寺遺跡）と白山宮門前町（白山遺跡）の器種組成の一致は、内陸部における広域市場の形成、貨幣経済の浸透による商品経済の発達を前提とする流通機構の一元化と、道南部に達する一連の海運の発達を物質文化のあり方からも裏づけてくれる。

第2段階以降の大形廻船が主として中核港湾に基地をおく問丸商人の所持船であったことは、嘉元4（1306）年、越中の中核港湾放生津湊から南下し越前佐幾良泊（福井県芦原町崎）へ着岸した「関東御免津輕船二十艘之内随一」の「大船」を三国湊の付属港湾三ヶ浦の預所代・刀禰等が漂没船と称して抑留、鮭・小袖（麻布）等北海の積載物を押収したことに端を発し、以後14年間に亘り相論が続いた著名な事件からも容易に知ることができる。放生津湊は、当時北条一門の守護名越氏の領有する大袋庄^{（227）}に所在し、「津輕船」は放生津の問丸かと思われる本阿が所持し関料免除の特権を保障され、津輕方面から敦賀・小浜まで往来した大形廻船とする高瀬重雄氏の論説をは

じめ多くの論者が言及している。15世紀以後の廻船の大形化の実態は詳らかでないが、16世紀後半に姿をみせる700～800石積のハガセ船、北国船のように舟底構造が堅固で、凌波性・帆走性に秀れた日本海独特の準構造船の出現は瀬戸内海域より先行する可能性もある。⁽²²⁸⁾第2段階を迎え日本海海運が拠点的な中核港湾を結ぶ隔地間海運として展開する段階では、珠洲窯も次第に当該交通形態への依存度を強め大量輸送を実現したことは中核港湾出土の遺物量がよく示すところである。もちろん、隔地間交易の担い手が土豪の有力名主と問丸商人の併存する段階から、後者を主体とする段階へ流通媒体が推移するのが、在地における自律的な商品生産の展開のみでもたらされたのではなく、文永2（1265）年、若狭国の拠点の港湾地区の庄郷保地頭職が得宗領化されるのとほぼ同時に、大野庄、富永御厨、大袋庄等が得宗被官に領掌されたことに示される鎌倉幕府による湊津から主要な浦におよぶ直接支配方式から室町幕府のもっぱら中核港湾の問丸商人層に依存する商業政策の転換も、無視できぬ現実的要因となったはずである。文永9（1272）年、三ツ鱗紋旗（過所船旗）を掲げる「関東御免」の廻船に指定され、国域を越えて年貢・公事物輸送および交易活動に従事した、かの若狭・田島浦を基地とする刀禰秦一族の所持船徳勝丸は、鎌倉末期の大形廻船海運の実像を伝える貴重な実例であるが、珠洲陶器の流通を特定の権門勢力と結びつけて説明できぬ以上、北上する中国陶磁・瀬戸美濃および越前陶器と交錯する能登以南については別個の運輸形態を想定するのが自然であるから、隔地間海運と個別自給的な地廻り海運が併存する流通の二重構造を想定すべきかと思われる。したがって、現象面では同じく単一生産地の製品専用の小舟であっても、15世紀前半代の備前陶器が、瀬戸内の拠点の海港に出店を有する問丸南ノ二郎三郎によって独占的に管轄され、麦・大豆等の農作物とともに30～80個体ずつ、6箇月に21回に亘り、浦伊部港から兵庫北関へ運遭された状況と実態が異なっていたかと思われる。⁽²³¹⁾

これに対し第3段階の流通の担い手は、おそらく一乗谷城下外周の都市問屋商人と結託して日本海の海上権を掌握しつつあった敦賀の廻船業者と想定される。それゆえ、第2の画期は、陶磁器の現地調達方式とでもいうべき古代以来の流通原理が、海運を媒体とする中世の隔地間交易形態の帰属をめぐる地域窯相互の競合・淘汰を経て一応止揚され、16世紀末葉に開始される唐津陶器＝供膳器の集約的生産と一元的流通を可能にした、西廻り海運の先行形態として評価されることとなろう。

註

- （1）『日本考古学年報』が1976年、『考古学ジャーナル』が1978年より「歴史時代」を「古

- 代」と「中近世」に分離し学界動向を紹介するようになったことに、研究の趨勢が示されていよう。文献学の動向については、佐藤和彦「中世の政治経済Ⅱ 五分業流通」『岩波講座日本歴史』26(1977年)、木村茂光「日本中世分業・流通史研究の一 視 角」『歴史評論』426(1985年)他参照。
- (2) 橋本久和「中世土器の地域色と流通」『考古学研究』104(1980年)、拙稿「中世陶器の生産と流通(1)(2)」『考古学研究』108, 110 (1981年)。
 - (3) 荻野繁春「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁』14 (1985年)、同「摺鉢から見た中世の生産と流通について」『国立福井工業高等専門学校紀要』20 (1986年)、森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯址群を中心に―」『神戸市立博物館研究紀要』3 (1986年)。
 - (4) 植崎彰一「出土日本陶磁研究史」『島根県立博物館調査報告』3 (1982年)、藤沢良祐「長野県出土の古瀬戸について―特に蔵骨器を中心として」『信濃』31―11(1979年)、井上喜久男「瀬戸・美濃窯の流通について」『中近世土器の基礎研究』Ⅰ (1986年) 他。
 - (5) 赤羽一郎「中世陶器出土分布の一例―「常滑」の場合―」『歴史公論』66(歴史時代の考古学) (1976年)、同「関東平野における中世常滑窯製品の出土分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3 (1984年)。
 - (6) 足立順司「中世陶器生産と消費・序説―東海地方東部地域の場合―」『東笠子第27地点遺跡発掘調査報告書』(1982年)。
 - (7) 鋤柄俊夫「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38―4 (1986年)。
 - (8) 近年、消費遺跡出土陶磁器類の量的組成から、遺跡の性格を割り出す試みがなされるようになった(日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』4, 1984年他)が、個体数算定の統一基準の設定に至らず、全般に破片総数によっているため、小形の供膳器と大形の貯蔵器の量比に不安を残している。特に流通の画期設定や遺跡の類型的把握に必須の、徹底した個体数の確認が望ましいことはいままでもないが、遺物量が豊富な遺跡では、通常の器種は口縁部片と底部片の集計が適切と考える。以下に筆者が作成した集計表は、上記の諸点に留意しつつ一部の遺跡は再点検を実施し、文献に依拠した場合も最大1世紀程度の年代幅にまとめ再編成したが、各報告者の集計法の制約もあって統一的に処理できなかった。なお、四柳嘉章他『西川島一能登における中世村落の発掘調査―』(1987年)は、そうした観点から再利用に耐えうる精細な出土地区・器種・時期別集計表を付載し、当該報告書の範とすべきものである。
 - (9) 網野善彦『東と西の語る日本歴史』(1982年)、『中世再考』(1986年)、村井章介「中世日本列島の地域空間と国家」『思想』732 (1985年)、黒田日出男『姿としぐさの中世史』(1986年)他。
 - (10) 脇田晴子「第5章 首都市場圏の形成」『日本中世商業発達史の研究』(1969年)、永原慶二「中世の商業・貿易と都市」『日本経済史を学ぶ』上 (1982年)。
 - (11) 鈴木敦子「中世後期における地域経済圏の構造」『歴史学研究別冊特集 世界史における地域と民衆(続)』(1980年)他。
 - (12) 保立道久「中世民衆経済の展開」『講座日本歴史』3 (1984年)。
 - (13) 拙稿「北東日本海域における中世陶磁器の流通」『月刊文化財』215(1981年)。なお、佐々木達夫「第7章 北日本の中国陶磁流通」(『元明代窯業史研究』, 1987年)は、12～19世紀に亘る東北の城館跡を中心とする中国陶磁の綿密な踏査をふまえ、組成量比の分析を通して段階的変遷を概観した労作であるが、編年的細別に基づく器種＝機能別分類、組成把握の視点がやや稀薄な憾みがある。
 - (14) 三辻利一・吉岡・嶺勲・永井宏和「珠洲陶器の流通に関する研究(第1報)―珠洲陶器と珠洲系陶器の相互識別―」『考古学と自然科学』20 (1988年)。
 - (15) 珠洲系諸窯については、拙稿「北東日本海域における中世窯業の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』16 (1988年) 参照。

- (16) 栗沢光男・高橋忠彦・熊谷太郎「秋田県内の珠洲系陶器資料」『研究紀要』1, 秋田県立埋蔵文化財センター (1986年), 同センター『昭和60年度埋蔵文化財研修会資料』, 陶磁器実見。
- (17) 三浦圭介・成田滋彦他『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会 (1977年)384頁図264, 実見。
- (18) 鈴木克彦「青森県出土の中世陶器 2 例」『考古風土記』1 (1976年), 実見。
- (19) 平泉町教育委員会調査・保管, 本沢慎輔氏の配意により実見。
- (20) 磯村朝次郎氏の教示による。
- (21) 小松正夫・石郷岡誠一・日野久他『下夕野遺跡』秋田市教育委員会 (1979年), 同『後城遺跡発掘調査報告書』同上 (1978年), その他, 秋田県教育委員会調査・保管, 実見。
- (22) 拙稿「経外容器からみた初期中世陶器の地域相—須恵器系中世陶器を中心に—」石川県立郷土資料館『紀要』14 (1985年)。
- (23) 川上貞雄他『水原城館址及水原代官所址発掘調査報告書』水原町教育委員会 (1977年), 川上貞雄「堀越館址発掘調査報告—第2次緊急調査, 1978年—」『水原郷土誌』11 (1979年)。小木城の遺物は, 伊藤正義氏の配意により実見。
- (24) 佐藤慎宏「平田町金谷出土の壺」『庄内考古学』16 (1979年), 実見。
- (25) 磯村朝次郎「秋田沿岸における日本海的人文要素について—新しい秋田の地域研究のために—」『秋田県立博物館研究報告』5 (1980年), 実見。
- (26) 拙稿「珠洲系陶器の暦年代基準資料」『北陸の考古学』(1983年)。
- (27) 後者は東京国立博物館陶磁室保管, 矢部良明氏の配意により実見。
- (28) 酒井重洋・神保孝造他『富山県上市町弓庄城跡緊急発掘調査概要』Ⅰ～Ⅴ, 上市町教育委員会 (1981～85年)。
- (29) 山本正敏「3 中世の遺物について」『じょうべのま遺跡—C・K地区の調査—』入善町教育委員会 (1985年) 41～42頁。
- (30) 四柳嘉章他『西川島一能登における中世村落の発掘調査—』穴水町教育委員会 (1987年), 実見。
- (31) 実見。
- (32) 石川県立埋蔵文化財センター保管, 平田天秋氏の配意により実見。
- (33) 垣内光次郎「第6章 まとめ 第4節 中世北加賀の陶磁器流通について」『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』Ⅱ, 石川県立埋蔵文化財センター (1985年)。
- (34) 小森秀三・荻中正和・中村淳一『三木だいまん遺跡』加賀市教育委員会(1987年), 同上『勅使館跡発掘調査報告』(1981年), 同上『勅使館跡』(1986年)。
- (35) 荻野繁春「東播系須恵器を焼いた越前宮谷窯—播磨から越前へ, 工人の移動を検証する—」『福井考古学会誌』6 (1988年)。
- (36) 北野博司・藤田邦夫他『辰口西部遺跡群』Ⅰ, 石川県立埋蔵文化財センター (1988年)。辰口町教育委員会調査分(徳久・荒屋地区)は, 滝上秀明氏の配意により実見, 集計。
- (37) 敦賀市および福井県教育委員会調査・保管, 実見。
- (38) 田中照久「越前国鯖江市南井町・南屋敷中世墓址出土の中世陶器」『福井県考古学会誌』1 (1983年)。なお, 唯一の須恵器系壺(10図32)は, 外底面の調整・刻画等から在地窯産の可能性がある。
- (39) 小野正敏・金元賢治『豊原寺跡Ⅱ 華蔵院跡第二次発掘調査概報』丸岡町教育委員会 (1981年)。
- (40) 拙稿「Ⅴ 能美郡辰口町長滝経塚遺跡」『鶴来町の古代中世遺跡』鶴来高等学校歴史部 (1963年), 牧野隆信・小森秀三・田嶋正和「柴山町出土の蔵骨器」『石川考古学研究会誌』22 (1979年), 小村茂・室山孝『軽海中世墓址群—発掘調査概報—』小松市教育委員会(1973年), 青木豊昭「三里浜周辺地域の遺物について」『福井県埋蔵文化財報告』

- 3 (1979年), 『宮崎村誌』(1984年)。古府墳墓出土遺物(小松市立博物館保管)は実見。
- (41) 拙稿「珠洲系陶器分布の西限と南限」『歴博』18 (1986年), 実見。
- (42) 片岡肇・南博史・鋤柄俊夫他『平安京高倉宮・曇華院跡』古代学協会(1983年), 実見。
- (43) 福井県教育委員会調査・保管, 中司照世氏の配意により実見。
- (44) 拙稿「北海道の中世陶器—中世日本海海運史の一鱗—」『日本海文化』6 (1979年)。
- (45) 松崎水穂・斎藤邦典他『史跡上之國勝山館跡』Ⅰ～Ⅷ(1980～87年)。
- (46) 道南12館跡の成立時期は, 従来下国安藤氏の滅亡, 蠣崎氏等の渡道とかかわらせ, 15世紀中葉に求める見解が大勢を占めていたが, 私見によって, 14世紀後半代に遡らせる必要があると考える。
- (47) 田原良信・鈴木正吾他『史跡志苔館跡』Ⅰ～Ⅲ (1984～86年)。
- (48) 吉崎昌一・森田知忠他『函館市志海苔町の蓄銭遺構』市立函館博物館 (1973年)。
- (49) 註44文献。
- (50) 松崎水穂・百々幸雄・中村公宣「北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨」『考古学雑誌』67—2 (1981年), 百々・松崎「北海道洲崎館跡発見の中世頭骨」『人類学雑誌』90—1 (1982年)。
- (51) 註44文献。
- (52) 森本岩太郎・橘善光「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』6 (1974年)。
- (53) 小林知彦・佐々木浩一・高島芳弘・藤田俊雄他『史跡根城跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅸ (1979～1987年)。
- (54) 工藤清泰・木村浩一他『浪岡城跡』Ⅰ～Ⅷ(1978～1986年)。
- (55) 成田誠治・三宅洋一・工藤大他『独狐遺跡』青森県教育委員会(1985年), 実見。
- (56) 註17文献。
- (57) 註52文献。
- (58) 佐々木達夫「津軽・蓬田大館の発掘—1981年—」『日本海文化』10(1983年), および早稲田大学保管, 実見。
- (59) 十三小学校保管, 実見。
- (60) 昆野靖他『鹿島館遺跡調査報告書』Ⅰ, 岩手県埋蔵文化財センター(1975年)。
- (61) 高橋正之・高橋与右衛門他『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書(昭和52・53年度)』同上(1980年)。
- (62) 註16文献, 佐藤禎宏「山形県の中世陶器について」『庄内考古学』18 (1982年)。
- (63) 註16佐藤文献引用の川崎利夫作成表。
- (64) 佐藤禎宏「最上川流域出土の珠洲系陶器」『庄内考古学』17 (1980年) 59頁。
- (65) 菅原謙二・深井嘉市『中山廃寺跡発掘調査報告書』藤島町教育委員会 (1982年)。
- (66) 庄内昭男「秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について」『秋田県立博物館研究報告』7 (1982年), 実見。
- (67) 奥田直栄『江上館跡』中条町教育委員会(1977年), 註23文献, 奥田・大河内勉『村松城跡発掘調査概要報告書』村松町教育委員会 (1981年), 大河内・荒川正明他『御館』小国町教育委員会 (1985年), 奥田直栄『御館跡緊急調査経過報告』新潟県教育委員会 (1966年), 学習院大学輔仁会史学部『府内御館跡第4次発掘調査報告』(1966年), 中村孝三郎『上除城館址発掘調査報告書』長岡市教育委員会(1976年), 金子拓男『五十嵐小文治館発掘調査報告書』下田村教育委員会 (1973年)。
- (68) 川上貞雄他『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会 (1983年)。
- (69) 川上貞雄他『小島西遺跡』加治川村教育委員会(1984年), 関雅之「西蒲原郡黒崎町釈迦堂遺跡調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県教育委員会 (1973年), 戸根与八郎・駒形敏郎「南蒲原郡中之島村杉之森遺跡発掘調査報告」同上 (1976年)。
- (70) 中川成夫・岡本勇『越後華報寺中世墓址群の調査—中世禅僧墓制の考古学的研究(Ⅰ)—

- 一』立教大学史学研究室(1959年), 岡本「新潟県北蒲原郡出湯華報寺における中世墳墓の発掘」『ムゼイオン』11(1965年), 川上貞雄「正安元年在銘経筒の出土」『水原郷土誌料』5(1973年)。
- (71) 本間嘉晴・計良勝範「粟島の考古」『粟島』新潟県(1972年)。善光寺浜遺跡分は上越市教育委員会保管, 小島幸雄氏の配意により実見。
- (72) 寺崎裕助・駒形敏郎他「座禅塚発掘調査報告」『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会(1978年)。
- (73) 渡辺文男「越後五頭山麓赤坂山の中世陶窯」『新潟史学』11(1978年), 註23文献, 註69関文献, 註70川上文献, 関雅之・戸根与八郎・本間信昭「長所遺跡」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県教育委員会(1976年), 註67金子文献。
- (74) 岡川勇夫「千曲川沿岸における珠洲焼の分布(1・2)」『長野』66・94(1966年), 小柳義男「上水内郡三水村岩袋遺跡出土の珠洲系陶器」『埋文雑記帳』6(1984年), 註7文献。
- (75) 註7文献。
- (76) 小林康男他「丘中学校遺跡」塩尻市教育委員会(1983年)。なお, 駒ヶ根市青木遺跡で珠洲甕片とされているが(註74小柳文献), 須恵器甕の誤認である。
- (77) 高橋桂・望月静雄他「長者清水・水の沢遺跡」飯山市教育委員会(1985年), 実見。
- (78) 金井汲次・関孝一他『海戸・安源寺』(1967年)。
- (79) 笹沢浩他「上水内地方の考古学的調査」『上水内郡誌』(1976年), 註74岡川, 小柳文献, 田川幸生・小野沢捷他「茶臼峯一中世の埴遺構を中心として」『高井』30(1974年)。
- (80) 註41文献(個人および国学院大学考古資料館保管, 阿久津久氏の配意により実見)。
- (81) 福田定信「歴史考古編」『小山市史・史料編中世』(1983年)。
- (82) 酒井重洋他「富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯跡緊急発掘調査概要」八尾町教育委員会(1985年)。
- (83) 松島吉信他「富山県婦中町友坂遺跡調査報告書」婦中町教育委員会(1984年), 註28文献Ⅳ, 池野正男・宮田進一他「椎土遺跡・塚越貝坪遺跡発掘調査概要」小杉町教育委員会(1988年), および酒井重洋氏の教示による。
- (84) 田中照久「玄達瀬から発見された越前焼」『福井考古学会会誌』5(1987年)。
- (85) 湯尻修平・中島俊一他『白江・梯川遺跡』Ⅰ, 石川県立埋蔵文化財センター(1988年)。
- (86) 註2拙稿, 表1-1。
- (87) 藤原武二・田中哲雄・水野和雄・小野正敏他「江馬氏城館跡発掘調査概報」神岡町教育委員会(1979年)。表2で「常滑系」とされるものに八尾窯の製品が確認できる(第12図121・124)。
- (88) 朝倉氏遺跡資料館調査・保管, 実見。
- (89) 中嶋陽太郎他「中野遺跡第四次発掘調査概要」宮津市教育委員会(1983年), 註41文献。
- (90) 原口正三「古代・中世の集落」『考古学研究』92(1977年), 橋本久和「中世村落の考古学的研究—高槻における2, 3の遺跡調査から—」『大阪文化誌』1-2(1974年), 佐久間貴士「畿内の中世村落と屋敷地」『ヒストリア』109(1985年), 広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6(1986年), 同「中世村落の形成と展開—畿内を中心とした考古学的研究—」『物質文化』50(1988年)他。
- (91) 田嶋明人「Ⅳ考察 第2節 9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡』Ⅰ, 石川県立埋蔵文化財センター(1986年), 四柳嘉章「研究編 Ⅰ中世土師器の編年」前掲『西川島』, 宇野隆夫「越中弓庄城の土師器—中世の北陸と畿内—」『大境』10(1986年)他。
- (92) 11~15世紀代の中国陶磁の型式分類は, 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国

- 陶磁器について一型式分類と編年を中心として一」『九州歴史資料館研究論集』4（1978年）、亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』（1980年）、森田「14～16世紀の白磁の分類と編年」、上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2（1982年）による。
- (93) 以下の考古学的方法による村落の構造分析の予察には、中世文学の村落と住民構成研究の成果を殆んど吸収できなかった。今後に期したい。なお、文献学の研究を要約したものに、「A研究課題と問題点 22・23中世の村落」（福田栄次郎・三浦圭一）『中世史ハンドブック』（1973年）他がある。
- (94) 当該地域の代表的遺跡として、石川県小松市漆町遺跡群（田嶋明人他『漆町遺跡』Ⅰ、前掲）を挙げることができる。
- (95) 坂井秀弥「頸城平野古代・中世開発史の一考察—頸城村を中心に—」『新潟史学』18（1985年）、同「Ⅲ 3坪ノ内館跡をめぐる開発史的考察」『新井市坪ノ内館跡』新潟県教育委員会（1986年）。
- (96) 大山喬平「Ⅹ 中世の身分と国家」『日本中世農村史の研究』（1978年）他。
- (97) 永瀬福男・熊谷太郎他『中田面遺跡・重兵衛台Ⅰ・Ⅱ遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会（1980年）。
- (98) 註21文献。
- (99) 岸本雅敏・山本正敏・松島吉信『じょうべのま遺跡—C・K地区の調査』（前掲）。
- (100) 藤井一二「国指定史跡“じょうべのま遺跡”と寺領荘園—墨書「西庄」と「丈部吉権丸」木簡—」『日本海地域史研究』8（1988年）。
- (101) 橋本正春「神田遺跡」、橋本・宮田進一「江上B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編、土器・石器編、木製品・総括編—』上市町教育委員会（1981・82・84年）、橋本・狩野陸「若宮B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—立山町遺構編、土器・石器編、木製品・総括編—』富山県教育委員会（1981・82・84年）。
- (102) 橋本正春「D中世の遺跡の性格」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編—』（前掲）8頁。
- (103) 註30文献。
- (104) 坂井秀弥・戸根与八郎他『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会（1984年）。
- (105) 註36参照。
- (106) 註94文献。
- (107) 田嶋明人・平田天秋『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会（1979年）。
- (108) 註34文献。
- (109) 同上。
- (110) 坂井秀弥・田辺早苗「番場遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』2（1986年）。
- (111) 註102文献。
- (112) 註29文献。
- (113) 註30文献714頁。
- (114) 註104文献。
- (115) 註30文献。
- (116) 註101文献。
- (117) 岸本雅敏・山本正敏・酒井重洋『富山県魚津市早月上野遺跡第2次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会（1976年）。
- (118) 註69文献、上野章・岸本雅敏・池野正男・久々忠義『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会（1978年）。
- (119) 三上次男・岩本義雄・大橋康二他『尻八館調査報告書』青森県立郷土館（1981年）。

- (120) 三浦圭介・赤平智尚他『境関館遺跡』青森県教育委員会(1987年)。
- (121) 坂井秀弥他『新井市坪ノ内館跡』(前掲)。
- (122) 報告書未載, 実見により確認。
- (123) 小野正敏「5中世 4出土遺物による生活の諸相」『福井県史』資料編13(1986年)456頁。
- (124) 小野正敏「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』4(1984年)。
- (125) 田川尋常高等小学校『古土器の調査』(1936年), 川崎利夫「山形県鶴岡市田川七日台の墳墓について」『歴史考古』8(1962年)。
- (126) 金田孝順・村井一郎・谷幸信・木本俊雄『高松町元女堂山石塚群調査概要』高松町教育委員会(1977年)。
- (127) 経塚と墳墓の関係については, 保坂三郎「第8章 平安時代の墳墓における経典」『経塚論考』(1971年), 江崎武「鳳来山出土の中世陶器」『東洋陶磁』3(1976年), 杉原和雄「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」『史想』19(1981年)参照。
- (128) 金子拓男「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1(1975年)。
- (129) 川崎利夫「鶴岡市湯田川の経塚について」『庄内考古学』8(1968年), 第2章第3節, 西井龍儀「福岡町上向田経塚について」『オジャラ』2(1967年)。
- (130) 箱根美術館『越前・珠洲』(1986年)。愛知県陶磁資料館保管, 実見。
- (131) 拙稿「珠洲系陶器における加飾法の展開と特質」『東洋陶磁』8(1982年)。
- (132) 滝上秀明『辰口町湯屋チョウヅカ遺跡』辰口町教育委員会(1985年)。
- (133) 小村茂・室山孝『輕海中世墓址群一発掘調査概報一』小松市教育委員会(1973年)。
- (134) 松沢修「滋賀県・大谷中世墳墓群」『歴史手帳』14-11(1986年)。
- (135) 滝上秀明「第1章 第5節 (3)金剛寺坂中世墳墓群」『辰口町史』2(1987年)。
- (136) 浅香年木「第2編 第2章 古代における手取扇状地の開発」『古代地域史の研究』(1978年)。
- (137) 拙稿「平安前期の地方政治と国分寺一加賀国分寺をめぐる問題」『日本海域研究所報告』8(1977年)。
- (138) 註70文献。
- (139) 坪井良平「五頭山周辺の石造物」『歴史考古学の研究』(1984年)。
- (140) 穴水町文化財保護専門委員会『穴水町の文化財』(1985年)。
- (141) 註71文献。
- (142) 舟崎久雄『魚津市石垣遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会(1972年)。
- (143) 拙稿「第1章 第2節, 松任町周辺の遺跡と調査」『加賀三浦遺跡の研究』(1967年)。
- (144) 西野秀和「中島町マンダラ中世墳墓群をめぐって」『日本城郭大系』7(1980年), 西野氏, 唐川明史氏の配意により遺物実見, 集計。
- (145) 戸根与八郎「3(1)韋駄天山墳墓」『中条町史 資料編1』(1972年), および小出義治氏の教示による。
- (146) 吉岡・浅香年木・桜井甚一他『普正寺』金沢市教育委員会(1970年)。報告書では, 五輪塔群と陶製蔵骨器は遊離しつつも一体的なものと解したが, 本文のように再考してみた。
- (147) 室岡博・上野正「新潟県中頸城郡吉川町河沢塚発掘調査報告書」吉川町教育委員会(1980年)。
- (148) 三浦純夫・久田正弘『剣崎遺跡』石川県立埋蔵文化財センター(1986年)。
- (149) 橋本正『小杉上野遺跡一記録写真編一』富山県教育委員会(1974年)。
- (150) 岸本雅敏『錢甕山遺跡の調査一井波町清玄寺所在中世墳墓発掘調査概報一』富山県教育委員会(1979年)。

- (151) 西野秀和・垣内光次郎他『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』Ⅰ・Ⅱ, 石川県立埋蔵文化財センター (1982・85年)。
- (152) 岸本雅敏『香城寺遺跡の調査—富山県福光町香城寺所在の中世遺跡調査概報—』福光町教育委員会 (1982年)。
- (153) 註150文献12頁。
- (154) 註72文献。
- (155) 定塚武敏編『珠洲古陶—越中における展開—』(1980年)。
- (156) 朝日町教育委員会『朝日町の文化財』(1974年)。
- (157) 拙稿「『鶴来町日吉町および八幡町墳墓遺跡』『鶴来町の古代中世遺跡』鶴来高等学校歴史部 (1963年)。
- (158) 川崎利夫「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学の諸問題』(1976年)。
- (159) 土肥富士夫他『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会 (1982年)。
- (160) 註30文献。
- (161) 同上, 556頁。
- (162) 桜井甚一・唐川明史「地頭町中世墳墓窟」『富来町史』続資料編 (1976年)。
- (163) 橋本澄夫「第3章 第3節 五 矢駄横穴状遺構」, 拙稿「六 印内ラントウ1・2号横穴墓」『石川県志賀町史』資料編1 (1974年), 北陸大谷高校地歴クラブ「小松市津波倉町ホツジ遺構」『紀要』7 (1972年)。
- (164) 橋本正・岸本雅敏『富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』富山県教育委員会 (1975年)。
- (165) 矢部良明氏は, 青白磁四耳壺・水注・梅瓶の「三器を所有することは一つの階層象徴(ステイタス・シンボル)となったようだ。」(「八王子城出土の中国陶磁の特色—文化史との関連から—」『八王子城』八王子市教育委員会, 1983年, 76頁)と述べ, 実用器ないし宗教器としての特殊な性格を強調し, 城館主層に伝世される事例を指摘する。
- (166) 藤沢良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』8 (1982年), 註4文献他。
- (167) 越中以北の出土例としては, 秋田市寺内出土の完好品(東京国立博物館陶磁室保管)が, 実見した唯一の資料である。また, 消費地での発掘例として, 富山県婦負郡婦中町蓮華寺遺跡出土の完形品が報ぜられているが(婦中町教育委員会『蓮華寺遺跡の調査』1984年), テストピット検出のため用途は詳らかでない。
- (168) 註146文献, 垣内光次郎他『普正寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター (1984年)。
- (169) 浅香年木「第1編 第2章 4『大野庄湊』とその後背流通路」, 「第3章 一向一揆の展開と加賀国大野庄」『中世北陸の社会と信仰』(1988年)。以下, 大野庄に関する文献学的考察は本論説による。
- (170) 註21文献。
- (171) 古田良一「津軽十三湊の研究」『東北大学文学部研究年報』7 (1956年), 平山久夫・香取昂宏「津軽十三湊採集の古瀬戸陶片」『北奥古代文化』4 (1972年)他。
- (172) 早稲田大学考古学研究室が発掘調査。
- (173) 加藤孝「津軽安東氏『山王坊跡』の調査」『東北文化研究所紀要』16(1984年), 同「中世津軽十三湊日吉神社(仮称)東本宮社殿列跡考(その1)」同上18 (1986年)。
- (174) 註173 (1984年) 文献。
- (175) 註124文献。
- (176) 註13引用佐々木文献 (1981年) 13頁。
- (177) 筆者採集。
- (178) 加賀北部の陶磁器流通を考察した垣内光次郎氏は, ①「都市型集落」(中核港湾集落など), ②「基幹集落」(門前町・各市など), ③一般集落(農村・漁村など)の分類案を想定されている(註33文献註50)が, 明確なデータは示されていない。

- (179) 註33文献。
- (180) 註169文献。
- (181) 松下正司編『草戸千軒町遺跡』日本の美術215(1984年)他。
- (182) この点は、平山久夫「青森県の中世陶磁について」(『北奥古代文化』6, 1974年, 94～95頁), 小野正敏「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描」(『MUSEUM』416, 1985年, 26頁)でも指摘されている。
- (183) 徳田鋤一『中世における水運の発達』(1936年), 豊田武『増訂日本中世商業史の研究』(1952年)。
- (184) 浅香年木「人買船と北国の港町」『石川自治と教育』25—11(1972年)。
- (185) 下国安藤氏については註171文献のほか, 豊田武「安東氏と北条氏」『国史研究』30(1962年), 平山久夫「安東氏を中心とした津軽中世史序説」『北奥古代文化』5(1973年), 同「津軽安藤氏の成立とその背景」同上13(1982年)他参照。
- (186) 註151文献。
- (187) 垣内・西野両氏の教示による。
- (188) 中西国男「第6章 まとめ 第3節 白山本宮と白山町墳墓遺跡」(註151, 1985年文献)156頁。
- (189) この石室墓付近から⁽¹⁵²¹⁾「永正十八年辛巳四月十」「勝運権少僧都」「□□六十」刻銘五輪塔地輪が出土しているが, 珠洲壺を蔵骨器に使用していることから, 石室墓は15世紀前半代より下るとは考え難い。
- (190) 註151, 1982年文献20頁第3表。なお, 2～4次調査分を加算した垣内氏の集計結果も, 越前, 珠洲, 加賀が各々全体の5.4%, 5.1%, 1%を示し(註151, 1985年文献163頁), 大略一致する。
- (191) 平田天秋・西野秀和『門前町道下元町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター(1985年)。
- (192) 「櫛比庄」『角川日本地名大辞典 石川県』(1981年)336頁, 佃和雄・永井雄三・木立雅朗「門前町・大生製鉄遺跡群の¹⁴C年代測定」『石川考古学研究会々誌』30(1987年)。
- (193) 寺社に通ずる幹線道路の両側に在家町等が形成され, 南方に市場が設営された事例として, 尾張・海東上庄新屋郷甚目寺門前町等が挙げられる(小林健太郎『戦国城下町の研究』1985年, 265～266頁)。なお, 小林氏も15世紀前半代頃に地域市場の淘汰がすすみ, “局地的再生産圏”の核として村落市場(定期市)が一般化し, 他方, 城郭と結合した城下町の中心集落(城下市町)が形成されると説く。
- (194) 註191文献によるが, 再点検を要する。
- (195) 室岡博『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』上越市立総合博物館(1972年), 伊藤信太郎・室岡博・金子拓男「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」『越佐研究』35(1975年)。
- (196) 三島郡間瀬沖, 角田沖の片口鉢は大小入れ子の状態で揚陸され, 前者は縄で十字文に緊縛した痕跡をとどめていたという(前掲『粟島』21頁)。
- (197) 磐舟文華館保管資料。斎藤誠一氏の配意により調査。
- (198) 岡本郁栄・金子拓男・家田順一郎・高橋陽子「西高志の考古学的調査」『寺泊・出雲崎』(1977年)。
- (199) 註183徳田文献, 110頁以下の一覧表参照。
- (200) 脇田晴子「中世土器発掘と商品流通 素描」『岩波講座日本考古学』月報7(1986年)。
- (201) 新城常三「北陸道荘園の年貢輸送(1)」『成城文芸』87(1979年)。
- (202) 網野善彦「中世前期の水上交通について」『茨城県史研究』43(1969年)。
- (203) 石井謙治「Ⅱ中世の海洋技術」『交通史』(1970年)85頁他。
- (204) 註107文献。
- (205) 川上貞雄『横峯経塚群』安田町教育委員会(1979年)。
- (206) 小山富士夫「新潟県三島郡出土の高麗白磁」『仏教芸術』11(1951年)。
- (207) 註4文献。

- (208) 垣内光次郎「滑石製品（石鍋・温石）の出土地について」『石川考古』181(1988年)。
- (209) 坂井秀弥「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』1(1988年)。
- (210) 小野正敏「出土陶磁よりみた15, 16世紀における画期の素描」『MUSEUM』416(1985年), 福井県教育委員会『朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ(1979年)。
- (211) 拙稿「中世陶器の生産経営形態—能登・珠洲窯を中心に—」『国立歴史民俗博物館 研究報告』12(1987年) 59頁以下。
- (212) 註124文献。
- (213) 註30文献640～642頁表2～7。
- (214) 註91字野文献。
- (215) 池崎譲二「博多出土陶磁器の組成について」『貿易陶磁研究』4(1984年)。
- (216) 西野秀和・東四柳史明他『鳥越城跡発掘調査概報』石川県立埋蔵文化財センター(1979年)。
- (217) 註66文献, 川上貞雄『茶盃記』再考『水原郷土誌料』10(1978年), 長谷部楽爾「石川県小松市波佐谷出土の古陶磁」『MUSEUM』255(1972年)。
- (218) 滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江出土の施釉陶器—多彩釉, 緑釉, 灰釉, 瀬戸, 美濃—』(1986年)。
- (219) 脇田晴子氏は, 1540年頃以降の金銀比価の変動に伴い中国陶磁は原価で1枚1文程度と算定され, 以後の大量輸入・流通を予測される(「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ, 1986年)。確かに従来やや莫然と中国陶磁を高価な高級品とみなしてきた先入観は, 繰述してきた門前・港湾町や城館, ないし守護(戦国)大名の中世城下町における消費状況から修正を要するが, 16世紀前半代以前の一般農村の貧弱な流通実態が, 少なくとも中世後期で身分的規制あるいは輸入量の不足に基因したと考えられない以上, 在地の土師器と等価ないし以下であったとは考えにくく, 16世紀中葉以降の状況と同一視できない。この点は, 中世陶磁器の“商品”性, あるいは前期と後期ないし末期の性格の差異とかかわらせて, 今後の検討課題としたい。
- (220) 註2拙稿。
- (221) 三上次男「東北アジア史上より見たる沿日本海地域の対外的特質」『アジア文化』11—1(1974年)。
- (222) 『平安遺文』4673・4674。
- (223) 中世の対岸交渉関係記事については, 森克己『日宋貿易の研究』(1948年)他参照。
- (224) 小嶋芳孝他『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅰ, 石川県立埋蔵文化財センター(1986年)。
- (225) 小島鉦作「越前国気比宮の荘園的領知について」『政治経済論叢』11—2(1961年)。
- (226) 豊田武「延暦寺の山僧と日吉神人の活動(1)(2)」『法政史学』26・27(1974・75年), 浅香年木『治承寿永の内乱論序説』(1981年)149～150頁。
- (227) 高瀬重雄「放生津・三国両湊の争論をめぐる考察—中世日本海海運史のひとこま—」『日本海海運史の研究』(1967年)他。
- (228) 石井謙治「北国地方における廻船の発達—とくにハガセ船・北国船・弁才船について—」『日本海海運史の研究』(1967年)。
- (229) 網野善彦「若狭国における『浦』の成立」『民衆の生活と文化』(1978年)。
- (230) 網野善彦「中世における漁場の成立」『史学雑誌』72—2(1963年)(註229文献とともに加筆・修正の上『日本中世の非農業民と天皇』に収録)。
- (231) 三好基之「中世備前焼の交易」『海底の古備前・水ノ子岩学術調査記録』(1978年), 石井進「中世窯業の諸相」『講座・日本技術の社会史』(1984年)。

(昭和62年8月成稿, 昭和63年10月補筆)

本稿は特別研究「地域性の総合的研究—東国と西国—」の研究成果の一部である。

付表1 西川島遺跡群陶磁器組成表(破片総数)

時 期		14 世 紀 代		15 世 紀 代 (%)			
産 地	洲	甕		188 (28.4)			
		壺		109 (16.5)			
珠	洲	片 口 鉢		364 (55.1)			
				661<45.0>			
越	前	甕		1			
瀬 戸 美 濃		平小	碗	2	5	104	184
		小	皿	0		19	
		天	坏	2		6	
		目	碗	1		55	
		四	耳	壺	3	1	30
		瓶	口	壺		0	
		広	口	壺		1	
		茶	小	壺		5	
		折	縁	深	0	41	56
		柄	付	皿		0	
		片	口	鉢		0	
		香	形 容	炉	11	18	55
		花		瓶		10	
		筒		器		0	
		合		子		0	
		入		子		0	
茶	入	0					
燭	台	0	1				
				19	325		
				344<23.4>			
中 国 陶 磁		青 磁	碗	136	142	117	132
			坏・皿	6		15	
				(香 炉)	8		
				壺	5		
		白 磁	碗	12	22	1	108
			皿	10		103	
			坏	0		4	
		青白磁	瓶 子	5			
		(黒釉 天目碗		11)			
						169	240
				409<27.9>			
				(時期未詳分除く)			
瓦	器	火 香	舎 炉	44	53<3.6>		
				9			
合	計	1,468<100>					
〔参考〕 漆	器	碗 皿		27	41		
				14			

*註30文献641～642頁表より作成。

付表2 西川島遺跡群白山橋遺跡陶磁器組成表 (口縁部・底部片数)

機能		貯	蔵	調	整	供	膳	宗	教	他	暖	房	他	計(%)
産	地													
国産	珠洲 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ)	甕壺 21+7=28	片口鉢 6+3=9											37 (19.1)
	瀬戸美濃 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)		折縁深皿 0+7+0 柄付片口 0+2+0 卸皿 0+6+0	15	平碗 0+22+0 小皿 0+1+10 小碗 0+0+2 天目 0+5+3	43	香炉 1+8+0 花瓶 0+0+0 筒形容器 0+3+0 合子 0+2+0 入子 0+1+0	15						73 (37.6)
	瓦器 (Ⅴ)										火舎他	21		21 (10.8)
輸入(中)	青磁 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)					碗 15+13+2 坏 3+0+0 盤 2+0+0	35							63 (32.5)
	白磁 (Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)					碗 1+0+1 皿 0+10+6 小坏 0+0+1	19							
	青白磁 (Ⅲ・Ⅳ)	梅瓶 1(胴)												
	染付 (Ⅶ)					碗 1 皿 5	6							
	黒釉 (Ⅲ・Ⅳ)					天目碗	2							
計 (%)		29 (14.9)	24 (12.4)			105 (54.1)		15 (7.7)			21 (10.8)			194 (100)

* 註30文献641～642頁表「Ⅳ 白山橋遺跡」より作成。

付表3 尻八館遺跡陶磁器組成表(個体数)

機能		貯	蔵	調	理	供	膳	宗教他	暖房他	計(%)
産地										
国産	珠洲 (N+V・M)	壺 T 1+1 K 0+1 R 0+2	5	鉢 2+19=21						26 (14.0)
	越前 (V・M)	壺	2							2
	信楽他 (V・M)	壺	3							3
	瀬戸美濃 (V・M)	瓶子 1 広口壺 1 四耳中壺 1	3	折縁深皿 4	小皿 7 天目碗 2	9	香炉 4			20 (10.9)
	瓦器 (V・M)							火舎他 9		9 (4.8)
	土師器 (V・M)		片口鉢 4		皿 1(漆繪)					5 (2.7)
輸入	青磁 (N・V・M)	広口壺 1 瓶 1	2		碗 43 坏 5 盤 3	51	香炉 3			56
	白磁 (N+V・M)				碗 3+0 皿 0+45 小坏 0+5	53				53
	染付 (M)				碗 3					3
	黒釉 (M・N)				天目碗 3					3
	黄褐釉 (V・M)	四耳壺	3							3
	朝鮮陶磁 (V・M)	壺 1 瓶 1	2		皿 1					3
計(%)		20 (10.8)	29 (15.6)	121 (65.1)	7 (3.8)	9 (4.8)	186 (100)			

* 註119文献「第Ⅲ章第2節」より作成。

*** 珠洲は実見・集計。

付表4 境関遺跡陶磁器組成表 (最大個体数)

機 能		貯 蔵	調 理	供 膳	宗 教 他	計(%)
産 地						
国	珠 洲 (I・II・III・ N+V・VI)	甕 5+14+2 壺T 11+ 4+4 壺K 0+ 0+1 壺R 1+ 0+0	鉢 14+60+72 =146			188 (41.2)
	越 前 (III・N+V・ VI+VII)	甕 2+ 0+0 壺 1	鉢 0+0+1=1			4 (0.9)
	類 珠 洲		鉢 0+0+4+0=4			4 (0.9)
産	瀬戸美濃 (II・III・N+ V・VI+VII)	瓶子 4+2+0+0 小壺 0+0+1+0	深皿 0+0+6+0 卸皿 1+1+3+0	平碗 0+0+24+0 小皿 0+0+11+3 天目碗 0+0+14+3	香炉 0+0+11+0 花瓶 0+2+ 2+0 茶入 0+0+ 1+0 水滴 0+1+ 0+0 不明 0+0+ 4+0	94 (20.4)
	輸 入	瓶 0+1+0=1		碗 20+68+1 鉢 4+ 1+0 盤 2+ 2+0 皿 0+ 0+7	香炉 1+0+0=1	107
国	青 磁 (III・N+V・ VI+VII)			碗 1+12+5+0 皿 0+0+28+4 小坏 0+0+ 1+0		51
	白 磁 (N+V・VI+ VII)					1
	青 白 磁 (III・N)	瓶子	1			5
	染 付 (VII)			皿	5	
朝鮮	象眼刷毛目 (V・VI)	瓶	1	碗	2	3 (0.7)
計 (%)		54 (11.8)	162 (35.5)	219 (47.8)	22 (4.8)	457 (100)

* 註120文献284～289頁表より作成。

** 珠洲は各時期の口縁部数より比例配分。

*** 私見により一部年代観・分類補正。

付表5 坪ノ内遺跡陶磁器組成表(個体数)

機能 産地		貯	蔵	調理	供膳	宗教他	暖房他	計(%)
国産	珠洲 (V・VI+VII)	甕 15+0 壺 3+0 片口鉢 4+0	22					22 (20.8)
	越前 (VII)	甕 3 壺 2	5					5 8 (7.5) 3
	信楽他	壺 0+2 片口鉢 1	3					
	瀬戸美濃	茶壺 0+1=1	折縁深皿 1+0=1	碗 1+0 天目碗 0+3	4	香炉 1+0=1		7 (6.6)
	瓦器						火舎 5+0 香炉 1+0	6 (5.7)
輸入(中国)	土師器			皿 33 坏 2 鍋 1 他 1	37			37 (34.9)
	青磁			碗 6+4 皿 0+4	14	香炉 1		15 3 6 2 26 (24.5)
	白磁			碗 0+0 皿 1+2	3			
	染付			碗 0+3 皿 0+3	6			
	黒釉壺	2						
計(%)		33 (31.1)	1 (0.9)	64 (60.4)	2 (1.9)	6 (5.7)		106 (100)

* 註121文献「第4表、第V章」より作成。

付表6 港湾遺跡出土中世陶器時期・産地別集計表(基本三種口縁数)

遺跡	時 期		Ⅱ	Ⅲ・Ⅳ	Ⅴ・Ⅵ	計(%)
	産 地					
普正寺	越前	前	0	17	19	36 (51)
	加賀	賀	0	6	0	6 (9)
	珠洲	洲	1	14	14	29 (41)
	小	計(%)	1 (1)	37 (52)	33 (47)	71 (100)
後城	珠洲	洲	2	14	28	44 (96)
	越前	前	0	1	1	2 (4)
	小	計(%)	2 (4)	15 (33)	29 (63)	46 (100)
十三	珠洲	洲	0	11	18	29 (88)
	越前	前	0	2	2	4 (12)
	小	計(%)	0 (0)	13 (40)	20 (60)	33 (100)
計 (%)			3 (2)	65 (43)	82 (55)	150 (100)

* 「普正寺」(採集)は越前・加賀判別不明あり。

** 「後城」は註21文献より作成。

*** 「十三」は青森県文化課・市浦村役場・十三小学校・鈴木克彦氏。

資料 宮崎五三郎氏採集資料集計

付表7A 普正寺遺跡(第1次)中世陶器産地・器種別集計表(破片総数)

器 種 産 地		甕				小計	壺			小計	鉢			小計	合 計(%)
		口	胴	底	(押印)		口	胴	底		口	胴	底		
越 前		21	104	9	(16)	134	3	0	1	4	4	4	6	14	152 (51)
加 賀		3	19	1	(4)	23	3	0	0	3	0	0	0	0	26 (9)
珠 洲		10	45	1		56	0	4	3	7	19	28	12	59	122 (41)
小 計		34	168	11	(20)	213	6	4	4	14	23	32	18	73	300 (100)

北東日本海域における中世陶磁の流通

付表 7 B 普正寺遺跡(第 1 次) 中世陶器産地・時期別集計表 (口縁部数)

産地	時期	器 種	Ⅱ		Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	小 計(%)
越 前		甕	1			12		8	21<75>
		壺	3			0		0	3<11>
		鉢	3			1		0	4<14>
		小計(%)	7 (25)			13 (46)		8 (29)	28 (44)
加 賀		甕	2			1		0	3<50>
		壺	2			1		0	3<50>
		鉢	0			0		0	0< 0>
		小計(%)	4 (67)			2 (33)		0	6 (9.5)
珠 洲		甕	0	1		8		1	10<34>
		壺	0	0		0		0	0
		鉢	1	1		4	9	4	19<66>
		小計(%)	3 (10)			12 (41)		14 (48)	29 (46)
計(%)			14 (22)			27 (43)		22 (35)	63 (100)

付表 8 普正寺遺跡(第2次)陶磁器組成表(破片総数)

機能		貯 蔵	調 理	供 膳	宗 教 他	暖 房 他	計(%)
産 地	珠 洲	甕 321 壺 216 他 121	片口鉢 191				849 <32.4>
	越 前	甕 834 壺 69 他 416	片口鉢 22				1,341 <51.5>
	加 賀	甕 273 壺 12 他 111	片口鉢 10				406 <15.6>
	信 楽	壺 8					8 <0.3>
産 地	瀬戸美濃	瓶 45 水注 2 壺 8	折縁深皿 29 卸皿 28	平碗 11 小皿 70 小坏 2 天目 54	香炉 16 花瓶 15 筒形容器 1 茶入 5 他 66		352 (3.2)
	瓦 器		羽釜 13		花瓶 4	火舎他 15	32 (0.3)
	土 師 器			皿 7,715			7,715 (70.0)
輸 入	青 磁	壺 3		碗 159 皿 10 坏・鉢 10 盤 17	香炉他 23		222
	白 磁 (N+V・M)	壺 7		碗 3 皿 11+52	他 17		90
	青 白 磁	水注他 3					3
	染 付	瓶 1					1
	黒 釉			天目碗 7	茶入 2		9
計 (%)		2,450 (22.2)	293 (2.6)	8,121 (73.6)	149 (1.4)	15 (0.1)	11,028 (100)

* 註151文献「第5表」より作成。

付表9 後城遺跡陶磁器組成表(口縁部数, ()は体部片)

機能		貯	蔵	調	理	供	膳	宗	教	他	暖	房	他	計(%)
産 地														
国	珠 洲 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ)	甕 7+4+0 壺 0+2+0	13	片口鉢 7+14+8=29										42
	越 前 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ)	甕 1+0+0 壺 0+1+0	2	片口鉢 0+0+3=3										5
	瀬戸・美濃 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)	瓶子 3+0+0 四耳壺 (1)+0+0	4	折縁深皿 0+2+0 卸皿 0+3+0	5	平碗 0+6+0 小皿 0+9+4 小碗 0+1+0 天目碗 0+2+0	22	香炉 0+1+0 花瓶 0+(3)+0 筒形容器 0+(1)+0	5					36 (25.9)
産	瓦 器 (Ⅴ・Ⅵ)										火舎 0+1+0 香炉 0+1+0	2		2 (1.4)
入(中国)	青 磁 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)					碗 8+10+7 杯 0+0+13 盤 0+1+1	40							40
	白 磁 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)					碗 2+0+0 皿 0+5+1 小杯 0+1+1	10	合子	1					11
	染 付 (Ⅶ)					皿 0+0+3=3	3							3
計 (%)		19 (13.7)		37 (26.6)		75 (54.0)		6 (4.3)		2 (1.4)				139 (100)

* 註21文献本文図版より作成。

付表10 港湾・門前遺跡と村落的遺跡の供膳器対比表 (15世紀代, 口縁部・底部数)

遺跡	器 種	輸 入			小 計	国 産	小 計
		青 磁	白 磁	黒 釉		瀬戸・美濃	
普正寺(第二次)	天 碗 目 碗	31		3	34	7 6	13
	皿 坏	1	13 4		18	19 (折縁2)	19
	盤 他	5			5	5	5
	小 計	37	17	3	57		37
後 城	天 碗 目 碗	10			10	7 2	9
	皿 坏		5 1		6	9	9
	盤 他	1			1		1
	小 計	11	6		17		19
白 山	天 碗 目 碗	13			13	3 3?	6
	皿 坏		9 1		10	2	2
	盤 他	1			1	4	4
	小 計	14	10		24		12
道 下 元	天 碗 目 碗	30	1		31	6 2	8
	皿 坏	2	40 10		52	6 1	7
	盤 他	4			4		
	小 計	36	51		87		15
白 山 橋	天 碗 目 碗	13			13	22 5	27
	皿 坏		10		10	1	1
	盤 他						
	小 計	13	10		23		28

* 「普正寺」・「白山」は註151・168文献本文図版より作成, 「後城」は「第13表」, 「道下元」は「第15表」, 「白山橋」は「第6表」に拠る。

** 小碗も碗に加算。

付表11 道下元遺跡出土陶磁器組成表 (口縁部数)

機 能		貯	蔵	調	理	供	膳	宗 教 他	暖房他	計(%)
産 地										
国 産	珠 洲 (Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)	甕 5+17+23 壺T 0+ 2+ 3 壺K 0+ 0+ 2 壺R 0+ 0+ 4	56	片口鉢 4+9+66=79						135 (36.8)
	越 前 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)	甕 2+9+10 壺 1+2+ 4		片口鉢 0+2+14=16						44 (12.0)
	瀬戸・美濃 (Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)	瓶子 2+0 瓶 1+0	3	折縁深皿 5+0 卸皿 3+0 柄付片口 1+0	9	平碗 6+0 小皿 6+9 小碗 1+0 天目碗 2+7	31	香炉 6+0 花瓶 1+0	7	50 (13.6)
	瓦 器 (Ⅴ・Ⅵ)								火舎 7	7 (1.9)
	土 師 器					皿 37以上				37以上
輸 入	中 青 磁 (Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)	瓶子 1+0+0 小瓶 0+1+0	2			碗 4+30+9 坏 2+ 2+0 皿 0+ 0+5 盤 0+ 4+0	56	香炉 0+1+0=1		59
	白 磁 (Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ)					碗 3+2+ 1+0 皿 0+0+40+2 小坏・碗 0+0+10+0	58			58
	染 付 (Ⅶ)					皿 4				4
	朝 鮮	四耳壺 2 瓶 1	3	鉢 2	碗 5					10 (2.7)
計 (%)		92 (25.1)		106 (28.9)		154 (42.0)		8 (2.2)	7 (2.0)	367 (100)

* 註191文献本文・図版を実見により補正作成(珠洲・越前は口縁数, 他は破片総数)。

** 全体比は土師器除外。

Distribution of Medieval Ceramics in North-East
Littoral Area on the Sea of Japan

YOSHIOKA Yasunobu

Although the data have so far been accumulated on the distribution of medieval ceramic wares by their respective production sites, it has not yet attained such a development stage as to define and evaluate the distribution stratum, and to elucidate the locality of economic specialization structure reflected on the constitution of ceramics, all throughout the comprehensive analysis of the constitution by time, type and production site, of the ceramics to be found in such medieval vestiges as villages, manor houses, tombs, harbors and so forth.

This paper is an attempt to consider, from the viewpoint of social strata of the possessors of ceramics and in grasping them by development stages, their wide distribution in and between the regions, in limiting our study to civilian goods which are so difficult to seize by philological researches as well as in quantifying, as far as possible, the actual state and characteristics of the constitution of ceramics, especially the medieval ones to be found in a wide variety of vestiges dispersed in the field of the north-eastern littoral districts on the Sea of Japan.

In order to investigate into the distribution of medieval ceramics over the said districts during the five centuries from the middle 11th c. up to the end of the 16th c., we have divided this duration of developmental evolution into three stages six periods drawing dividing lines at the beginning of the 14th century when "tamasu" ceramics enlarged their market all over the littoral area on the Sea of Japan, and at the beginning of the 16th century when "Echizen" ceramics will be distributed all over in place of the "tamasu" ceramics whose kilns would at last be abolished. In the first stage, in the middle of the 12th century, various ceramic kilns were opened in Kaga and Echizen provinces as well as "tamasu" and tamasu-descent kilns, thereby forming labor division spheres by province and by a unit of several provinces respectively. Thereafter up until the 13th century, the tamasu kilns and diverse tamasu-descendent kilns rivaled

each other in the Noto Peninsula and the east region thereto. This type of dual structure of distribution would be 'colaterally supported by coexistence of remote distribution to be assumed from the remains of sunken ships and the distribution by cargo-vessels going all along the littoral districts.

Next, in the later medieval age from the 14th to 15th centuries (the second stage), the tamasu ceramics will occupy about one quarter of the Archipelago of Japan as a whole, as their commercial territory, during which the cermaic for daily use (earthen ware pots, bowls and lipped bowls) were distributed even into the lower social stratum (lower class of farmers) in farm villages.

Increased demands for cinerary urns by the lords of the manor and by the upper social class in farm villages might be one of the causes of increased distribution volume of ceramics. This phenomenon is to be considered as the other face of the establishment of large markets in inland regions, the production development by division of labor, the progress of the maritime transportation between remote countries and the appearance of a series of nuclei harbors and their surrounding towns the most flourished in the first half of the 15th century as the bases thereof.

Abundant consumption in Chinese and Japanese cermaics seen in the vestiges at certain harbor towns and temple surrounding towns, such unearthed high-quality Chinese ceramics as "Sierhu", "Meiping", and "Shuizhu" which are to be counted as one of the status symbols for the social stratus of loads of manor, imply, different from the constitution in common farm villages, the enhanced distribution economy through intermediary of "Toimaru" merchants.

It is expected henceforth that the reserach and investigations into the life culture of common people will further be deepened by elucidating varied phases of material civilization made possible by the development of the archaeology on medieval ages.